

「モノグラフ・中学生の世界」 を振り返って

深谷昌志

1. モノグラフの始まり

モノグラフ・シリーズは小学生、中学生、高校生の3シリーズが刊行されてきた。その中で、最も発刊が早かったのは、「モノグラフ・中学生の世界」の1978（昭和53）年4月だった。次いで、1980（昭和55）年2月に「モノグラフ・高校生」、さらに、1981（昭和56）年6月に「モノグラフ・小学生ナウ」が発刊された。それから、現在にいたるまで、20年以上にわたって、「モノグラフ・中学生の世界」は79号、「モノグラフ・高校生」は73号、「モノグラフ・小学生ナウ」は年間12本の時期があったので181本に達し、児童や生徒を対象とした333本の調査レポートを発表してきた。

本シリーズのきっかけは1977（昭和52）年にさかのぼる。現在では、大企業の仲間入りをしているベネッセコーポレーションも、当時は岡山に本社を持つ福武書店という名前の小さな受験産業だった。家庭に配布された国語や算数（数学）の問題を解いて送ると、赤ペン先生の添削が返送される。そうしたシステムが、子どもや親の支持を得ていた。創業者である故福武哲彦社長とお会いした際、赤ペン先生は通信教育の教材なので、きちんとしたマーケットリサーチをして、難易度や子どもの充足感を分析してほしいという依頼を受けた。

福武哲彦社長の熱意に押される感じで、マーケットリサーチを引き受けることにしたが、今から25年以上昔のことなので、研究者として、企業の内部調査を手がけるのに抵抗もあった。そこで、マーケットリサーチをする代わりに、子どもを対象とした調査を実施しているので、その報告書を印刷してほしいと頼んだ。

2. モノグラフの運営

福武哲彦社長は、創業者らしく、決断の人だった。子ども調査の説明を聞いて、すぐに関心を示してくれた。そして、そうした研究活動を積極的に支援しようと確約してくれ、1か月もしないうちに、モノグラフの骨格が固まった。

- ① 研究者や現場の教師を中心とした同人会組織を作り、同人会で、調査テーマの決定や調査票の作成、調査結果の分析、報告書の作成を行う。
- ② 福武書店の教育研究所は、調査の実施や調査結果の配布などを行う。
- ③ 調査結果は、結果配布後、同人と研究所とで自由に利用できることにする。
- ④ 同人会は研究ベースで運営するので、福武書店から調査関係の実費と会合費、報告書の原稿料を支援してもらうが、同人の日当や交通費、資料費などは要請しない。

こうしてモノグラフは、福武哲彦社長と深谷昌志との信頼関係に基づいて発足し、その後、20年以上にわたって、継続されることになった。ここまで永く続けられた成功の鍵は、ベネッセコーポレーション（福武書店）と同人会との関係の持ち方だったように思う。

同人会サイドからすると、テーマ設定から調査票の作成、データの分析など、研究ベース（原

稿料と会合費以外無償)で行うので、精度の高い知的なデータを一般企業に提供する感じがする。また調査にかかる実費を負担してもらえるので、積極的に調査に取り組める。さらに同人と福武書店との共同研究の形をとっているので、研究プロジェクトに参加し、良質のデータをまとめることができれば、研究者としての資産を入手できることになる。

福武書店からすると、調査研究が研究ベースで行われるので、コスト的に安くすむ。そうはいつでも、モノグラフを印刷し、全国規模で報告書を配布するので、かなりの支出が必要になる。しかし、研究者と現場の教師で構成された研究同人が報告書を作成しているという認識が定着するにつれて、モノグラフを安心して利用する雰囲気が広まり、マスコミも、結果を取り上げるようになった。その結果、社会的に役立つデータを提供する企業として、福武書店の企業イメージや知名度が高まるという効果をもたらした。このPR効果をカウントすれば十分にペイできるという計算も成り立つ。

3. 「モノグラフ・中学生の世界」の成果

「モノグラフ・中学生の世界」の成果を振り返ってみよう。

① 中学生を対象とした調査を定着させた

現在では、中学生を対象とした調査は当たり前になっているが、モノグラフが刊行された当時、中学生の実証研究はあまり試みられていなかった。そうした意味では、モノグラフは中学生調査の先駆的な役割を果たしたと考えている。

② 中学生調査の形式を確立した

モノグラフでは、巻末に集計表と同時に、調査票を添付してきた。これも、当時としては画期的な試みだが、調査の透明性を確保し、他の研究者や教師による追跡調査を可能にすることを目的としていた。特別号の編集にあたって、古いモノグラフを読み直してみた。現在のレベルからすると、調査票のワーディングに手直したい項目が目につく。モノグラフを通して、ワーディングも含めて、調査票の形式を確立してきた感じがする。

③ 中学生からの視点を提起できた

モノグラフの結果は、予想した以上にマスコミに取り上げられた。そして、モノグラフのデータは我々の手を離れ、様々な形の情報として社会的に広まった。そして、中学生からの視点に立った分析が広く定着したように思われる。

④ 現場教師と研究者とが連携する1つの形を作った

モノグラフ作成にあたり、現場の教師の持つ問題意識と研究者の方法論的な技法とを合体させる目的で同人会を結成した。特に、「モノグラフ・中学生の世界」の場合、生徒指導が主たるテーマなので、中学教師たちの問題意識を踏まえて、調査票を作成することが多かった。

⑤ 企業と研究者との共同研究に1つの形を作った

現在でも、企業と研究者グループとの共同研究は難しい。理想を追求する研究者と現実的な利益を求める企業との間に一致点を見いだしにくい。そうした意味では、すでにふれたような枠組みで、20年以上にわたって、プロジェクトを組んできたのは奇跡に近い。

⑥ 昭和から平成にかけての中学生についてのドキュメントを残せた

例えば、1980年代の中学生が何を考えていたかは、今になると復元できない。そうした意味では、「モノグラフ・中学生の世界」は、1978年から2005年まで、ほぼ四半世紀にわたって、研究者の良心と現場教師の熱意に支えられて、中学生の心を追い求めてきた。こうしたドキュメントは、現在より、むしろ、これから先ますます貴重な資料になっていこう。歴史的に意味のあるこうしたプロジェクトに参加できたことは研究者冥利につきる。

1

全体として

深谷昌志

1. 地域差が消えた

中学生が変わったといわれる。変わったのは確かであろうが、どういう面がどの程度変化したのかがわかりにくい。特に中学生の世界から地域差が消え、どこの中学生も同じような成長をたどっている。

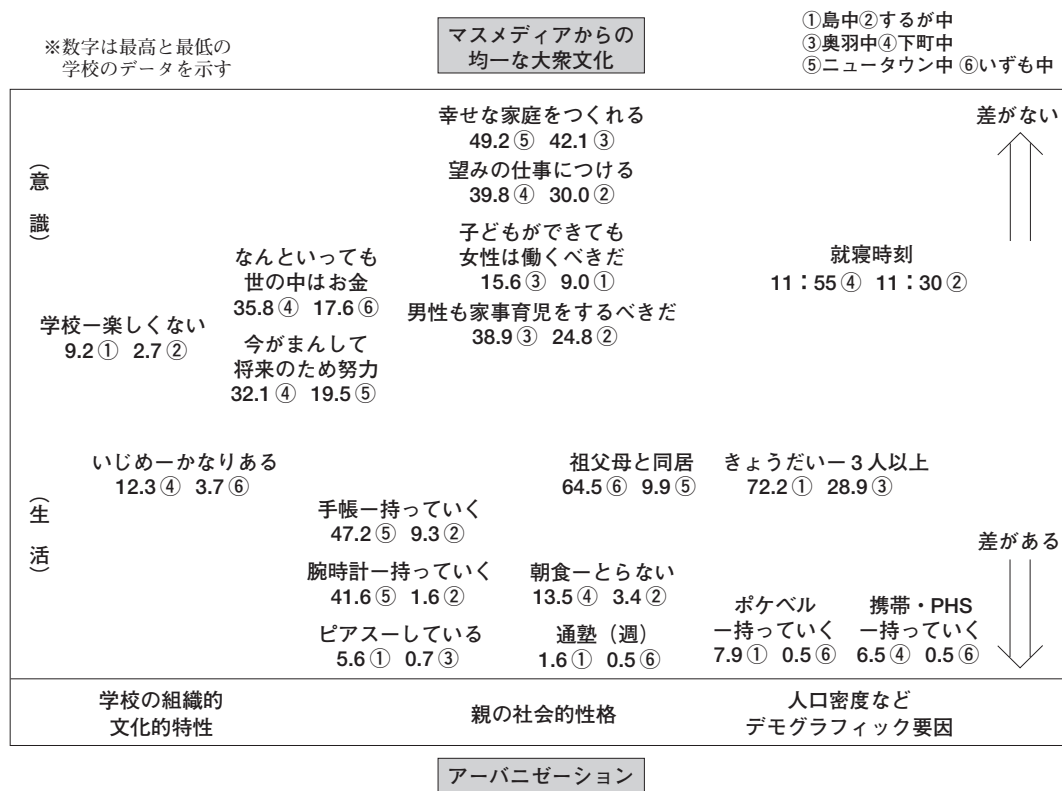
vol.60「都市の中学生・山村の中学生」(1998年)では、地域差がどの程度存在するのかを、6地域の中学を対象として検討してみた。6地域とは、東京の「下町中」と「ニュータウン中」、静岡の「するが中」、秋田の「奥羽中」、島根の「いずも中」、九州の島にある「島中」(いずれも仮名)である。詳しくは、同報告書を参照してほしいが、結論にあたる部分に、図1-1のような結果がある。

これは、6地域の中学校の中での差に着目して、「差がある項目」から「差がない項目」へ

と、位置づけたものだ。「携帯・PHSを持っていく」「腕時計を持っていく」などの持ち物や「通塾」などの行動には差がみられる。しかし、「幸せな家庭をつくれる」「望みの仕事につける」などの意識については、6中学校間にあまり差が認められない。行動に開きがみられるが、意識レベルでは地域差が認められないという結果である。

もっとも、地域差の消滅も当然のように思う。テレビゲームのソフトは全国一斉に発売されるし、コンビニのスナックも同じ時期に店頭に並べられる。もちろん、テレビ番組は全国共通だし、ヒット曲のCDも各地で同時に発売される。そうした意味では、中学生は全国的な商品流通の渦に巻き込まれている。

■図1-1 地域色のまとめ (vol.60 図3-9)



2. 2つの基準のとり方

そうしたとき、中学生の現在を捉えるためには、比較をする基準が必要になる。何かの基準に照らして、ここが歪んでいる、あるいは、ここは長所と指摘すればいい。ただ、基準として何をとるかが問題になる。

基準のとり方に2つが考えられる。1つは海外の中学生のデータとの横断的な対比であろう。もちろん、比較調査を行うには言語を含めてそれなりの困難さを伴うが、それを別にすれば、東京の中学生のデータをサンフランシスコやパリ、北京、ソウルなどの中学生と比較すれば、中学生の生活にそれぞれの開きが生じるのが当たり前である。ただ、北京には北京の中学生をめぐる状況があり、ソウルにもソウルの文化的・歴史的な背景がある。それだけに、開きが認められたとき、それをどう解釈するのかに難しさを感じる。

もう1つの基準のとり方は過去のデータと縦断的に対比させて、現在の中学生の姿を捉える努力であろう。この場合、適切な過去のデータを見つけるのが難しい。30年くらい前だと、中学生調査が少ない上に、コンピュータ集計が行われていないので、調査の設計が現在と異なる。加えて、研究にも流れがあって、どうしてもその時の関心で調査をしてしまう。そうした事情が重なって、時系列的な比較調査は意外に行いにくい。

vol.51「中学生は変わったのか」(1995年)は、1983年前後と対比させて、1995年の生徒の意識を分析した結果である。1983年と1995年とでは、時系列というにしては間隔が短い。また、1995年調査は約10年前の調査なので、現在からみて、どの程度の有効性を保っているかについて疑問も残る。

3. 時系列の変化から

しかし、そうした条件を視野におきつつ、調査結果を概観してみよう。1983年から1995年にかけての中学生の変化は以下の4点に要約できる。

① 規範感覚が緩む

1983年の場合、「自室でタバコをすう」を悪い（「とても十かなり」）と思っている生徒は79.7%を占めた。しかし、1995年の場合、悪いと思う割合は65.1%で、14.6ポイントも低下している。その他、図1-2が示すように、「他人の体育館ばきを無断で使用する」や「かるくパーマをかける」など、悪いと思

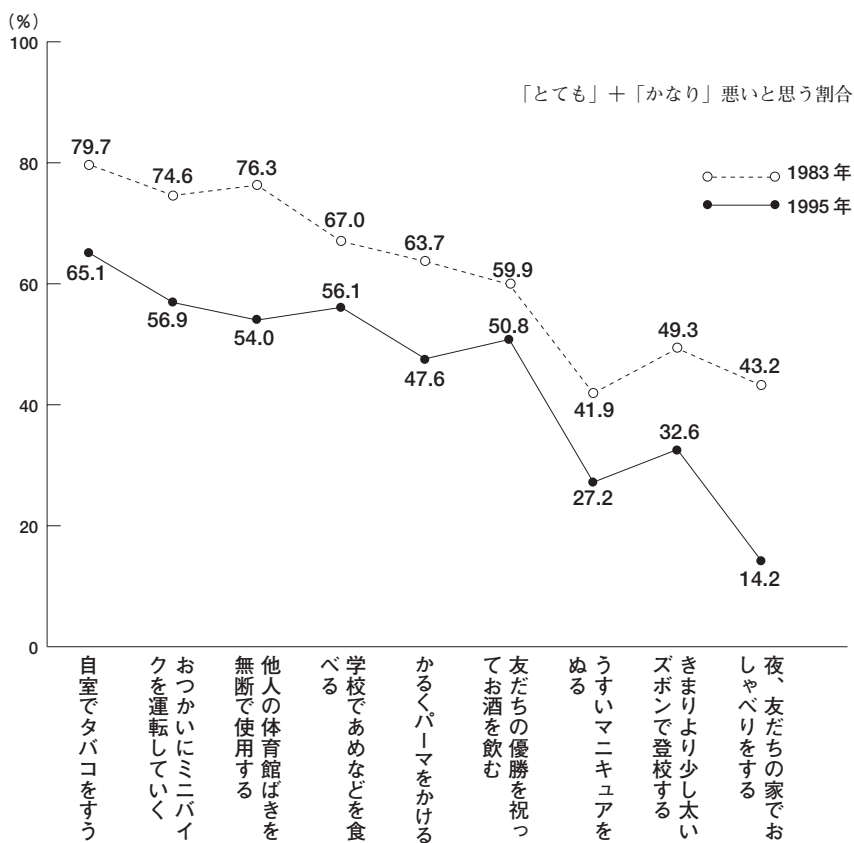
う感覚が低下している。

こうしたことを繰り返すのは、善悪の基準が緩み、問題を抱えた生徒なのであろう。そうした生徒が増加している。

② 社会的な達成意欲が低下

おとなになってから、社会的な達成を可能と思うかについての変化は表1-1の通りである。「大会社の社長」を除くと、7項目中の6項目で、なれる（「たぶん十もしかしたら」）と思う割合が低下している。将来に大きな望みを託せない中学生の姿が浮かんでくる。

■図1-2 悪いと思う割合（vol.51 図4から）



③ 伝統的な性役割意識が消えた

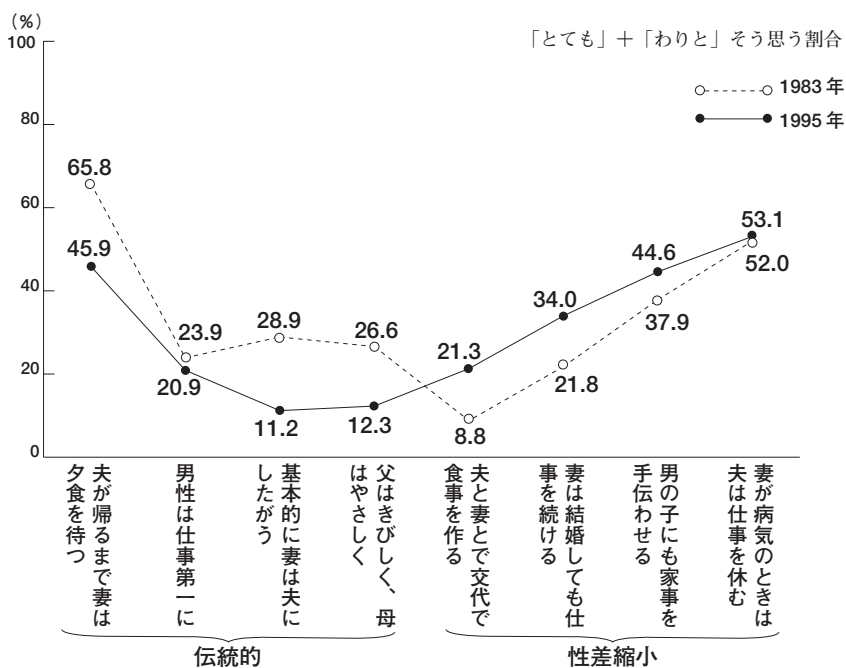
中学生は、最も性差を意識する時期といわれる。そこで、図1-3に目を通してほしい。この図の左半分は「伝統的な性差」のみられる行為、右半分は「性差の縮小した」状態を示している。図から明らかなように、「基本的に妻は夫にしたがう」に「とても＋わりと」

そう思う生徒は、1983年の28.9%から1995年の11.2%へ減少している。それに対し、「夫と妻とで交代で食事を作る」は8.8%から21.3%へ増加している。性差にこだわらずに、自分たちの家庭を作りたいという中学生が多くなっている。

■表1-1 社会的な達成—なれそうもない (vol.51 表22)

		なれる		小計	無理	
		たぶん	もしかしたら		かなり	とても
テレビによく出る一流歌手	83年	9.0	24.7	33.7	29.3	37.0
	95年	8.8	16.6	25.4	30.3	44.3
大会社の社長	83年	8.6	18.3	26.9	31.5	41.6
	95年	10.7	16.8	27.5	26.7	45.8
プロスポーツの一流選手	83年	8.9	24.7	33.6	28.3	38.1
	95年	9.3	17.4	26.7	25.4	47.9
難病の治療で知られる名医	83年	5.2	16.5	21.7	33.3	45.0
	95年	4.6	12.4	17.0	29.8	53.2
日本を代表する芸術家	83年	4.9	16.6	21.5	33.7	44.8
	95年	5.4	10.0	15.4	28.3	56.3
国会議員などの政治家	83年	5.3	20.0	25.3	28.2	46.5
	95年	5.8	12.1	17.9	25.2	56.9
日本を代表する大学教授	83年	4.7	9.9	14.6	30.8	54.6
	95年	4.9	7.1	12.0	26.5	61.5

■図1-3 性的役割について (vol.51 図7)



④ 親を超えにくい

親との関係を示唆した結果の1つに表1－2のような数値がある。父親に対してももちろんだが、母親についても、「25歳くらいになっても超えられそうにない」と思っている

生徒が増加している。この結果にいくつかの考察が可能だが、中学生が親を頼って、家庭に安住している姿が浮かんでくる。これが小学生なら問題が少ないが、中学生になっても、親に頼りきっているあたりが気になる。

■表1－2 親を超えられそうにない (vol.51 表9)

(%)

	父親		母親	
	83年	95年	83年	95年
人とのつき合い方	33.5	< 36.9	31.5	< 37.1
がんばる力	34.0	< 36.3	31.0	< 37.0
社会常識	49.5	< 53.3	39.5	< 44.6
社会についての見方	53.0	52.9	43.4	< 44.0
数学の学力	25.6	< 35.4	14.0	< 22.4
体 力	28.4	< 41.8	5.5	< 9.7
経済力	75.2	< 75.8	54.2	> 52.1

「親を（25歳くらいまで）超えられそうにない」と思う割合

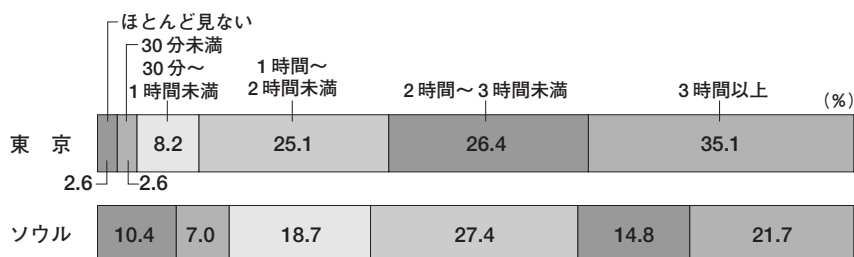
4. 国際比較を通して

時系列を追ってみると、前述のように、社会的な達成を断念して、家庭の中に安住している中学生の姿が浮かんでくる。こうした姿を視野に置いて、他の社会の中学生の姿を鏡として、日本の中学生を見つめると、日本の中学生の実像が浮かんでくる場合がある。vol.75「東京の中学生・ソウルの中学生」（2003年）では、日本と共通の地盤を持ちながら、独特な文化も兼ね備えているソウルの中学生を鏡として、東京の中学生を見つめてみたいと思った。ここでは、調査結果を4点にしばって考察することにしよう。

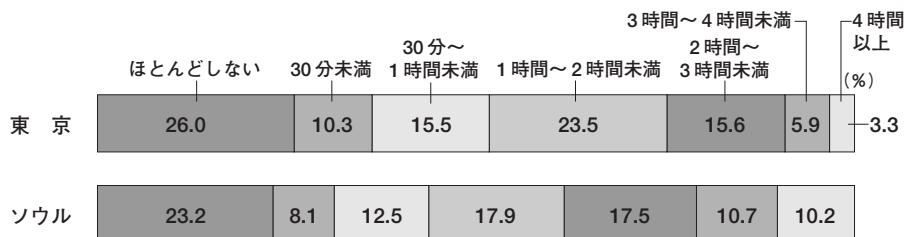
① のんびりとした生活（東京）

図1-4・図1-5が示すように、テレビを「2時間以上」見ている割合は東京が61.5%で、ソウルが36.5%と、25.0ポイントの開きがみられる。また、「2時間以上」勉強をしている割合は東京24.8%、ソウル38.4%で、ソウルの方が13.6ポイント多い。図式化すると、東京の中学生はのんびりとテレビを見て毎日を過ごし、ソウルの中学生は勉強を意識した生活を送っている。

■図1-4 テレビの視聴時間（vol.75 TOPIC ① 図1）



■図1-5 家庭学習時間（vol.75 TOPIC ① 図2）



② 難関大学志望が4割（ソウル）

将来の進路についての見通しを表1-3に示した。難関大学や大学院への進学を目指す者は、東京が15.9%なのに対し、ソウルは40.0%に達する。ソウルでは4割の中学生が望みの進学を意識してがんばっている。韓国は現在でも学歴社会で、ソウル大学を筆頭として、高麗大や延世大などの人気が高い。そうした有名大学へ進学するために、小学生のうちから、塾へ通ったり、家庭教師を頼む状況が目につく。

韓国では、日本のセンター試験に相当する大学進学共通テストを実施する頃になると、テレビでは、日本でいうところの水垢離をしたり、お百度参りをする母親の姿が映される。一家をあげて、子どもの進学を支援する風習が社会的に定着している。そうした緊張感が、①で触れた勉強時間の長さにつながったのである。

③ ビッグな目標は断念（東京）

中学生にビッグな目標を示して、達成の可能性を尋ねてみた。図1-6に示すように、「日本（韓国）を代表する大学教授」の職につけると思っている生徒は、ソウル40.2%、東京16.1%、また、「日本（韓国）を代表する芸術家」はソウル38.3%、東京17.9%である。ソウルの生徒はビッグな目標の達成を可能だと信じ、未来に希望を抱いて暮らしている。

④ 疲れている中学生（ソウル）

図1-7は東京とソウルの中学生の体調を「よく＋わりと」ある割合で尋ねた結果を示している。「気力がない」「夜眠れない」「頭がボーっとしている」のように、両都市の中学生の反応に差があまり認められない項目もみられる。しかし、8項目のうち、4項目に

ついては10ポイント以上の開きが認められる。特に、「貧血気味である」や「朝食欲がない」などでは、東京とソウルとの間に20ポイント以上の開きがある。ソウルの中学生は、東京の中学生より、「朝食欲がない」「気力がない」などを感じている。

全体として、東京の中学生に「のんびり」、ソウルの中学生に「疲れ」を感じる。

ソウルと対比させて、東京の中学生の特徴を拾うと、「のんびり」を感じる。東京の中学生は、学校へ行けば話し相手の友だちがいて、家庭では頼りになる親がいて、見守ってくれる。そして、のんびりとテレビを見て、体調もよい。毎日が楽しいという。ただ、将来に向けてがんばろうという気迫に欠ける【vol.75 TOPIC ③ 図2・TOPIC ④ 図1・TOPIC ⑤ 図1】。

ソウルの中学生の4割は難関大学への進学を目指してがんばっている。親の期待に応えて、社会的な達成への意欲も強い。そして、勉強時間も長い。しかし、ストレスのせいか、体調がよくなく、朝疲れている生徒が多い。学校も緊張感が強いのか、学校を休みたいと思う生徒も少なくない【vol.75 TOPIC ③ 図3】。

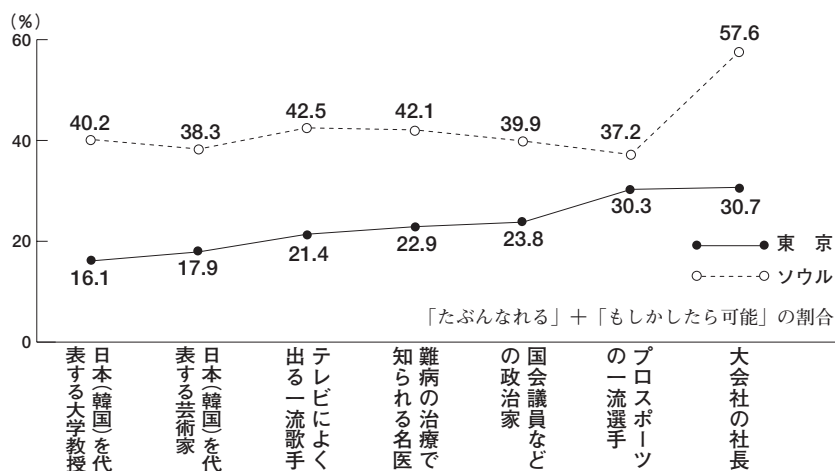
ソウルの中学生に、30年前の日本の中学生を連想する。日本では、「15の春」という言い方があった。そして、教育界では、中学生のそうした重圧を取り除こうとしてきた。ソウルとの比較結果によると、日本の中学生は重圧から解放された。それはよいのだが、中学生にひよわさや無気力さを感じる。のんびりしていてもよいが、自分なりに生きる目標を決め、がんばってほしい。のんびりした中学生はどうしたら意欲を燃やすようになるのか。新しい課題が提起された思いを強く抱いた。

■表 1-3 進学希望 (vol.75 表15)

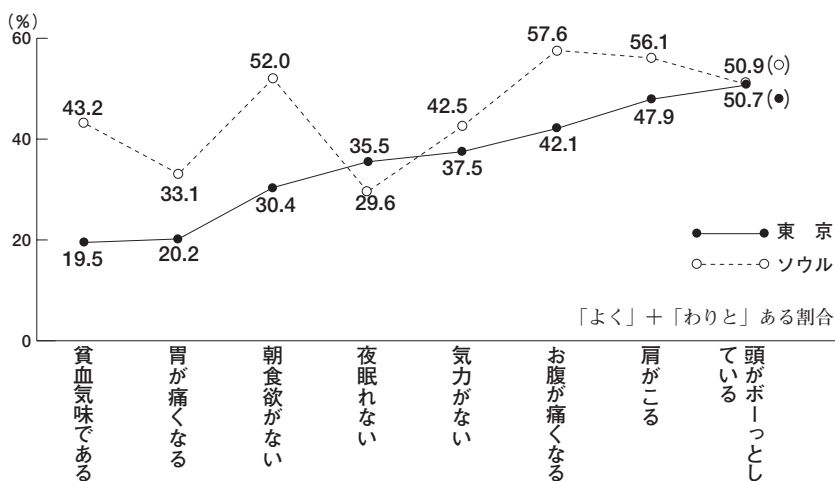
(%)

	全体		東京		ソウル	
	東京	ソウル	男子	女子	男子	女子
中学校まで	1.4	1.1	1.9	0.8	1.1	1.1
高校まで	14.8	4.6	16.8	12.4	5.4	3.6
専門学校や短期大学まで	23.6	15.0	13.5	35.4	14.9	15.2
小計	39.8	20.7	32.2	48.6	21.4	19.9
入学するのがふつうくらいの大学まで	26.6	27.4	26.3	26.9	24.3	31.3
入学するのが難しい大学まで	11.1	21.7	13.5	8.2	22.3	21.0
大学院まで	4.8	18.3	7.0	2.2	21.6	14.3
小計	15.9	40.0	20.5	10.4	43.9	35.3
未定	16.4	7.9	18.9	13.5	7.1	8.9
その他	1.4	3.9	2.1	0.5	3.4	4.5

■図 1-6 一生懸命がんばれば次のような仕事につけるか (vol.75 TOPIC 5 図 2)



■図 1-7 現在の体調 (vol.75 図 2)



2 学 校

田中統治

1. 中学校をめぐる動きと学校生活

中学生にとって学校は生活の大半を占めており、その多くは授業に費やされている。この10数年間に、授業のあり様は大きく変わってきた。例えば、1992年に月1回だった学校週5日制が、1995年から月2回に増えて、2002年から完全学校週5日制に移行した。週6日制と週5日制では、授業の進め方が変わるばかりでなく、学校生活も一変している。休日が増えた分だけ、平日が忙しくなった。これは日本の学校を大きく変えることになった。

また、中学校に限ってみれば、高校入試の改革が進み、推薦入試などの新しい方式が導入された。少子化も加わって高校受験の厳しさがゆるやかになった。それでも中学3年生にとっては高校入試が人生で初めて経験する関門であることに変わりはない。内申書の重視によってふだんの授業態度や提出物に気をつかう中学生もいる。

しかし、自宅での学習時間は減ってきており、学習習慣だけでなく生活習慣も身につけていない中学生が増えていることも確かであろう。先生たちはこうした中学生をどうすれば意欲的な生徒に変えられるかという課題に直面しているようだ。家庭生活を含めた生活指導に毎日追われている学校も少なくない。保護者の意識もこの10数年間に以前よりも大

きく変化している。

大都市部を中心に公立中学校への信頼感がゆらいでいる。私立中学や学習塾の方に信頼をよせる保護者が増えてきた。その理由は、かつて公立中学校が荒れていた時期があったからであるが、最近では「ゆとり」教育による学力の低下を心配するケースもみられる。公立中学校をどうすれば活性化することができるか。選択教科制や「総合的な学習の時間」で学校の特色を打ち出す施策や、学校選択制と外部評価に活路をさぐる改革も進められている。

教育改革の嵐が公立中学校に押し寄せ、教師たちは余裕のない状態に置かれている。競争原理が「学校の塾化」を招くのではないかという指摘がなされている反面、各学校は地域からの信頼を回復するため教育実績をどう評価してもらえるか不安に感じている。こうした外部の動きが学校生活にも影響を及ぼしているのであろう。

私事にわたって恐縮だが、この10年の間に、筆者の3人の子どもたちは同じ公立中学校を卒業した。このため、10年間の変化を身近に感じることができる。ヤンキーと呼ばれる子や、不登校になった子に接する機会もあった。いまは社会人、大学生、高校生になった彼ら

の学校生活はそれぞれ時代の動きを反映している。中学生は変わったかといえば、変わったところもあるし、変わらないところもある。大きな変化はコンピュータの普及であり、変わらない風景は部活動や登下校の様子である。

ここでは、中学校生活のトピックについて、ミクロからマクロにズーム・アウトする形で考えてみたい。そうすることで、生徒たちの眼から見た学校生活の実態を把握することができるだろう。

2. クラスによって違う満足度

表2-1は、「学校に通うことが楽しいか」について6段階評価で生徒が答えた平均値の高いクラス（値が大きいほど楽しくない）を並べたものである。表の右側の印（○：担任とうまくいっていないクラス、□：クラスの友だちとうまくいっていないクラス）をみると、平均値が上位の（つまり学校が楽しくない生徒が多い）クラスでは、担任や友だちとの関係がうまくいっていないようである。クラスの人間関係は学校の楽しさに影響するのであろう。

この調査は6月と11月の2回にわたって同じクラスで実施した。このため、夏休みをはさむ5か月間の変化をみることができた。その結果は、どういう担任のクラスに配属されるかが学校生活の楽しさを左右するというものである。保護者の間では以前から担任の「当たりはずれ」が言われてきた。表2-1

は、それを一定、裏づける結果であり、ある意味では、学校選択制以上に、「担任」選択制の方が必要なことを示している。

教科担任制をとる中学校では、学級担任の影響は小さいとみられてきた。しかし、クラスの人間関係をつくる上では影響がかなり大きい。このことは、学校関係者の間で「常識」に属するのかもしれない。しかし、「指導力不足」教師の問題が正式に取り上げられるようになったのは最近のことである。その判定基準や身分保証の問題は残るけれども、クラスへの影響がこれほど大きいことは直視しなければならない。

vol.57「学校内の人間関係」（1997年）の報告では、クラスを楽しいと思う割合が「わりと」（49.6%）を含めて80.7%に達していた【vol.57 図2-1】。またvol.69「居場所としての学校」（2001年）では、学校に通うこと

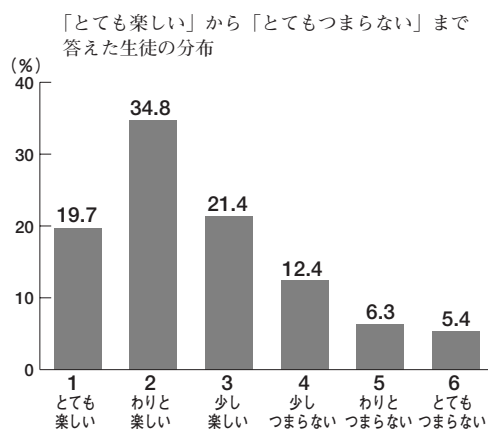
■表2-1 学校に通うことが楽しいか（クラス別平均値の比較）（2回目調査）

値が大きい(学校が楽しくない
生徒が多い)クラス

①	D中2-1	3.61	○
②	A中2-5	3.45	
③	A中3-7	3.35	○□
④	C中2-1	3.33	○□
⑤	C中3-1	3.28	○
⑥	D中2-3	3.28	○□
⑦	C中2-4	3.18	○
⑧	D中3-3	3.13	○□
⑨	A中2-7	3.09	
⑩	A中3-4	3.08	○

○は担任とうまくいっていないクラス、□は
クラスの友だちとうまくいっていないクラス

(vol.69 表2-4)



が楽しい(「とても十わりと」と思う割合が、57.5% (1回目調査) から54.5% (2回目調査) に若干、低下している【vol.69 図1-4】。これに影響している要因の1つが「教師との関係の悪化」であろう。以前よりも担任への

関心が薄い生徒や、人間関係に未熟な生徒が増えているようである。だから教師だけの問題ではないのかもしれないが、やはり生徒にとって「居心地のよい」クラスにする工夫が必要である。

3. クラスで友人をどうつくるか

中学生の時期は、異性への関心が高まるけれども、それ以上に、同性の友人との間で親密さを増す段階でもある。友人関係が「元気の源」にもなっていると言ってよい。その理由は、心を打ち明けられる関係をつくれるからである。性差はあるにせよ、クラスの中で誰を友人に選び、その友人とどう人間関係をつくっていくかという課題が中学生にとっての大問題である。

表2-2は、学校の楽しさの変化と、人間関係の好転・悪化との関係を調べた結果である。

これによれば、「楽しくない→楽しい」変化群において友人関係に好転がみられ、逆に「楽しい→楽しくない」変化群では悪化している。その変化の幅は、好転の場合にプラス

14.6ポイント、悪化の場合にマイナス18.6ポイントに達している。全体の変化幅はわずかにマイナス2.7ポイント(1回目77.3%→2回目74.6%)であるから、クラスでの友人関係の変化がいかに学校生活の全体に影響するかがわかる。なお、教師との関係の変化をみれば、好転の場合がプラス8.2ポイント、悪化の場合がマイナス26.5ポイントである。したがって、学校生活の楽しさへの影響は、強い順に、①教師との関係の悪化、②友人との関係の悪化、③友人との関係の好転、④教師との関係の好転である。この場合、友人との関係が好転する方が、教師との関係の好転よりも影響が大きいことが注目される。つまり、学校生活を楽しくするには、クラスに親しい友人をつくるのが先決なのである。

■表2-2 人間関係 × 学校の楽しさ (vol.69 表11)

		学校の楽しさ（とても十わりと／それ以外*）				(%)	
			楽しい→ 楽しい	楽しい→ 楽しくない	楽しくない→ 楽しい	楽しくない→ 楽しくない	全体
(とても十わりと うまくいっている)	教師との関係	1 回目	75.3 ∨	64.7 ∨	51.2 ∧	38.3 ∨	59.5 ∨
		2 回目	68.3	38.2	59.4	31.0	51.3
	クラスの友だちとの関係	1 回目	92.2	84.9 ∨	68.9 ∧	56.3	77.3
		2 回目	92.0	66.3	83.5	51.5	74.6
	部活動の友だちとの関係	1 回目	82.8	77.0 ∨	72.2	55.8	72.3
		2 回目	81.1	63.8	74.3	52.0	68.8
	学校外の友だちとの関係	1 回目	71.0	57.9	61.5	52.2	62.2
		2 回目	65.2	57.0	61.6	48.3	58.2
	親との関係	1 回目	86.7	72.3 ∨	71.1	58.0	73.9
		2 回目	81.2	64.3	72.2	54.3	69.3

*「それ以外」の尺度は、「少し楽しい」「少しつまらない」「わりとつまらない」「とてもつまらない」。

4. 授業や勉強をどう意味づけるか

中学生の中には、「なぜ、こんなことを勉強しなければならないのか」という疑問をもっている子どもが多い。以前は、「高校入試があるから仕方がない」「そんなことを考えても意味がない」とみなす傾向があった。しかし、現在では学ぶ意味を考えることもなく、学ぶことを投げ出している生徒が少なくない。2002年度から新しい学習指導要領に変わって、中学校で学ぶ教科内容が厳選された。けれども、授業がわからないという生徒の割合は減っていないようである。学習習慣が定着していない生徒に対しては学校の指導だけでは限界があり、家庭での習慣づけが必要である。そこで、vol.62「中学の勉強は必要なのか」（1999年）では、中学3年生の子をもつ保護者（357名）の勉強観や学力観を探るため、実際にテストをやってもらったうえで、中学生に必要だと感じる内容について意見を

きいてみた。表2-3は、教科・教科外の活動について中学生が学ぶべき必要性の割合を示している。

意外なのは「数学」の順位である。「とても必要」の割合では、11項目中の4位に位置している。受験教科としての順位は高いけれども、その必要性については中位である。おとなになれば、数学の必要性をそれほど感じないためであろうか。これと比べて、「国語」は8割弱、「英語」は7割弱の保護者が必要性を痛感している。どちらもコミュニケーションにかかわる言語能力なので、中学生の時期に確実に身につけさせたいと期待している。芸術系が低くなることは予想されたが、「理科」と「技術・家庭科」が「わりと必要」を加えても7割に満たない。母親が回答者の6割を占めることが関係しているのだろうか。

こうした保護者の勉強観は「理科離れ」の

■表2-3 中学校で学ぶ必要性（vol.62 表13）

	(%)							
	とても必要	わりと必要	小計	少し必要	あまり必要でない	ぜんぜん必要でない	将来役に* 立つか 「とても+わりと」	将来「とても役に立つ」*
国 語	76.2	20.4	96.6	3.1	0.3	0.0	74.4	21.6
社 会	45.9	39.6	85.5	12.7	1.5	0.3	60.8	20.5
数 学	47.4	30.7	78.1	17.3	4.0	0.6	36.4	11.4
理 科	30.0	38.4	68.4	22.6	7.1	1.9	24.4	6.8
美 術	18.6	29.4	48.0	39.0	11.8	1.2	11.4	5.1
音 楽	21.4	30.0	51.4	36.9	10.5	1.2	22.9	6.9
体 育	37.4	40.2	77.6	19.0	2.8	0.6	42.5	12.1
技術・家庭科	24.0	40.5	64.5	29.6	5.6	0.3	61.9	25.0
英 語	66.5	24.8	91.3	7.5	1.2	0.0	77.8	45.5
道徳や学級活動	54.3	31.3	85.6	11.3	2.2	0.9	49.7	20.0
部活動	47.3	32.3	79.6	15.7	3.4	1.3	51.4	19.4

*生徒調査

特徴を示しており、これが中学生にも影響しているのかもしれない。学ぶ意味は家庭で伝達されないと具体性をもたないから、勉強についても親子で話し合う機会がほしい。しかし、この調査では、わが子に「声をかける」けれども、「注意や勉強、相談」はやや手薄

なことがわかった。保護者も学校任せにならないよう努めている様子はあるが、子どもの内面にまで届くような接し方が足りないようである。学力低下の原因も家庭教育の不足が一因になっているのだろうか。

5. いまも変わらない受験の不安

高校受験は中学生活に不安の影を落としている。vol.30「高校進学」(1988年)と、vol.72「高校進学の現在」(2002年)のデータとを比較してみても、中学生の半数は不安に感じている。しかし、受験によるプレッシャーは確実に弱まっている。まず、半数弱の生徒が推薦入試によって合格している【vol.72 表3-2】。しかも、65.9%が志望通りの進学を果たしており(はじめから「ぜひやや」入学したかった学校の割合)、この比率は1988年の場合より14.9ポイントも高い(表2-4)。

高校入試の多様化にもかかわらず、生徒の不安が変わらない原因は何か。その1つに、塾通いの増加があげられるだろう。「週3日以上」塾に通う生徒は、30.7%(1988年)から51.9%(2002年)へ21.2ポイントも増加している。その塾での勉強が「大変役立った」と思う割合も30.2%から64.6%へと倍増している。高校受験は「塾頼み」に変わってきた

【vol.72 図1-2・図1-3】。その分だけ競争や失敗を意識して、受験への不安をかきたてられるのではないか。

もう1つの考えられる原因は勉強不足である。表2-5が示すように、中3の2学期の頃、平日の学習時間は2時間12分(1988年)から1時間57分(2002年)に15分ほど減っている。また、学校のある土曜日も2時間58分から2時間33分に25分短縮されている。わずかの時間差に見えるが、自宅で勉強しない生徒にとって受験への不安は大きいのではないだろうか。マイペースでのんびりした受験生活は、以前の受験地獄とは違っている。それでも、「15の春」は初めての試練として意識されている。

受験に不安を覚える一方で、高校生活への期待度は強まっている。高校へ入ったら、「学校行事に積極的に参加したい」(20.1%→48.4%)、「部活動を熱心になりたい」(21.8%→

■表2-4 進学する高校は、はじめから希望した学校か(1988年との比較)
(vol.72 表1-2)

	(%)	
	1988年	2002年
はじめからぜひ入学したかった学校	27.7	41.4
はじめからやや入学したかった学校	23.3	24.5
どちらともいえない	23.6	18.3
はじめはやや入学したくなかった学校	12.8	8.8
はじめはまったく入学したくなかった学校	12.6	6.9

■表2-5 中3の2学期の頃、家庭でどれくらい勉強したか
(1988年との比較)
(vol.72 表1-4)

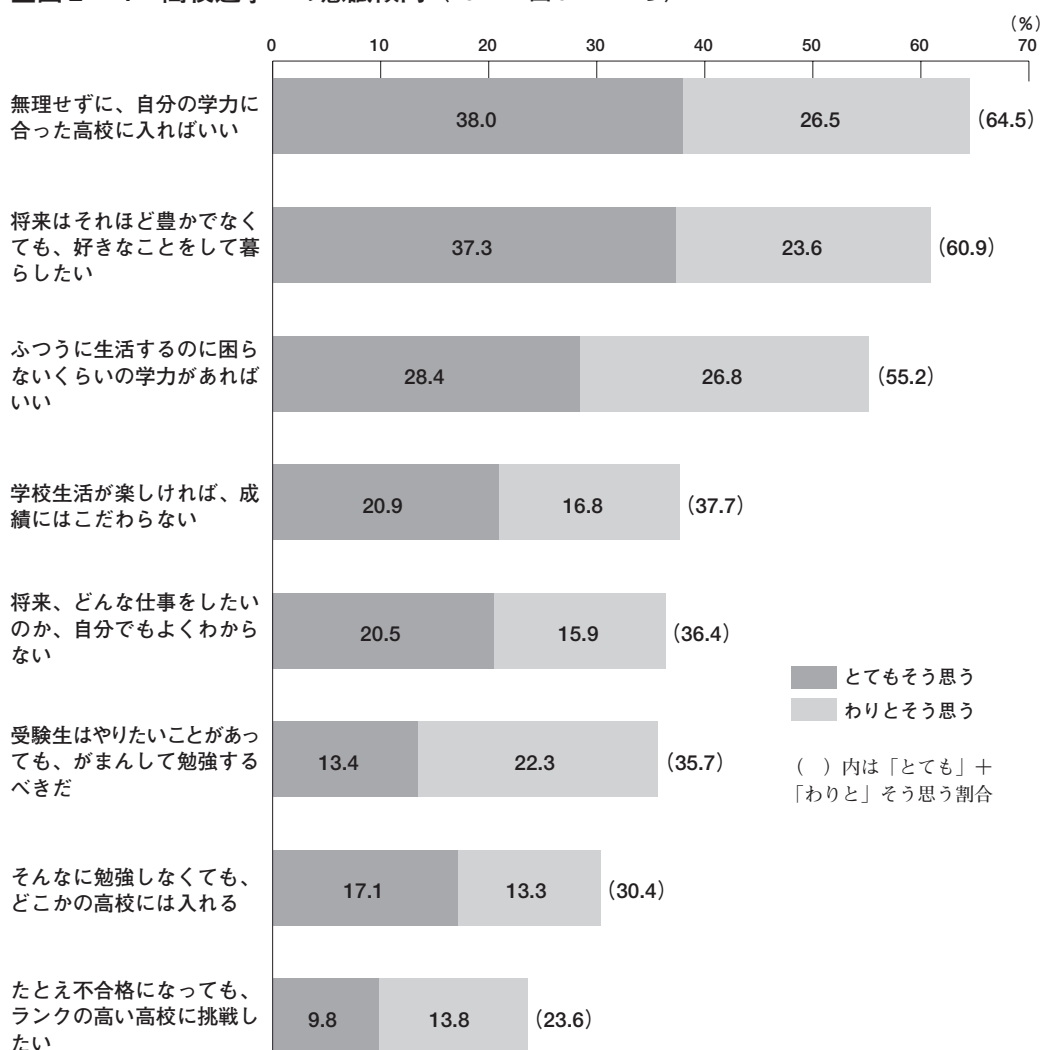
	(%)	
	1988年	2002年
平日	2時間12分	1時間57分
学校のある土曜日	2時間58分	2時間33分
日曜日	3時間10分	3時間25分

40.1%)、「大学進学のために勉強したい」(18.9%→28.1%)などが1988年調査よりも増えており、高校への進学を節目として希望を高めている【vol.72 図1－8】。また、4年制大学への進学志望も強まっていて、「ふつうの大学」を含めれば、55.5%を占める。これは1988年調査の44.5%より11.0ポイントも高い(「難関大学」は14.7%→20.4%)【vol.72 表1－3】。

図2－1は、高校進学に関する意見への賛否をきいた結果である。1988年調査では尋ね

ていないので比較はできないが、高校進学に挑戦しようという気概は感じられない。この傾向は男子生徒の一部で強く表れており、努力するよりもほどほどを志向する特徴がみられる【vol.72 巻末集計表】。中学校の進路指導は、生徒の志望を重視する方向に転じたが、「努力しようとしないう」生徒の発生という問題に直面している。高校入試の改革や絶対評価の導入がこの問題の解決につながるかどうか、今後の動きを見守りたい。

■図2－1 高校進学への意識傾向 (vol.72 図3－2から)



6. 授業をどう変えればよいか

学ぶ意欲を高めるために、授業を変える試みが行われてきた。多くの中学校が「わかる授業」の実現を目指して改革を進めている。中学生はこうした改革をどう受け止め、どう評価しているのだろうか。

学習塾と学校を比べてみたvol.49「学習塾通いする中学生」（1995年）の結果によれば、数学の授業のわかりやすさは、学校が19.8%、塾が36.1%である（「とてもあてはまる」の割合）。その差は16.3ポイントである【vol.49表32】。また、塾の先生と学校の先生を比較して尋ねたところ、表2-6にみるように、残念ながら、圧倒的に塾の先生を評価している（「とてもあてはまる」の割合）。

つまり、中学生の間では、友だちをつくり人間形成するところが学校で、受験を中心に学力を伸ばすところが塾という役割ができています。もちろん、この役割は生徒の意識の中ではという意味である。学校では平均レベルの生徒を想定して均一に教えるが、塾は個人レベルに合った指導が基本である。このため、学校の先生が不利になるのは仕方がない面もある。

最近、選択教科制、習熟度別、少人数指導、ティームティーチング（TT）が大幅に導入されて、学校の授業も変わってきている。生徒たちはこうした授業の試みをどう評価しているのだろうか。表2-7は、vol.78「勉強する中学生・勉強しない中学生」（2004年）の調査結果の一部であるが、選択教科制を楽しいと回答している生徒が8割弱（「とても十わりと」楽しい割合）と多い。これに対して、

「総合的な学習の時間」は、楽しみにする割合が5割弱にとどまっていることが気になる【vol.78表2-6】。高校受験が影を落としているためか、選択教科と比べて十分な成果を上げていないようである。また、習熟度別への賛否をみると、「賛成」15.2%と「やや賛成」16.0%を合わせても、3割強である。生徒の多くは、学校が塾のようになることには消極的である【vol.78図2-1】。

勉強のやり方がわからないという生徒が多いようである。その指導を考える必要がある。自分に合った勉強のスタイルを知りたいという要求は、もっと授業をわかるようになりたいという気持ちのあらわれである。学習習慣をどう身につけさせるか。勉強に向き合うきっかけをつかむことがカギになる。

目標をもたせる進路指導はもちろんだが、vol.78の調査では、勉強する生徒の方が授業を楽しんでいると感じたり、わからないところを質問したり、さらに几帳面な性格を持つことがわかった。知的な関心を刺激する授業、質問・相談に答えるサポーター、きちんと整備された学習環境が、学習習慣の定着には欠かせない。

勉強の達成感を高めるような評価法も必要だろう。生徒の多くは習熟度別よりも選択制の授業を楽しみにしている。自分の得意な分野で自信を確かめられるからである。勉強の成果はすぐにはあらわれない。誰かが自分の力を評価してくれているという実感が、勉強に向き合うきっかけになる。

■表 2－6 数学の先生 (vol.49 表36から)

			(%)
		とてもあてはまる	差
教え方がうまい	学校	24.2	22.0
	塾	46.2	
ユーモアがある	学校	22.4	17.2
	塾	39.6	
幅の広い知識を持つ	学校	17.7	29.2
	塾	46.9	
しつけがうるさい	学校	17.3	8.5
	塾	8.8	
尊敬できる	学校	15.4	15.7
	塾	31.1	
人気がある	学校	8.2	16.9
	塾	25.1	
魅力がある	学校	6.5	10.1
	塾	16.6	
悩みを相談したい	学校	2.6	7.2
	塾	9.8	

「差」については、学校と塾との値の差を高かった方の行に示してある。

■表 2－7 選択教科への評価 × 勉強時間 (vol.78 表 2－5)

					(%)
		とても 楽しい	わりと 楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
勉強しない生徒		30.7	42.8	17.3	9.2
勉強する生徒		30.1	51.0	13.2	5.8
全 体		30.4	46.3	15.4	7.8

「勉強しない生徒」は「1人で勉強した時間」についての設問で、「0分～1時間未満」と回答した群、「勉強する生徒」は「1時間以上」と回答した群を示す。

7. 完全学校週5日制でゆとりがなくなった？

完全学校週5日制が実施されて約半年後に行ったvol.74『完全学校週5日制』と中学生」(2003年)の調査結果によれば、生徒たちは、授業の進度が速くなり、行事を準備する時間が減って、学校生活にゆとりがなくなったという(表2-8)。

また、土曜日はゆっくりと寝て、のんびり過ごす日になっている。趣味の時間が増え、いろいろと考える時間が増したようだが、その分、月曜の登校がおっくうになっているようだ。土曜日の過ごし方を細かく書いてもらったところ、「勉強派」「だらだら派」のほかに、「部活動派」「エンジョイ派」(ショッピングやカラオケ、街をブラブラする)、家族と時間を過ごす「家族派」の3つに分かれた。家庭によって土・日曜日の過ごし方が違ってきている【vol.74 TOPIC ⑥】。

最近では、各自治体が土曜日対策を講じている。学力の低下や非行問題もあって、学校が家庭や地域の「受け皿」をつくっている。その効果をみると、自由参加にしているためか、学力面で「来てほしい」生徒が来ていないケースがある。土日の学習時間が学力差にも影響している【vol.74 表5-5】。

また、生徒の多くが参加している部活動は、当初は休みにしている学校が多かったけれども、平日に活動の時間がとれないので、以前のように土日も行っている。土曜日に部活動の時間が増えたという割合が42.9%、減ったは11.5%である。31.4ポイントも増えていると回答した割合が多い【vol.74 表3-1】。完全学校週5日制の「しわ寄せ」は部活動や学校行事などの特別活動に及んでいるようである。

さらに、学校週5日制は先生たちの平日を忙しくさせている。vol.52「学校週5日制」(1996年)の結果では、当時第2・第4土曜日だけが休みだったにもかかわらず、教師の87.0%（「とても+まあ」の割合）が平日に忙しくなったという【vol.52 表46】。生徒の相談に応じる時間的な余裕がない、放課後の仕事量が多くなった、持ち帰りの仕事をしたなど、先生たちの身体的・精神的なストレスが蓄積されている。平日の多忙感がゆとりを失わせているとすれば、皮肉な結果と言わなければならない。せめて生徒の話を聞くための時間を確保できるような条件の整備が必要である。

■表2-8 完全学校週5日制による学校生活の変化 (vol.74 TOPIC ⑤)

					(%)
		どちらとも いえない	そう思う (とても+わりと)	そう思わない (あまり+ぜんぜん)	差 (そう思う－そう思わない)
合の 高い 項目 「 そう思う 」割合	行事の準備のための時間が少なくなった	41.1	45.5	13.4	32.1
	月曜日は、何となくだるい	18.8	56.4	24.7	31.7
	授業の進み方が速くなった	37.1	42.4	20.4	22.0
	月曜日に学校に行くのがつらい	20.1	50.7	29.1	21.6
割合の 高い 項目 「 そう思わない 」割合	勉強が楽になった	44.4	12.9	42.6	－29.7
	友だちと遊びにくくなった	37.1	17.1	45.8	－28.7
	先生と話す時間が減った	57.3	8.4	34.3	－25.9
	先生が疲れているようだ	46.9	21.6	31.5	－9.9
	宿題が増えた	47.0	21.7	31.3	－9.6

8. 選ばれる公立中学校

私立学校の中には土曜日も授業をしているところが多い。大都市部では「ゆとり」教育の公立学校を避けて、私立の中高一貫校を選ぶケースが増えている。それを公立中学校に引き戻すことをねらってか、公立で学校選択制を導入する自治体が出てきた。学校を競争的な環境の中において、親と子どもから選ばれるような学校づくりを促すための仕組みである。まだ、一部で行われているだけだが、vol.79「保護者の学校選択」（2005年）では、その地域の小学校6年生の保護者を対象に、最終的にどの中学校を選んだのかを調査した。

その結果、最終的に選んだ中学校の種別は、

「校区内」63.1%、「校区外」11.5%、「私立」25.4%の比率であったが、学校選択制への賛否をみると、「とても賛成」24.5%、「やや賛成」55.8%、「やや反対」16.8%、「反対」2.9%で、80%以上の保護者が好意的に受け止めている。また、「校区外」を選んだ保護者は「学校を訪問した」68.3%、「中学校主催の学校説明会に参加した」61.1%も高く、さらに「希望する中学校の卒業生やPTA役員に話を聞いた」27.5%、「インターネットのホームページを見た」22.9%という保護者も少なくない【vol.79 巻末集計表】。

表2-9は、保護者が中学校を選ぶときに重視したこと（「とても＋わりと」を順に示

■表2-9 中学校を選ぶときに重視したこと（vol.79 表3-1から）

	（％）			
	とても重視する	わりと重視する	あまり重視しない	ぜんぜん重視しない
いじめや不登校の生徒が少ない	45.5	42.1	6.9	5.5
学校がよい地域にある	31.9	55.6	8.3	4.2
生活指導やしつけがしっかりしている	44.8	39.3	10.3	5.5
服装・頭髪がきちんとしている	27.8	52.8	13.2	6.3
自宅からの距離が最も近い	23.8	47.6	25.9	2.7
希望する部活動が熱心に活動している	28.3	42.8	22.8	6.2
よく掃除された清潔な施設（トイレなど）	21.4	46.2	25.5	6.9
校舎がきれい	19.9	38.4	36.3	5.5
国語、数学、英語などの学力が高い	15.3	36.1	41.0	7.6
小学校の仲のよい友だちが一緒である	27.6	23.4	33.8	15.2

している。すると、いじめや不登校、生活指導に関することが上位を占めて、学力はその次に重視されていることがわかる。この他、希望する部活動や、仲のよい友人が一緒なども考慮しているようである。こうした保護者の意向を中学校はどう受け止めているのだろうか。

そこで、調査対象のいくつかの小学校の校長先生へのインタビューの中で、特に印象に残った点を箇条書きでまとめてみると、次の通りである。

- ① 学校の立地条件（特に地理的な位置と校区の様子）や、学校規模などに左右されており、学校の内部努力だけではどうしようもない面がある。
- ② 以前に起こった学校の荒れなどについての口コミや風聞に影響される場合があって、保護者の間で学校選択制の受け止め方に違いがある。
- ③ 人気校や集中校と言われる学校がほぼ決まってきた。各学校の特色や内容で選んでほしいが、保護者の要求が多様化しているので、

バラエティに富む教育で「選ばれる」学校を目指すことになりそうだ。

このように、学校選択制は、選ぶ側と選ばれる側の間に、一定の緊張感を生み出すと同時に、お互いの認識のズレも生じさせている。これから学力テストの結果を参考にして学校を選ぶシステムができたとき、それがよい結果をもたらすかどうかが目される。ただし、校区外の希望者が多いために、校区内の生徒が入れないという問題が起こることは心配である。

学校選択制は大都市部に特有の制度という面もある。これが全国に普及するとは思えないが、学校改革の1つの流れをつくっていることは確かである。公立中学校を蘇らせようという試みは全国各地で行われているが、しかし、なかなか学校は変わらないという声も聞く。地方教育委員会への人事権の委譲やスーパーティーチャーの導入などが検討されている。こうした学校の外からの刺激が、内からの気運とどう結びつくのか。中学校の改革は一筋縄ではうまくいかない。

9. まとめに代えて

「モノグラフ・中学生の世界」は、学校のテーマを数多く取り上げてきた。そのテーマを振り返ってみれば、当時の時代状況が思い出される。

学校が荒れた時期も何度かあったが、今ではその荒れを経験した世代の人たちが教師や親の年代になっている。中学校の外は変わらないように見える。しかし、世代の交代は確実に進んでいる。団塊世代の先生たちが定年を迎え、それに替わって若い世代の先生が採用されてくる。その頃にはもう、先生たちがこの「モノグラフ・中学生の世界」を手

することはないだろう。しかし、定点観測のように行ってきた意識調査が、いつか何かの形で役に立つこともあるだろう。その時に、かつての中学校や中学生はこんな様子だったのかと、思い起してもらいたい。

約10年間にわたって「モノグラフ・中学生の世界」の同人に加えていただき、学校現場の様子を先生方からつぶさにくがうことができた。途中で亡くなられた長嶋安男先生をはじめ、多くの先生方にお世話になった。この場をかりて厚くお礼を申し上げたい。

3

教師との関係

～指導観の揺らぎと変容～

永井聖二

1. 集団を通しての指導

1994年に刊行されたvol.47「教師の指導力」の中で、私たちは次のように書いた。

「これまで学校教育を暗黙のうちに支えてきた家族や地域が大きく変容し、日本社会の階層的な構造にも変化がみられるなかで、集団をととしての指導の重視やたてまえとしての平等主義、あるいはそれと結びついた努力の強調といった日本の学校の特性と教師の指導力は揺らいでいるのではないか。教師たちは、多様化する親や子どもの要求にどう対処するのか、不登校やいじめといった具体的な課題にどう対処するのか、とまどい悩み、ときには塾や教育産業との相克のなかで指導力の見直しを迫られているのではないか。」

こうした基本的関心から実施した調査で教師が自らの指導力をどう捉えているかを知るために、教師の仕事にかかわる様々な意見をどう評価するのかを尋ねた結果をみると、「集団のなかで生徒が助け合うことが大切」という意見や「結果より努力を評価したい」という意見に賛成が多いことが目立つ（図3-1）。

「集団のなかで生徒が助け合うことが大切」という意見に「おおいに賛成」な教師は、回答者全体の73.4%に及んでいて、「どちらかというと賛成」と答えた教師を含めると全体

の99.6%にもなる。生徒を集団としてまとめ、働きかけることが教師の仕事の中心だとする日本の教師の意識が如実に示されている。また、「結果より努力を評価したい」という意見に対しても賛成者が多く、「おおいに賛成」の51.4%に「どちらかというと賛成」を合わせると回答者全体の97.8%になるが、これは習熟度別クラス編成とは対極に位置づく、たてまえとしての平等主義を反映した結果とみることができよう。

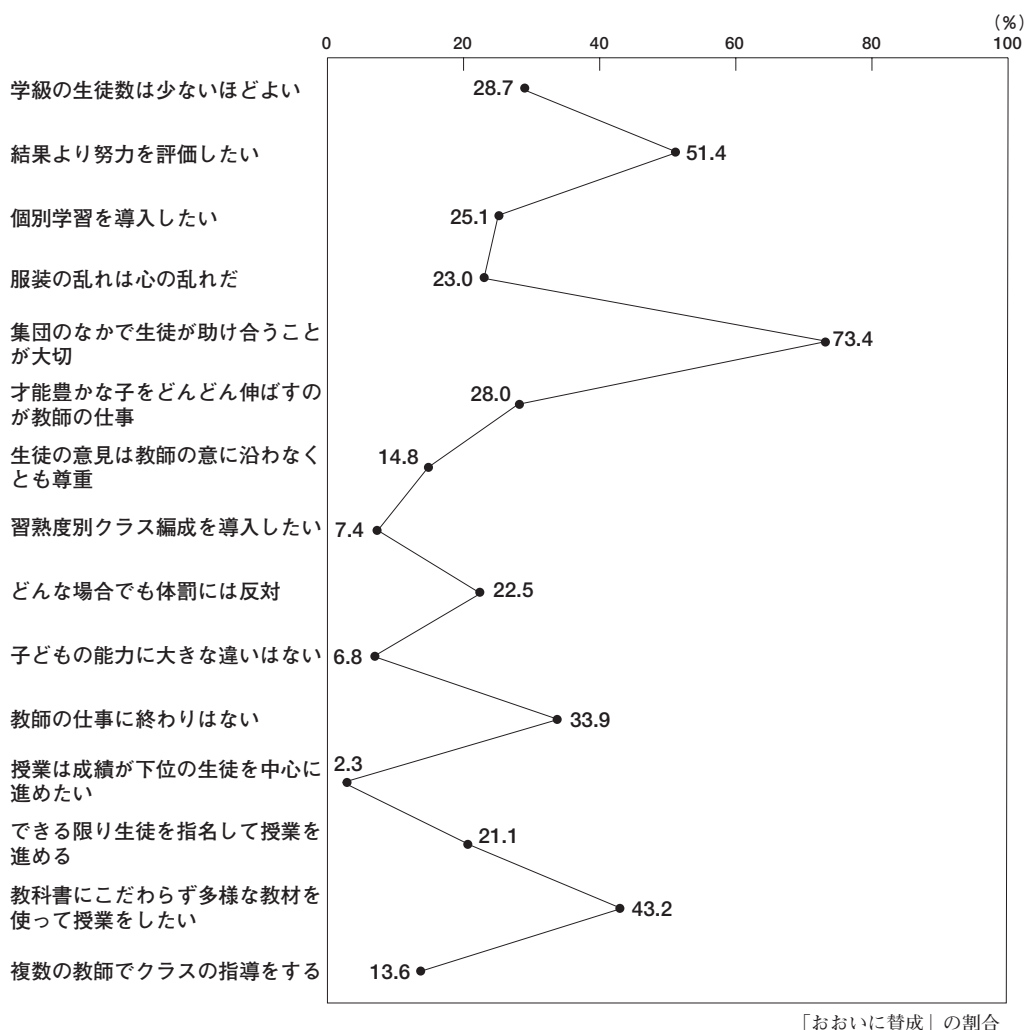
約10年前に行われたこの調査の時点では、教師たちは生徒を集団としてまとめ、それを導くという伝統的な日本型の教師のストラテジーを重視していることを示す結果である。同じ調査の結果で「習熟度別クラス編成を導入したい」という意見や「学級の生徒数は少ないほどよい」といった意見についても賛否を尋ねたが、賛成者はさほど多くはないことも注目される。習熟度別クラス編成の導入に「おおいに賛成」と答えた教師は回答者全体の7.4%でしかないし、「どちらかというと賛成」を合わせても42.1%にとどまっている。学級の生徒数の削減を望む意見について尋ねた結果でも、「おおいに賛成」な教師は全体の28.7%でしかない。

教師たちの多忙な生活からすれば、クラス

の生徒数は少ないにこしたことはないはずである。個別学習の導入についても、生徒一人ひとりに行き届いた指導が望まれるという点からすれば、「おおいに賛成」な教師が3割に満たないとの結果は、もう少し賛成が多くともよいように思える。しかしながら、少なくとも今から10年前の時点では、日本の教師たちの教師の仕事にかかわる意識は伝統的な集団指導のそれから大きくは変化していなかったということを示す結果であろう。生徒を集

団としてまとめ、その集団を通して個々の生徒に働きかけていくという限り、学級規模の縮小は必ずしも望ましいものではない。考えてみると、生徒を集団としてまとめて指導する戦略は長くわが国の教師文化の基調となってきた。学校現場では「教師の仕事はまず集団づくりから」といわれ、教員養成系の学部など養成段階で伝えられる指導のスタイルもまさにこの基調に沿ったものであっただろう。

■図3-1 教師の仕事にかかわる意識 (vol.47 図Ⅲ-1 から)



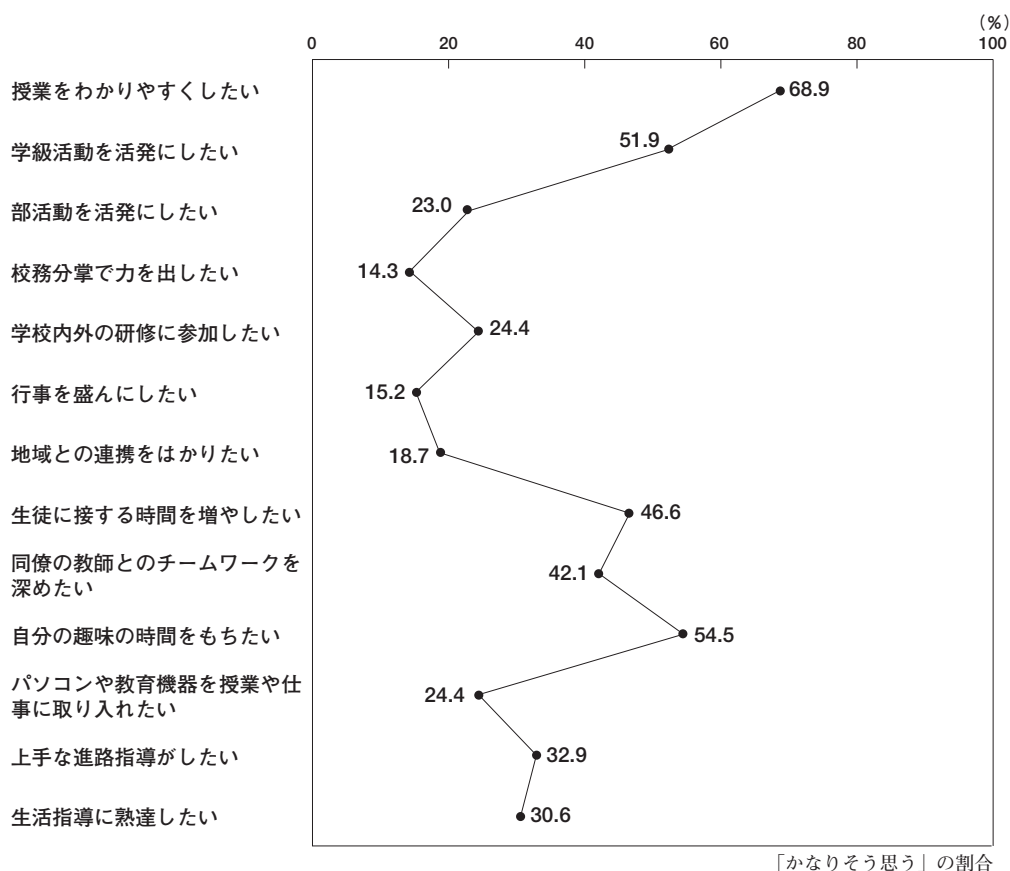
2. 生徒からの評価

同じ調査で、「これから何に力を入れたいか」を教師に尋ねた結果では、「かなりそう思う」と答えた者が多い順にみると、「授業をわかりやすくしたい」「自分の趣味の時間をもちたい」「学級活動を活発にしたい」ことが上位で、「生徒に接する時間を増やしたい」という希望は半数にも満たないことが目立つ（図3-2）。「学級活動を活発にする」ことも結局は生徒への働きかけであろうが、教師が個々の生徒に直接働きかけるというよりは、集団づくりにより傾斜する傾向が示さ

れているとみてよいように思われる。

もっとも、この調査に示された教職観は単に伝統的な日本型の教師の指導のスタイルを再確認するものではない。注目すべきは、この調査の結果は、集団性や努力の重視といった伝統的な日本の学校の特性を支持しつつも、一方ですでに現実には子どもの能力の差を認めざるを得ない教師の状況を示すものでもあったことであろう。ただ、かといって習熟度別クラス編成というような能力差をあからさまにする具体的な戦略には積極

■図3-2 これから何に力を入れたいか（vol.47 図Ⅲ-2から）



的に成れないという、教師たちの矛盾と苦悩がうかがわれる結果とみてよいように思われる。

一方、1995年に実施された調査（vol.53「生徒と学級担任」）では、教師の仕事を生徒の側からみている。クラスについての満足度を尋ねた結果では、今のクラスになって「とてもよかった」「わりとよかった」と答えた中学生はそれぞれ全体の26.7%と38.6%で、両者を合計すると65.3%になるが、「どちらともいえない」「あまりよくなかった」「ぜんぜんよくなかった」と答えた者も全体の34.7%であり、3分の1以上に及んでいることにも注目しておく必要がある（表3-1）。

また、悩みごとの相談相手について尋ねた結果では、「成績が下がってきたとき」に相談する相手として「塾の先生」をあげた者が

8.7%であり、「担任の先生」は6.6%でこれを下回る（表3-2）。「勉強の仕方がわからないとき」の相談相手では、「塾の先生」が19.4%なのに対して「担任の先生」は8.3%にとどまっている。「誰かからいじめられたとき」の相談相手として「担任の先生」をあげた生徒は回答者全体の12.1%でしかない。

すでにみたように、教師たちは授業に注力することとならんで学級活動に力を入れたいと考えていたのに対して、生徒たちの学級集団への満足度はさほどではなく、悩みごとの相談相手として担任教師が選ばれることも多くないという結果であった。教師たちが集団をとおした指導力を重視していたのに、生徒たちは一人ひとりへの個別的なまなごしを求める傾向があり、両者は必ずしも整合してはいない状況が示されたといえそうである。

■表3-1 今のクラスになってよかったか（vol.53 巻末集計表）

	全体	性別		学年別		
		男子	女子	1年	2年	3年
とてもよかった	26.7	25.3	28.0	29.6	24.3	25.5
わりとよかった	38.6	38.9	38.5	35.5	39.9	40.8
どちらともいえない	22.1	23.8	20.5	22.6	20.9	22.5
あまりよくなかった	6.9	7.1	6.6	6.4	8.6	6.2
ぜんぜんよくなかった	5.7	4.9	6.4	5.9	6.3	5.0

■表 3-2 悩みの相談相手 (vol.53 巻末集計表)

(%)

		全体	性別		学年別		
			男子	女子	1 年	2 年	3 年
成績が下がってきたとき	担任の先生	6.6	5.6	7.6	3.1	4.5	11.4
	担任以外の教科の先生	2.6	1.5	3.6	1.5	3.4	3.0
	部・クラブの先生	0.2	0.0	0.4	0.3	0.4	0.0
	養護の先生	0.2	0.2	0.2	0.0	0.4	0.2
	塾の先生	8.7	7.0	10.5	6.2	10.5	10.0
	父 親	8.5	12.2	4.8	12.1	9.4	4.5
	母 親	26.8	20.3	33.1	31.2	24.3	24.2
	兄 弟	4.4	4.9	3.8	2.8	4.9	5.5
	友だち	20.6	20.2	21.1	22.7	18.7	19.9
	その他の人	0.9	1.1	0.8	1.3	0.7	0.7
	誰にも相談しない	20.5	27.0	14.1	18.8	22.8	20.6
勉強の仕方がわからないとき	担任の先生	8.3	9.0	7.6	8.7	5.6	9.7
	担任以外の教科の先生	7.9	5.8	9.9	5.9	8.6	9.2
	部・クラブの先生	0.3	0.2	0.4	0.0	1.1	0.0
	養護の先生	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2
	塾の先生	19.4	18.2	20.6	12.9	18.4	26.4
	父 親	7.9	9.4	6.3	14.4	7.5	1.7
	母 親	9.9	8.8	11.2	18.8	9.4	2.0
	兄 弟	12.2	12.0	12.4	10.8	15.8	11.2
	友だち	23.2	21.6	24.9	20.1	22.3	27.0
	その他の人	1.4	0.9	1.9	1.0	0.8	2.2
	誰にも相談しない	9.4	13.9	4.8	7.4	10.5	10.4
誰かからいじめられたとき	担任の先生	12.1	14.2	10.1	14.6	7.8	12.6
	担任以外の教科の先生	1.4	1.4	1.4	1.3	3.1	0.3
	部・クラブの先生	0.5	0.2	0.8	0.5	1.2	0.0
	養護の先生	0.3	0.0	0.6	0.0	0.4	0.5
	塾の先生	0.2	0.2	0.2	0.0	0.4	0.3
	父 親	5.4	8.5	2.3	8.0	6.2	2.5
	母 親	13.7	8.2	19.2	16.0	12.1	12.6
	兄 弟	2.4	2.3	2.5	2.9	0.8	3.0
	友だち	34.8	25.2	44.3	32.2	39.6	34.0
	その他の人	2.9	4.1	1.7	4.0	2.7	2.0
	誰にも相談しない	26.3	35.7	16.9	20.5	25.7	32.2

3. 変化する教師の意識

こうした日本の教師たちの指導のスタイルも、近年では大きく変革を迫られている。少なくとも中学校においては、教師の意識の変化が著しい。教師を対象とした調査としては最も新しいvol.68「中学教師は訴える」（2001年）によると、教育についての意見を尋ねた結果で「学級の生徒数をもっと少なくする方

がよい」と答えた者は、「とてもそう思う」が61.2%に及んでいる（表3-3）。サンプリングやワーディングの差も検討する必要があるが、先に紹介した1993年の調査で学級サイズの縮小の意見に「おおいに賛成」と答えた者の割合が3割に満たなかったことと比較するとかなりの増加といえる。近年の日本の

■表3-3 教育についての意見—学級サイズを小さく（vol.68 表4-12）

	とても そう思う	わりと そう思う	小計	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
学級の生徒数をもっと少なくする方がよい	61.2	23.0	84.2	10.3	5.1	0.5
生徒や保護者の考え方が変わってきているから、 教師も変わっていく必要がある	23.4	39.8	63.2	25.8	9.5	1.5
学校以外の職場を経験した方が教師の指導力や 視野が広がる	20.8	36.2	57.0	24.0	15.2	3.8
教師は研修をたくさん受けて、資質の向上を はかるべきだ	20.1	32.4	52.5	28.8	15.8	2.9
教育委員会や文部省 [*] はもっと縮小し、学校に 教育の責任を任せるべきだ	8.8	27.8	36.6	31.9	28.7	2.8
勉強は塾、心の問題はスクールカウンセラー では、教師のやりがいがない	11.2	21.5	32.7	22.6	33.5	11.2
体罰も時には有効な指導の1つである	7.9	19.3	27.2	33.8	26.1	12.9
校長の権限を強くし、独自の学校経営ができる ようにするべきだ	7.4	15.8	23.2	25.3	38.3	13.2
教師の勤務条件は必ずしも労働基準法が守られ なくても仕方ない	4.0	13.8	17.8	20.4	35.1	26.8
教科書の検定や学習指導要領をなくした方がよい	4.8	12.2	17.0	25.2	48.5	9.3

* 2000年調査時は現在の「文部科学省」を「文部省」と表記。

学校で、加配やチームティーチングの担当者の手当てが行われて、現実にもそうした施策が進んでいることを反映した結果でもあろうし、あるいは生徒たちの学力差が従来型の集団単位の指導の限界を超えたことを反映したとも考えられる結果でもあろう。

同様の変化は、教育改革への賛否を尋ねた結果（表3-4）で、「習熟度別クラス編成」に対して「やや反対」と「とても反対」がそれぞれ10.9%と6.2%にすぎず、1993年の調査

で6割近くの教師が習熟度別クラス編成に否定的（「おおいに十どちらかというと」反対）であったことと対照的であることからもうかがえる【vol.47 巻末集計表】。それが望ましいことなのかは別として、1990年代の後半は日本の学校が本格的に変革の圧力にさらされ、（少なくとも中学校では）それにつれて教師たちの指導観もかなり変化を示した時期といえるのではなかろうか。

■表3-4 教育改革への賛否—完全学校週5日制に賛成（vol.68 表4-14）

	(%)						
	とても 賛成	やや 賛成	小計	どちらとも いえない	やや 反対	とても 反対	小計
完全学校週5日制の実施	57.7	24.4	82.1	13.3	3.0	1.5	4.5
スクールカウンセラーの配置	32.8	38.4	71.2	22.3	4.6	1.9	6.5
チームティーチングでの教科指導	29.2	41.0	70.2	22.8	5.2	1.8	7.0
習熟度別クラス編成	17.5	38.1	55.6	27.3	10.9	6.2	17.1
学校選択の自由の実施	13.5	25.3	38.8	38.7	14.2	8.4	22.6
選択教科の拡大	10.3	26.0	36.3	32.0	18.5	13.2	31.7
中高一貫教育の実施	8.4	24.2	32.6	39.7	15.0	12.7	27.7
「総合的な学習の時間」の実施	6.6	17.9	24.5	34.4	22.4	18.7	41.1
教員の人事考課制度の採用	7.0	17.1	24.1	51.3	12.9	11.6	24.5
学校評議員制度の導入	4.3	14.0	18.3	53.1	18.2	10.3	28.5
民間人の校長への登用	5.3	10.8	16.1	32.5	28.3	23.0	51.3
必修教科の削減	4.6	9.8	14.4	30.7	34.2	20.7	54.9

4. 教師モデルの再構築

日本の学校教育が、20世紀において一定の優れた成果を上げてきたことは否定できない。しかし、今日、集団を単位とする指導の重視、あるいはたてまえとしての平等の強調といった伝統的な学校教育の日本の特質が、急激にその社会的基盤を失いつつあるという困難な状況にあることも認めないわけにはいかない。矢継ぎ早に噴出する教育改革論議は、それぞれの施策の当否は別として、いずれも社会変動に対応した新しい学校像を模索する動きを背景とした一面があることに違いはない。

今や地域社会は地域共同体ではなく、子どもたちは家族という共同体の一員としてより、ゲストとして扱われる傾向が強い。これまでこうした機能的な教育主体の形成力に暗黙のうちに依拠してきた学校教育にとっては、家族や地域といった機能的な教育主体による共同性の涵養が機能しにくくなっていることは大きな痛手である。しかも、こうした動きは、共同体の成員養成という、学校教育の重要な目標にかかわる人々の合意を否定することをもたらすから、問題はさらに難しくなる。共同体を支える社会的条件を欠いた中で、共同性に無関心な親や子どもを相手に学校教育を成り立たせようとすることは、現場の教師たちが日々感じているとおりきわめて困難な課題である。困難な立場にあるうえに、問題を解決する方向を見いだせない教師たちは、防衛的になりやすく、学校と教師に対するあらゆる批判に感情的に反発したり、時代錯誤としか言いようのない生徒規則の問題など、生徒の側を状況主義倫理へ押しやることを強行することも稀ではない。現場の心情としては無理からぬ一面もあるが、結局それが問題をさらに悪化させる悪循環をもたらすの

が現状といえる。

こうした現状を教師たちが克服し、父母や地域社会のおとなたちとともに教育システムの再建を担うためには、初任者研修を含む教師教育の方向性を示すことが何より求められる。その場合、社会的基盤の変化を前提とした学校教育の原理は、前近代的な共同性の押しつけでもないし、かといって際限のない個別的な要求に「カウンセリングマインド」で応えることだけでも成り立つものではない。他者の権利の尊重と共同性の再構築が両立する形で目指される方向が必要といえよう。かつてイギリスの教師教育について論じた「ジェームス・レポート」は、教師の役割を「変化しつつあるもの」として位置づけ、「変化への適応性と能力」を育てることの重要性を指摘している。今日の日本の教育界が困難な立場にあるゆえに、目前の問題の対応に終始するという苦衷はわかるとしても、問題の解決のためには、変化への適応性を育てることが必要なのであり、新たな教師のモデルが示されることが必要であろう。

この間のモノグラフのデータが語るのは、日本の教師文化が変化を迫られてくる軌跡なのであり、伝統的な教師モデルの力が失われる一方で、あらたなモデルを見いだせない苦悩の現状といえるのかもしれない。否応なく押し寄せる市場主義的な教育政策の波に巻き込まれながら、他方でこれまで学校教育が依拠してきた共同体の機能的な教育力の低下を前提として仕事を進めなければならない教師はどうあるべきなのか。共同性の涵養という日本の学校の伝統的な長所と、生徒への個別的なケアの充実という今日的な課題を、ともに重視する新たな教師モデルの構築が求められていることを強調しておきたい。

学校現場の視点から

鈴木秀男

1. 疲れを超越した教師たち

「先生を一度やったら辞められない」といわれる時代もあった。その頃はきっと教師の仕事や生活は今とはかなり違っていたに違いない。30年近く前に私が新卒で勤務し始めた頃でも現在と比べればいろいろな部分で違っていた。

今の教師の仕事や生活はどうだろう。教師はどのように考えているのだろう。vol.68「中学教師は訴える」（2001年）によれば、「辞められるならそうしたい」と考えている教師は相当に多いようで、辞めようと思ったことが「数回あった＋いつもそう思っている」と答えた者が39.7%である（表3-A）。

ちなみに、1991年の調査では、辞めようと思ったことが「4～5回以上あった（現在辞めたいと思っている＋今までに何回もあった＋4～5回あった）」は24.7%だった【vol.40 図25】。単純には比較できないが、「辞めたい」は増加傾向に

ありそうだ。また、データからみると、教師の疲れきった姿が浮かび上がる（図3-A）。それくらい教師自身にもストレスという言葉が日常化してしまっている。

ところが、学校には「疲れ」とか「ストレス」を超えて、生徒だけでなく教職員仲間にも元気を与えてくれる先生がたくさんいる。これは、調査データには表れていない隙間の部分である。

A先生は校内の環境を整えることに精励し、実習室をより機能的な空間に変えていった。その努力は並大抵ではなかった。放課後、休日に時間をかけてコツコツと整備し続けた。こうしたA先生は地域からの評判が高かった。

B先生は部活動を複数引き受け、自分の得意な活動だけでなく、廃部になりそうな部活動を存続させ、生徒や保護者の期待に応え続けた。ひたむきなB先生には生徒も一目を置いていた。

■表3-A 教職を辞めたいと思ったこと×属性―「何度も」が4割―
(vol.68 表2-9から)

	1度も ない	1～2度 あった	数回 あった	いつもそう 思っている
全 体	29.6	30.7	29.4	10.3
男 性	35.7	30.9	25.5	7.8
女 性	21.7	30.0	34.5	13.7

C先生は勉強の苦手な生徒を個別に指導し続けた。ほとんどの生徒が下校した後に生徒をそっと呼び寄せ、懇切ていねいな指導を繰り返した。いうまでもなくその生徒は徐々に力をつけていった。入試でも満足いく結果を出し、卒業した。

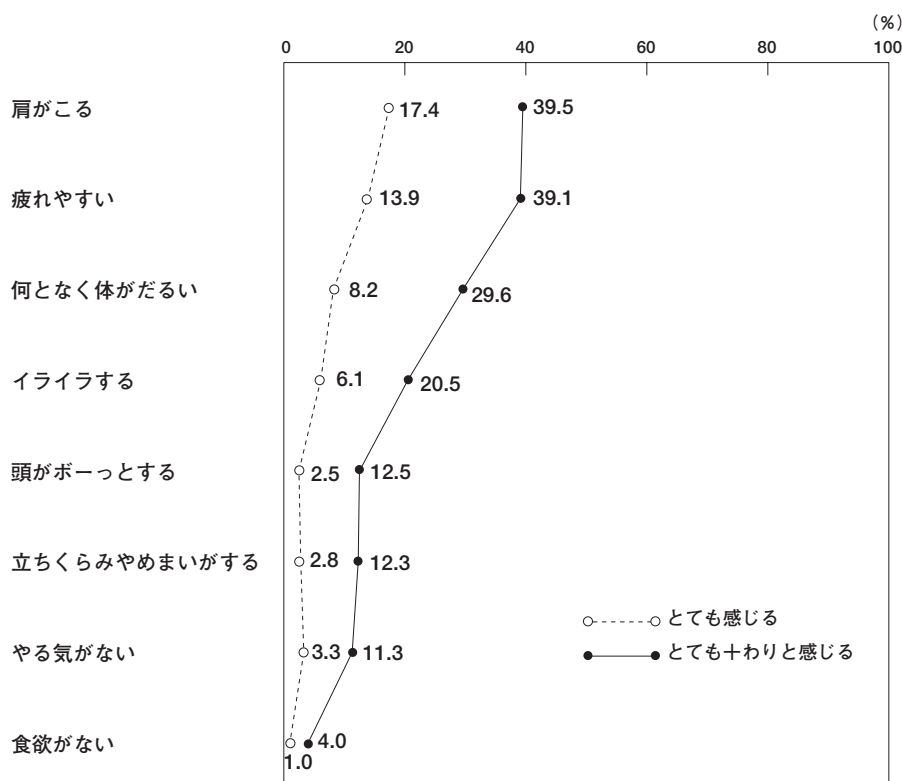
ところで、先に挙げたどの先生をみても、共通するところがあった。①平日にはほとんど自分の時間がない、②「生徒のためですよ」と語り、悲壮感や負担感が少ない、③まめに地道な仕事を継続している。こうして、「辛い」とか「大変だ」とかを顔にも言葉にも出さずにがんばる先生はどここの学校にもいる。感謝の

気持ちを抱くだけでなく、このような先生方が報われる制度を期待したい。

それというのも、公務員として、「労働基準法」や関係規則で定める基準の中で全ての仕事を納められればそれは申し分がない。しかし、「教師」という仕事は、「教育公務員という役職の特殊性」を持ち出すまでもなく、こうした基準をはるかに超えた仕事が待っている。

どの職場にも苦労をものともせず、使命感をもって意気揚々と働く先生がおられ、学校の支えとなっておられることだろう。多感な中学生のために今後も元気にがんばってほしい。

■図3-A 教師の体調 (vol.68 図4-2)



2. OA機器が教師にもたらした変化

私のはじめてワープロに触れたのは1984（昭和59）年だった。わずかに数行、そして1行20文字程度の画面表示ができるワープロが15万円程度の金額だったと記憶している。

それから2～3年で急に市場が拡大し、販売会社や機種が急増した。当時、私の勤務校は若い教師の多い職場であったが、今でも鮮明に覚えている光景がある。

空き時間や放課後に職員室にいと、シーンと静まりかえり、「カチャカチャ」とキーボードを叩く音が聞こえてきた。それまではペチャクチャしゃべる雰囲気職員室には結構あったが、その頃からどこの職場でも同じような状況を目にするようになってしまった。

「最近目が悪くなって…。パソコンのやりすぎです」「肩がこってしょうがない」。こんな会話がその頃から聞かれはじめ、OAの学校への進出が教師にとって新たな疲れの原因になったことがうかがえる。

そして、ワープロ、パソコンの普及は少し大げさに言えば教師の業務を変えてしまい、明らかに多忙感を増してしまう原因にもなった。

今やデスクトッププリンティングは学校やオフィスだけでなく家庭にも浸透しはじめた。自分で製版、印刷そして製本までこなすことが多くなり、手のこんだ印刷物も増えた。さらに、成績処理や提出書類の作成も今ではパソコンを活用して行うものがほとんどとなった。

こうしてワープロやパソコンの普及は教師の仕事をすっかり変えてしまったが、世の中全体が同じ方向へ大きく変化しているのだから仕方がない面もある。

教師の仕事時間の多くがOA機器を駆使した事務的な内容になってきている。さらに、日進月歩のパソコンの新しい技能を習得するには空き時間や休日に独習や我流で行わざるを得ないのは困った問題である。市区町村が開催する講習会の機会を増やし、内容も充実させてほしい。

ところで、1993年の調査（vol.47「教師の指導力」）で「パソコンや教育機器を授業や仕事に取り入れたい」に「かなりそう思う」と答えたのは24.4%にとどまっていた【vol.47 図Ⅲ—2】。

当時の教師の意識に逆行し、今や教師の仕事はコンピュータの活用をさせて通れない時代が到来したようである。

3. 公立学校の役割・魅力

① 事例：転校生の受け入れに思う

転居、保護者の都合、いじめや不登校、学業不振、生活指導上の問題、外国からの帰国に伴う編入等々で、他の学区域や私立校から様々な形で生徒が転入してくる。日頃の授業、そして指導が困難な生徒への対応だけでなく、転入生を受け入れた事例を思い起こすことから公立学校が負っている役割がみえてくる。

A君は3年の2学期末に私立の大学附属校から転入してきた。「父親の会社の倒産、経済的な理由」とされていたが、本当の理由は最後までわからなかった。経済的な理由だったはずが、私立の高校を「もしも」のために受験した。

B子さんは3年の1学期に「学校での友人間のトラブル」を理由に私立校から突然転入した。「なぜ、あのことで…」と、保護者も納得していない転校だった。受け入れた担任が、「たった1人の影響がこんなに大きいとは思わなかった」と語ったのを覚えている。

C君、D君は外国からの帰国生だった。母親は転入に際し、「〇〇中学校の編入を受ける予定ですが、とりあえず…」と説明した。結果として、1か月あまりで目的の学校へ転出していった。

② 担任の一喜一憂

学級はたった40人ほどの集団である。その一人ひとは個性を持ち、異なる能力を有している。授業、行事、生徒会活動、部活動、日常の生活のすべての場面で生徒の力関係は大きく揺れ動く。

新学期に学級間のバランスや人間関係など種々の条件を満たすように作られた学級でも、転入生などをたった1人受け入れただけで学級のムードが一変してしまうことがある。よい方向に変化することもあるが、担任が気を揉むことも多い。公立学校は就学通知があれば誰でも分け

隔てなく受け入れ、学習の機会を保障している。したがって、こうした事例を挙げたら枚挙にいとまがない。そして、学校の対応も事例ごとに千差万別である。

受け入れるときには臍に落ちない気持ちになり、矛盾を感じることも多い。また、中には新しい環境に適応できずに新たな課題を抱えてしまう生徒もいるが、ほとんどは新しい集団の中で上手に育ち、順調に巣立って行く。

日本の公立学校は様々な生徒が集まり、触れあいながら成長していくところである。困難なこともあり決して楽なことばかりではないが、特別な事情があって転校してきた生徒を思い起こすと、日頃はあまり意識をすることはないが、公立学校の役割そして様々な魅力を再認識させられる。さらには公立学校の教師であることをとても誇りに感じる。

4

生徒指導

三枝恵子

中高生の問題行動が次々に起き、おとなたちはその対応に苦慮している。「中学生が変わってきた」「子どもたちの心がつかめず行動が理解できない」など、親や教師にとって悩みは深い。特に1997年に起きた神戸のA少年の事件では、残忍な行為を中学生が行ったことに親や教師は戦慄した。1998年1月、栃木県で男子中学生が女性教師を刺殺した。保健室からの戻りが遅いことを注意され、ナイフで教師を刺し死亡させたものだ。続いて男子高校生が女子生徒に自分の通路をふさがれ

たと思いスーパーで包丁を購入して女子生徒を刺す事件も起こった。その後も東京都でピストルを奪おうとして中学生がナイフで警官を襲撃した事件や、埼玉県では学校内で中学1年生が同級生を刺殺する事件があり、年齢や対象は異なるが中高生の傷害事件や殺人事件、いじめ、性非行、不登校、さらに学校ではクラスが荒れ、授業ができない状態も進行している。これら一連の生徒指導の問題の実態と背景を探っていきたい。

1. 『授業の荒れ』

中学生の生徒指導上の問題は様々あるが、ここでは授業での問題行動に視点をあてた。授業中に私語が多くざわざわして授業にならないことや、教師の話を聞かない、教師の質問を無視する、教室から出て行く生徒など、授業がしにくい状態が増加している。小学校での状況を「学級崩壊」という言葉でメディアが特集を組んで問題提起し、学校が荒れている印象を受けた。小学校でのこのような学級崩壊状況が中学校ではどのように進行しているのだろうか。モノグラフでは、先行研究や教師のヒアリングなどから「学級崩壊」という言葉を避け、小学校では『学級の荒れ』、教科担任制である中学校では『授業の荒れ』

という語を用いて分析した。vol.63『『授業の荒れ』を考える(教師調査)』(1999年)、vol.65『授業の荒れ(生徒調査)』(2000年)である。

1) 『授業の荒れ』の分類

モノグラフではこの授業での生徒指導上の問題、すなわち、授業ができない困難な状況を3段階に分けて捉えることにした。第1段階は「授業の崩れ」で、何となく授業がうまくいかない、生徒が居眠りをしたり私語をしたりする状況で、どこのクラスにも起こりえる望ましいとは思わないが日常的な光景である。第2段階は「崩れ」がもう少し進んだ「授業の乱れ」で、生徒たちが質問しても返

事をしない、答えない、注意されてもすぐ騒がしくなるなど、生徒の気持ちが教師から離れてしまう状態。第3段階は生徒たちが集団となって教師を無視し、何人かの生徒が授業中無断で教室を出入りする無秩序状態の「授業の荒れ」で、こうした3分類によって、生徒の授業中の様子や授業ができない状況を検証し、『授業の荒れ』と教師の関係や荒れを引き起こす背景を探った。

表4-1は、『授業の荒れ』の状態を生徒に尋ねた結果である。『荒れ』の第1段階の「授業の崩れ」を示す「生徒の気持ちが何となく授業に向かない、つまらない」に「すでにそうになっている」と答えた割合は13.8%、「たぶんなと思う」を含めると42.1%、第2段階の「授業の乱れ」を示す「先生と生徒の気持ちが通じ合えず、授業がダラダラして生徒もしらけている」ことが「すでにそうになっている」11.3%、「たぶんなと思う」を合わせると35.8%、第3段階の「授業の荒れ」状態では「すでにそうになっている」12.0%と「たぶんなと思う」の6.2%を合わせると

18.2%が、「授業の荒れ」を認識している。この状況を表4-2の教師調査でみると、第1段階の「何となく授業がうまくいかない」という「授業の崩れ」は、教師の61.7%が「2回以上ある」と答えている。次に「生徒の気持ちが先生から離れる」第2段階の「授業の乱れ」が「2回以上ある」割合は46.9%、最も深刻な「生徒が反発して授業が成り立たない」第3段階の「授業の荒れ」を「2回以上」体験している者も17.3%、「1度だけある」の8.7%を合わせると26.0%になる。

このように『授業の荒れ』を3段階に分類してみると、「何となく授業がうまくいかない」ことは、大部分の教師が体験し、さらに、もう少し進んで「生徒の気持ちが先生から離れる」こともそんなに珍しいことではないようである。そして第3段階の「生徒が反発して授業が成り立たない」という「授業の荒れ」を体験している割合は、荒れの第1、第2段階からみると低い割合となっているが、4人に1人が授業崩壊の体験を持っていることになり、事態はかなり深刻な様子である。

■表4-1 『授業の荒れ』の判断（生徒調査）（vol.65 表17から）

	すでにそう なっている	たぶん なと思う	小計	(%)	
				もしかすると なと思う	ぜんぜんなら ないと思う
授業の崩れ（生徒の気持ちが何となく授業に向かない、つまらない）	13.8	28.3	42.1	42.2	15.7
授業の乱れ（先生と生徒の気持ちが通じ合えず、授業がダラダラして生徒もしらけている）	11.3	24.5	35.8	39.3	24.9
授業の荒れ（おしゃべりや教室内を立ち歩く生徒、先生に反発したり勝手なことをしている生徒が多くて授業ができない）	12.0	6.2	18.2	10.9	70.9

■表4-2 『授業の荒れ』体験（教師調査）（vol.63 表32）

	1度も ない	1度だけ ある	2～3回 ある	4～5回 ある	それ以上 ある	小計
						(%)
授業の崩れ（何となく授業がうまくいかない）	30.5	7.8	27.6	8.7	25.4	61.7
授業の乱れ（生徒の気持ちが先生から離れる）	42.1	11.0	25.4	8.4	13.1	46.9
授業の荒れ（生徒が反発して授業が成り立たない）	74.0	8.7	8.9	3.1	5.3	17.3

2)『授業の荒れ』の状況

それでは、『授業の荒れ』とはどんな状態を指すのか。授業中、生徒がしている学習以外のことや逸脱行為から授業の荒れた状態を探してみる。表4-3は、「授業ができない、学級が荒れている」クラスの生徒の様子を教師に尋ねた結果である。「とてもあてはまる」の数値に着目すると、「授業中、注意されて

もおしゃべりをやめない」が57.7%と半数を超え、次いで「先生の注意や叱責に反抗する」「授業中、教室を出たり入ったりしている」「先生の指示や質問を無視する」「机や教室の壁に落書きがあるなど教室内が汚い」「クラスにまとまりがない」が4割を超え、授業を行うことが難しい状況がうかがえる。

■表4-3 「授業ができない、学級が荒れている」クラスの生徒の様子（教師調査）
(vol.63 表28)

	(%)				
	とてもあてはまる	わりとあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
授業中、注意されてもおしゃべりをやめない	57.7	29.2	10.6	1.2	1.3
先生の注意や叱責に反抗する	49.0	29.6	12.7	6.2	2.5
授業中、教室を出たり入ったりしている	44.7	28.7	15.8	6.9	3.9
先生の指示や質問を無視する	43.4	30.2	15.5	7.4	3.5
机や教室の壁に落書きがあるなど教室内が汚い	42.7	32.2	15.0	6.6	3.5
クラスにまとまりがない	41.7	31.6	17.1	8.3	1.3
教室の後ろの方で、寝ころんだり座ったりしている	35.6	24.3	18.5	11.7	9.9
授業が始まっても教科書を出さない	39.0	36.6	19.3	3.9	1.2
先生が言ったことのあげあしをとる	37.9	29.2	18.1	10.6	4.2
友だちの発言をなじったり笑ったりする	36.3	27.1	23.8	9.7	3.1
先生を批判するグループがある	34.9	30.8	20.2	11.0	3.1
アメやガムをこっそり食べている	31.5	24.8	23.8	11.6	8.3
マンガや小説を読んでいる	30.3	28.5	23.9	12.3	5.0
授業中、ウォーキングラジカセなどで音楽を聴いている	29.6	20.1	15.4	16.4	18.5
手紙や交換日記を書いている	28.8	29.6	26.3	12.0	3.3
先生に対抗して、クラスが1つにまとまっている	14.3	14.9	24.4	29.0	17.4

表4-4では、授業中に生徒がしている逸脱行為の生徒と教師の認識の差を示した。教師調査の結果は、「授業中に生徒がしていること」が「よく十ときどき」ある割合で、生徒調査は「何度も十ときどき」ある割合である。「授業が始まって教科書やノートを出さない」生徒は27.9%、一方、教師では62.3%と、生徒と教師の認識の差が顕著である。以下、「注意されてもおしゃべりをやめない」(生徒19.4%、教師42.7%)、「机の上を彫ったり落書きしたりする」(生徒14.9%、教師46.5%)と続き、授業中の逸脱行為に対する認識に生徒と教師ではズレがみられる。

モノグラフでは『授業の荒れ』を3分類して捉えているので、ここで授業中の逸脱行為と荒れの3分類の関連を検証しておこう。表4-5は、『授業の荒れ』のそれぞれの段階について、「1度もない」群と「2回以上ある」群とを対比させて授業中の生徒の様子を示している。生徒がしていることが「よく十

ときどき」ある割合で差が20ポイント以上開いた項目は、「授業の崩れ」では、「授業が始まって教科書やノートを出さない」「手紙や交換日記を書いている」「内職（他の教科の勉強）をする」「私語が多く、授業が中断される」「消しゴムを小さくして投げる」「友だちの発言をなじったり笑ったりする」があげられる。次に「授業の乱れ」では、「崩れ」の項目に加え「居眠りをする」「言ったことのあげあしをとる」「注意や叱責に反抗する」「マンガや小説を読んでいる」がみられ、「授業の荒れ」では、さらに「指示や質問を無視する」「授業を聞いても何の意味もない」と言う「アメやガムを食べている」「授業中、理由もなく教室の外に出たがる」「授業が始まって、教室を勝手に出入りしている」「紙飛行機を作って、教室の窓から飛ばす」が並ぶ。そして、10ポイント以上差のある項目を拾い出すと、「授業の荒れ」ている授業では、ほぼ全ての項目で差がみられる。

■表4-4 授業中の逸脱行為（授業中していること）（vol.65 表15から）

	何度も ある	ときどき ある	小計	今までに 1、2回ある	ぜんぜん ない	(%) 中学教師 調査
授業が始まって教科書やノートを出さない	5.9	22.0	27.9	25.3	46.8	62.3
注意されてもおしゃべりをやめない	4.6	14.8	19.4	28.6	52.0	42.7
机の上を彫ったり落書きしたりする	4.9	10.0	14.9	26.0	59.1	46.5
友だちの発言をなじったり笑ったりする	3.2	8.5	11.7	24.2	64.1	28.2
消しゴムを小さくして投げる	2.8	8.0	10.8	17.6	71.6	37.3
先生が言ったことのあげあしをとる	2.1	4.9	7.0	11.4	81.6	18.3
先生の注意や叱責に反抗する	2.4	4.4	6.8	12.4	80.8	17.8
マンガや小説を読んでいる	2.5	2.9	5.4	5.6	89.0	21.2

中学教師調査＝『授業の荒れ』を考える（vol.63）より
「授業中に生徒がしていること」で「よく十ときどき」ある割合

■表4-5 授業時間に生徒がしていること × 『授業の荒れ』体験（教師調査）
（vol.63 表36）

(%)

	授業の崩れ		授業の乱れ		授業の荒れ	
	1度も ない	2回以上 ある	1度も ない	2回以上 ある	1度も ない	2回以上 ある
授業が始まって教科書やノートを出さない	41.5	《 74.4	45.2	《 76.9	55.4	《 87.2
居眠りをする	46.1	< 64.9	47.6	< 67.6	54.6	< 71.3
手紙や交換日記を書いている	31.9	< 55.7	32.9	< 59.0	39.9	< 64.9
内職（他の教科の勉強）をする	27.8	< 53.9	26.9	《 58.2	37.7	< 67.0
私語が多く、授業が中断される	20.1	《 56.1	23.9	《 60.9	32.7	《 71.3
消しゴムを小さくして投げる	23.1	< 46.9	23.4	< 51.9	29.0	< 58.5
友だちの発言をなじったり笑ったりする	14.6	< 35.9	16.3	< 39.4	22.5	< 46.8
言ったことのあげあしをとる	10.4	< 23.0	8.8	< 28.9	11.1	< 40.4
注意や叱責に反抗する	6.1	< 23.7	5.7	< 28.2	9.4	《 46.8
マンガや小説を読んでいる	13.9	< 25.1	8.8	< 30.0	13.6	《 43.6
指示や質問を無視する	4.3	< 15.7	2.3	< 20.0	4.0	《 35.1
「授業を聞いても何の意味もない」と言う	3.7	< 19.1	4.0	< 22.3	7.9	< 32.9
アメやガムを食べている	5.5	13.1	4.9	< 14.9	5.2	< 27.7
授業中、理由もなく教室の外に出たがる	4.9	< 15.7	5.7	< 16.8	6.1	< 32.0
授業が始まって、教室を勝手に出入りしている	3.1	< 16.5	4.9	< 17.9	4.7	《 36.1
授業中、廊下やグラウンドをうろうろしている	1.2	< 11.5	3.1	12.5	3.7	< 23.4
紙飛行機を作って、教室の窓から飛ばす	2.4	10.6	2.7	< 13.3	3.5	< 24.4
授業中、無断で保健室に行く	3.0	9.5	4.0	10.2	3.7	< 19.2
教室の後ろの方の床に寝ころんでいる	1.2	8.0	1.8	9.0	2.5	< 12.8
「こんな授業を聞きたくない」などと大声で叫ぶ	0.6	7.1	0.4	8.6	1.5	< 14.9
教室の後ろで集まって話をしている	1.8	8.3	2.7	8.6	1.7	< 18.1
廊下を通る先生に教室から声をかける	1.2	4.7	0.9	6.3	0.7	< 14.0
携帯電話やポケベルが鳴る	0.6	4.1	0.4	5.1	2.0	7.4
授業中、ウォーキングラジカセなどで音楽を聴いている	1.2	5.4	0.9	5.9	0.7	< 13.8

「よく」＋「ときどき」ある割合
 <は10ポイント、《は20ポイント、《《は30ポイント以上の差

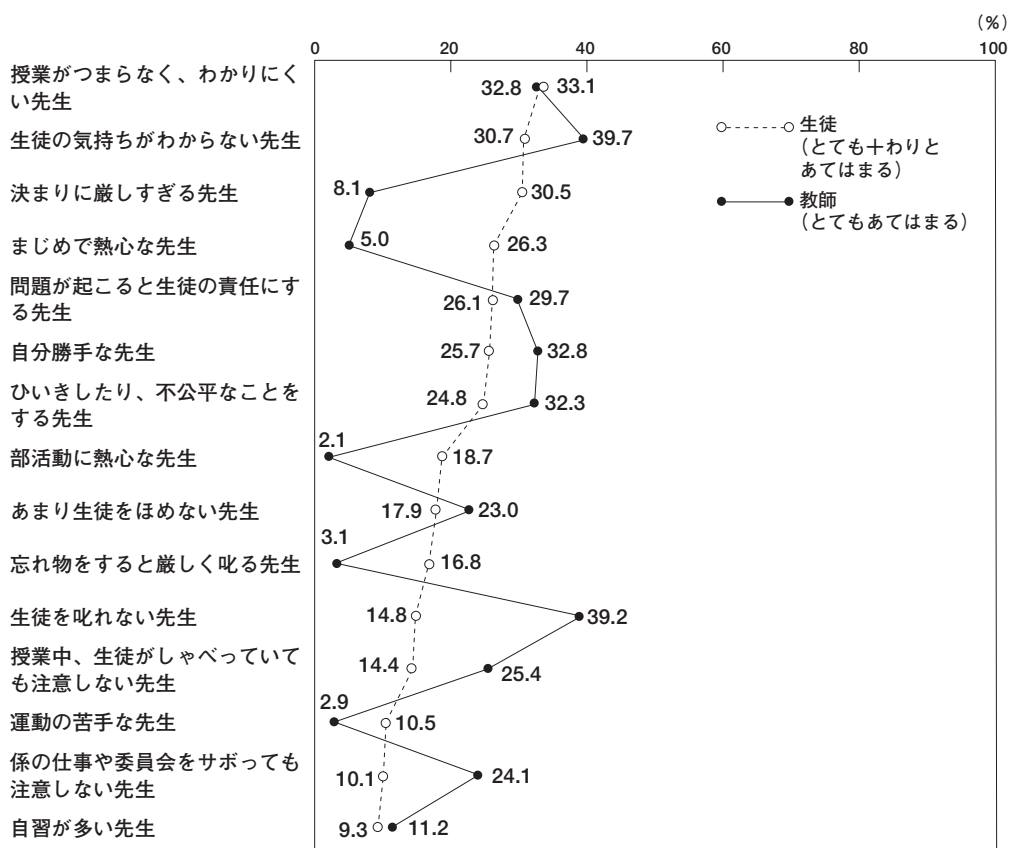
以上のように、『授業の荒れ』を3段階に分類すると、第1段階では、多くの教師が経験しているように「私語をする生徒」など軽い逸脱が、それより進んで第2段階では、生徒が反抗的で「注意や叱責に反抗する」など逸脱の程度が進み、教師に反発する態度が加わり、第3段階の「授業の荒れ」では、それを超えて、「指示や質問を無視する」「教室を出ていくことや廊下やグラウンドでうろうろしていたり、後ろの方に集まって寝ころんだり話をしている」深刻な状況となる。このように『授業の荒れ』を3段階でみていくと、荒れの進行により、「授業中、わかっているも発言しない生徒」「自己中心的で、まわりの人のことを考えない生徒」「進んで働いたり、

手伝ったりすることをいやがる生徒」から「授業中、席を立ったり、教室を出たり入ったりする生徒」「先生を無視する生徒」まで、授業に意欲を示さない生徒や家庭できちんとしつけられていない生徒、教師を無視したり、反抗したりする生徒が増え、授業ができない状況となることが検証される【vol.63 表42】。

3)『授業の荒れ』と教師

では、荒れを起こす教師とはどのような教師なのか、図4-1により授業が騒がしく中断されている教師像を生徒調査と教師調査からみてみよう。なお、教師調査は『「学級が荒れ、授業ができない」といわれるクラスの担任や教科担任は、あなたからみてどんな先

■図4-1 「授業が騒がしくて中断される」教師像 (vol.65 図5)

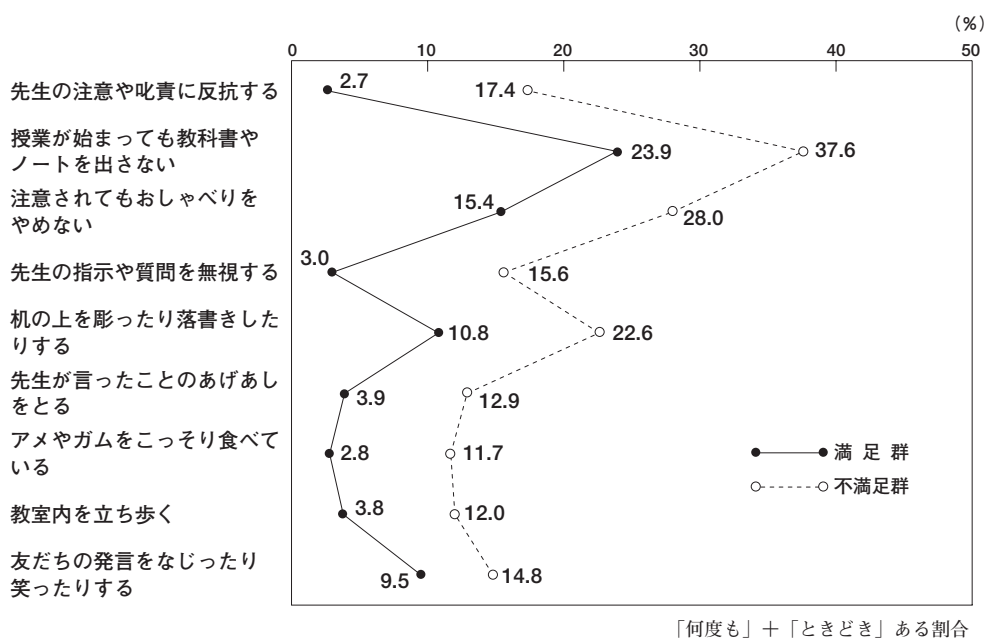


生ですか」と尋ねたなかから生徒調査と共通の項目をあげている。授業や生徒指導では生徒と教師との立場から認識に微妙なズレがあるので、ここでは教師調査は「とてもあてはまる」数値のみを示している。

生徒からみた授業を中断される教師は、「授業がつまらなく、わかりにくい先生」33.1%、「生徒の気持ちがわからない先生」30.7%、「決まりに厳しすぎる先生」30.5%。一方、教師では、「生徒の気持ちがわからない先生」39.7%、「生徒を叱れない先生」39.2%、「授業がつまらなく、わかりにくい先生」32.8%、「自分勝手な先生」32.8%が上位を占める。授業がつまらなくわかりにくい、生徒の気持ちがわからない教師の授業が荒れやすいと感じるのは、生徒も教師も共通の思いである。しかし、厳しすぎる教師、まじめで熱心な教師、叱れない教師には生徒と教師の認識に大きな差がみられ、問題行動を起こす生徒への対応の難しさが感じられる。

次に、中学校では、教科担任制であるが、生徒たちの学校生活の基盤はクラスを単位としているので、担任への満足と授業中の逸脱行為との関連を図4-2に示した。図は満足群として今の担任で「とてもよかった」と答えた28.1%、「あまり+ぜんぜんよくなかった」と答えた21.4%を不満群としてクロス集計した。担任に満足している生徒が「先生の注意や叱責に反抗する」のは2.7%、「先生の指示や質問を無視する」のは3.0%にとどまる。しかし、担任に不満な生徒が教師に反抗する割合は17.4%、無視するのは15.6%にも達する。また、『授業の荒れ』の判断について表4-6でみると、担任への不満が大きい生徒の場合、荒れが起きているか、起こっていないにしても今後荒れる可能性が大きいと感じており、担任への不満が『授業の荒れ』に深く関与しているといえる。集団内での行動に慣れていない生徒や耐性に乏しい生徒の増加と、生徒たちの変化に対応できない教師

■図4-2 授業中の逸脱行為 × 担任への満足（生徒調査）（vol.65 図10から）



の姿勢が浮かんでくる。

『授業の荒れ』は学校全体にも影響し、第1段階の「崩れ」の状況では、「傘や自転車を無断使用する」「トイレのドアや手すりが壊される」「先生がののしられたり暴言を吐かれたりする」「先生を挑発する」などがみられ、第2段階になると、そうした第1段階に加えて「机やいすに落書きや傷がある」「トイレや校舎の隅にたばこの吸いがらが落ちている」「お金や靴が盗まれる」「下足箱が蹴飛ばされてゆがんでいる」「黒板に先生や友だちの悪口が書かれる」「トイレトーパーが教室や廊下に散乱している」など逸脱行為が増える。さらに第3段階の「荒れ」では「非常ベルが鳴る」「授業ができないので、校長や保護者の参観を頼む」「先生の車や私物が傷つけられたり盗まれる」「先生がワイシャツを掴まれたり蹴られたりする」など、段階を追って学校全体が機能しなくなる状態となる【vol.63 表44】。

こうした調査により『授業の荒れ』は、い

くつかの段階を追って深刻さを深めていく様子が明らかにされた。第1段階の「何となく授業がうまくいかないこと」は中学校においてはよくみられる現象、いわゆる「教室がざわついている」状態である。第3段階の「荒れ」、すなわち「授業ができない」状態は、言われるほど多くはみられないが、「授業の荒れた」状態になると、ある特定のクラスの問題ではなく、教科の枠も超えた学校全体に深刻な影響が及ぶ結果がみられた。こうした『授業の荒れ』の背景には、教科担任やクラス担任とのかかわりや学校の楽しさや成績、子どもたちの規範感覚や充足感が持てずイライラするなどのストレスの強さなど様々な要因が見いだされた。学校や教師はこうした子どもたちが抱える問題に敏感に反応し、『授業の荒れ』のより早い段階で適切に対応して「授業のざわつき」ととどめ、崩壊と名づけられるような状態に持ち込まないことが肝要である。

■表4－6 『授業の荒れ』の判断 × 担任への満足（生徒調査）（vol.65 表44から）

		(%)			
		すでに そうなっ ている	たぶん なると 思う	もしかす るとな ると 思う	ぜんぜん ならない と思う
授業の崩れ（生徒の気持ちが無となく授業に向かない、つまらない）	満 足 群	9.5	23.1	48.7	18.7
	不満足群	27.1	32.3	30.7	9.9
授業の乱れ（先生と生徒の気持ちを通じ合えず、授業がダラダラして生徒もしらけている）	満 足 群	7.2	20.3	40.5	32.0
	不満足群	25.4	30.2	31.4	13.0
授業の荒れ（おしゃべりや教室内を立ち歩く生徒、先生に反発したり勝手なことをしている生徒が多くて授業ができない）	満 足 群	9.4	4.5	9.4	76.7
	不満足群	20.2	9.9	11.7	58.2

2. 問題行動の背景 ～閉塞状況の中の生徒たち～

1節では、中学生の生徒指導上の問題として『授業の荒れ』に視点を置いてデータを追ってみた。『授業の荒れ』の背景に子どもたちの教師との関係、学校の楽しさ、規範感覚、ストレスなどの要因が見いだされた。ここでは「ムカつく」「キレル」現象を軸に、規範感覚やストレスが中学生の成長発達の中でどのように問題行動とかかわっているのか明らかにしたい。関連するモノグラフはvol.61「キレル・ムカつく」(1998年)、vol.54『『規範感覚』と『いじめ』』(1996年)、vol.59「閉塞状況の中の生徒たち」(1998年)である。

1) キレル・ムカつく生徒たち

中学生にとってキレル、ムカつくとはどのようなメカニズムを持った行動なのか、自由記述から探ってみた。「キレル」とは、暴力行為、言葉による暴力、モノにあたる行為、パニック状態になること、退嬰的になる行為などで、欲求不満やストレスへの耐性が低い生徒が攻撃性表出の仕方の学習が十分でない場合の行為を意味する。「ムカつく」とは、「相手への嫌悪感、相手を拒否したい」すなわち「攻撃性の表出」として、また「自分が内的に不快な状態にあること」を表現する言葉として使われる。下学年ほど相手への攻撃手段として、上学年になると自分の内的状態を表現する語となっており、自分の意思や感情をていねいに説明せずこの言葉で多様な感情を一括表現しているようである。

日頃、「キレそうになること」や「ムカつくこと」はどのくらいあるのだろうか。「キレそうになること」が「よくある」14.1% (男

子12.7%、女子15.7%)に、「ときどきある」の36.0% (男子34.5%、女子37.6%)を合わせるとほぼ半数に近くなる。そして、「自分がキレたらどうなりそうか」と尋ねた結果では、「何をするかわからない」25.6% (男子31.1%、女子19.7%)と男子の方が内なる暴力性に不安を持っている様子がうかがえる【vol.61 図1-3・図1-4】。一方、「ムカつくこと」については、「毎日のようにある」が19.9% (男子14.0%、女子は26.5%)と約2割、「週に何回かある」の41.2% (男子36.7%、女子46.1%)を合わせると全体では6割を超える。逆に、ムカつくことが「ほとんどない」のは、男子14.6%、女子5.2%で、ムカつき状態は女子の方が多い傾向がみられる【vol.61 図2-1】。キレル生徒の背景には慢性的な「ムカつき状態」の存在があり、そうした思いに耐えながら毎日過ごしている中学生の姿が浮かんでくる。

それでは、「ムカつく」ときはどんなときか、具体的な場面で尋ねたのが表4-7である。友だち関係では「陰で悪口を言われる」「いばっている人に」「友だちが自分勝手」「友だちにだまされる」「仲間外れにされる」、教師との関係では「えこひいきをする」「できない生徒をけなす」「嫌いな先生に注意される」「言いたいことを皮肉で言う」、親との関係では「親が大事な友だちをけなす」「親が前のことを持ち出して叱る」「親に細かく指図される」「親が友だちと比較してけなす」「親にもっと勉強しろと言われる」など、日常的な「ムカつき状態」の中で生活する中学生の姿がうかがえる。

■表4-7 ムカつくとき (vol.61 図2-2・図2-3・図2-4から)

(%)

	とても ムカつく	かなり ムカつく	少し ムカつく	あまり ムカつかない	ぜんぜん ムカつかない
友だちの間でムカつくとき					
陰で悪口を言われる	44.3	21.0	18.1	8.2	8.4
いばっている人に	41.7	22.5	19.7	8.4	7.7
友だちが自分勝手	33.5	22.7	26.9	8.6	8.3
友だちにだまされる	33.4	24.0	25.0	10.3	7.3
仲間外れにされる	32.8	21.5	19.9	10.9	14.9
先生についてムカつくとき					
えこひいきをする	44.5	20.3	18.8	7.3	9.1
できない生徒をけなす	31.7	18.2	22.0	14.4	13.7
嫌いな先生に注意される	28.2	17.1	24.7	16.1	13.9
言いたいことを皮肉で言う	23.6	21.2	25.9	16.3	13.0
授業時間を延長する	23.0	15.6	26.0	19.4	16.0
家でムカつくとき					
親が大事な友だちをけなす	37.4	21.2	23.7	7.1	10.6
親が前のことを持ち出して叱る	30.5	23.4	25.9	9.9	10.3
親に細かく指図される	29.2	23.1	29.8	10.5	7.4
親が友だちと比較してけなす	29.2	19.0	22.6	12.2	17.0
親にもっと勉強しろと言われる	22.7	17.4	26.7	18.4	14.8

2) ムカつく・キレル背景

まず、ムカつくこととキレルことの間を関係する以下のクロス集計からみておこう。

毎日のようにムカつく……………	41.1%
週に何回かムカつく……………	18.4%
月に何回かムカつく……………	2.3%
年に何回かムカつく＋ムカつかない…	1.5%
「毎日のように十週に何回か」キレル割合	

「毎日のようにムカつく」生徒のうち、「毎日のように十週に何回か」キレル者は41.1%に達するが、「年に何回かムカつく＋ムカつかない」場合はキレルことも1.5%とごくわずかである。表4-8はキレルサイドからムカつきをみたものだが、「毎日のようにキレル」生徒の90.9%が「毎日のようにムカつく」が、キレたことがない生徒はムカつくことも少ない。これらの数値からムカつくこととキレルことには密接な関係があり、キレル前提

にムカつきがあることがわかる。

こうしたムカつきとキレルことの密接な関係をふまえて、表4-9では体調の悪さと、表4-10では将来像とキレルこととの関連をみてみた。キレル生徒は他の生徒と比べ、体調が悪く、熟睡できず、食欲がない。将来の見通しも明るい展望は開けず、努力する目標も持てない。さらに図表は省略したが、キレル生徒は学校生活でがまんばかりしており、目立たないように生活している。友だち関係では気にしていることを言われたり、仲間はずれ感や無視されている感じを持つ者が多く、友だちとうまくいっていない様子もうかがえる。親との関係でもキレル生徒は親とうまくいっていない割合が高い。したがって、キレル生徒やキレやすい生徒は現在の閉塞状況のなかでいらだつ生活を強いられ、将来についても見通しの暗さを感じている。

■表 4－8 ムカつく × キレル (vol.61 図 4－1)

(%)

	毎日のように ムカつく	週に何回か ムカつく	月に何回か ムカつく	年に何回か十 ほとんどない
毎日のようにキレル	90.9	6.8	0.0	2.3
週に何回かキレル	37.8	57.1	3.8	1.3
月に1、2回キレル	16.2	55.3	23.5	5.0
今までに何回かキレた	13.6	40.5	26.6	19.3
1度もキレたことがない	13.5	29.1	23.5	33.9

■表 4－9 体調・感情 × キレル (vol.61 図 4－4)

(%)

	忙し すぎる	小さい ことが 気になる	体調が 悪い	熟睡 できない	人からの 軽視に 腹立つ	食欲がない
毎日のようにキレル	52.4	44.2	33.4	25.6	41.9	14.0
週に何回かキレル	29.9	35.2	16.8	16.1	21.9	6.5
月に1、2回キレル	15.2	17.9	8.9	10.6	9.5	4.5
今までに何回かキレた	16.5	17.2	9.0	7.7	10.7	5.3
1度もキレたことがない	15.8	14.2	11.1	8.8	6.6	3.1

「とてもそう (ある)」の割合

■表 4－10 将来像 × キレル (vol.61 図 4－8 から)

(%)

	毎日のよう にキレル	月に1、2回 キレル	1度もキレた ことがない
望みの高校に入れる	15.6	7.3	7.0
望みの仕事につける	13.6	6.8	5.3
幸せな家庭生活を送れる	14.0	5.7	6.7
有名になれる	45.0	18.9	19.8
社会的に尊敬される	24.4	19.3	18.6

「とても無理」の割合

3) いじめと規範感覚

生徒たちの規範感覚の崩れについては、モノグラフでは1983年に調査を行い、1995年には12年間の中学生の意識の変化を追ったものがある（vol.51「中学生は変わったのか」に詳しい）。また、本誌では6章で詳しく述べられているので、ここではいじめの実態と規範意識の関連について述べたい。以下いじめられた・いじめた体験を示した。

「いじめた」「いじめられた」ことにまったく無関係	36.9%
「いじめた」「いじめられた」ことにほとんど無関係	45.9%
「いじめた」ことはあるが「いじめられた」ことはない	5.4%
「いじめられた」ことはあるが「いじめた」ことはない	10.1%
「いじめられた」こともあるし、「いじめた」こともある	1.7%

学級の中にあって、いじめがあってもまったく無関係に生活している生徒もいれば、いじめやいじめられの対象になって苦しむ生徒もいる。規範意識といじめとの関連をみると「いじめられた」生徒は喫煙や飲酒を「とても悪い」と思っているが、「いじめた」生徒は規範意識の崩れが目につく。そして逸脱行為との関連では、「いじめられた」生徒も「いじめた」生徒も逸脱行為に走る傾向がみられる【vol.54 表40・表41】。

4) ストレスの高さと行動

ストレスを感じたときの行動は「友だちと遊びに行く」が最も多く、「よくする」31.6%、「わりと」を合わせると58.1%、「マンガなどを読む」が「とても十わりと」するを合わせると56.2%と5割を超える。次いで「テレビゲームをする」「ビデオを見る」「体を動かす」と続く。「友だちと遊びに行く」を除けば、生徒たちは自分の部屋でマンガやテレビゲームなどで気晴らしをする孤独型の時をもってむなしさや心のもやをはらしていることが多

いようだ【vol.59 図13】。

次に、ストレスに伴う身体的症状の「下痢をしやすい」「イライラしている」「物事に集中できない」「頭がボーっとしている」「なかなか眠れないことがある」の5項目を用いて尺度化し、ストレスの高位群、中位群、低位群に3分類し、友だち関係や学校での不快体験を追ってみた。表4-11によれば、「友だちと意見が違ふときは、友だちの意見にしたがうことが多い」「授業中、みんながわからない答えは、わからないふりをする」「クラスの中では目立たないようにしている」「クラスのみんなと同じことをしようとする」「友だちと同じでないと気になる」のすべての項目でストレスの高位群の「とても十わりと」そうと回答した割合が高い数値になっている。次に、表4-12で学校での不快体験との関連をみてみると、「友だちから気にしていることを言われる」「理由もなく、友だちから仲間はずれにされる」「理由もなく、友だちから無視される」「顔やスタイルのことでからかわれる」などすべての項目で、ストレスの高位群が「よく十ときどき」と答える割合が高くなっている。したがって、ストレスの高位群は友だちと同調しよう、目立たないようにしようと思いながら、より友だちから仲間はずれやからかいを受け、いじめられていると感じている。

表4-13は、ストレスとムカつきの関連を示した。ストレスの高位群で「とてもムカつく」の数値が50%を超える項目は、「おとなから、他の子と比べて見習うように言われたとき」「おとなから、入試のためにやりたいことをがまんするように言われたとき」「おとなから、自分の悪いところだけを注意されたとき」「がまんばかりして気分転換できないとき」「いやなことを忘れられないとき」があげられる。ストレスの高位群はなるべく目立たないようにみんなと同調しようとするものの、いじめられたり仲間はずれにされていると感じている。そして自分を大切に思ってくれる人もいやなことがあっても相談した

■表 4-11 友だち関係の不安 × ストレス (vol.59 表51)

(%)

	高位群	中位群	低位群
友だちと意見が違うときは、友だちの意見にしたがうことが多い	44.0	37.9	28.4
授業中、みんながわからない答えは、わからないふりをする	39.4	35.3	24.3
クラスの中では目立たないようにしている	35.9	31.9	25.6
クラスの人々と同じことをしようとする	35.4	33.0	23.5
友だちと同じでないと気になる	32.5	23.0	14.1

「とても」＋「わりと」その割合

■表 4-12 学校での不快体験 × ストレス (vol.59 表52から)

(%)

	高位群	中位群	低位群
友だちから気にしていることを言われる	62.8	47.7	36.5
理由もなく、友だちから仲間はずれにされる	19.0	11.1	5.9
理由もなく、友だちから無視される	16.9	10.2	4.9
友だちとけんかする	29.4	20.4	12.9
顔やスタイルのことでからかわれる	34.3	21.7	15.5

「よく」＋「ときどき」ある割合

■表 4-13 ムカつくか × ストレス (vol.59 表55)

(%)

	高位群	中位群	低位群
おとなから、他の子と比べて見習うように言われたとき	70.4 (86.4)	58.2 (82.4)	51.2 (74.1)
おとなから、入試のためにやりたいことをがまんするように言われたとき	60.0 (79.9)	43.5 (74.5)	36.8 (64.6)
おとなから、自分の悪いところだけを注意されたとき	59.7 (81.8)	42.6 (74.7)	34.4 (61.4)
がまんばかりして気分転換できないとき	59.6 (82.0)	41.2 (73.6)	30.9 (58.0)
いやなことを忘れられないとき	51.2 (75.0)	32.8 (68.3)	28.3 (52.1)
クラスで仲間はずれにされたとき	44.7 (67.7)	43.8 (71.0)	41.3 (65.6)
勉強したのにテストの成績が思ったよりも悪かったとき	40.0 (68.2)	25.9 (69.5)	29.1 (53.0)
何かうまくいかなくて、人のせいにできないとき	36.2 (58.5)	18.7 (42.4)	19.3 (33.1)
塾や部活動などで忙しくて、疲れているとき	36.3 (56.5)	18.8 (44.3)	14.4 (31.7)

「とてもムカつく」割合
() 内は「とても」＋「かなり」ムカつく割合

りする人もいないと考える傾向が強く、かなり追いつめられた状態からか教師やおとなから注意されることになかなりの反発をしているようである。

以上みてきたように、ムカつく・キレル、いじめに共通するのは、中学生たちの生活が閉ざされている状況にある点だ。学校に行っても学級しか居場所がない、学級には気の合わない子もいるが人間関係を壊さないように緊張した生活をする。教師にも授業でも何となく充足感が感じられず、学校にいても楽し

くない。帰宅して塾に行く。学校より気楽な塾から帰って遅い夕食や入浴。のんびりできるのは夜半すぎで、自分の部屋でのテレビゲームや音楽、メールでのアクセスをするのが夜更かしは翌日に疲れが残る。このような慢性的なストレス状態がイライラ感を募らせ爆発しそうな気持ちになる。自分の意思や感情をていねいに説明し表現することに乏しい中学生はこうした感情をムカつく・キレルの言葉で表現している。

3. 生徒たちの居場所

学校に行っても学級しか居場所がない。しかし学級にいたときは仲間はずれやいじめにあわないように友だちとのかかわりに緊張し、教師の注意にムカつき、授業でも何となく充足感が感じられない。近年、学校に楽しさを見いだせず居場所がない子が増加している。そこで保健室が従来の病気やケガの治療の場から睡眠不足の解消や授業や学級からの避難場所、カウンセリングの場へとその機能を拡大している。ここでは閉塞状況の中の中学生の居場所や心の解放の場としての保健室の存在をvol.55「居場所としての『保健室』」(1997年)から検証していく。

1) 保健室は居場所か

中学生に保健室をどのようなときに利用したいかと尋ねると、「ケガをしたり、体調が悪いとき」が最も多く、次いで「睡眠不足で眠いとき」「授業がいやなとき」「身体のことでも聞きたいことがあるとき」「なんとなくクラスにいたくないとき」が主な理由である

【vol.55 図2-9】。表4-14は、悩みと保健室の利用頻度を示した。保健室に来る頻度の高い生徒ほど「志望校に入れるか不安だ」「自分に向いている職業がわからない」「親が自分の気持ちをわかってくれない」「授業内容がわからない」「友だちとうまくいかない」「家の中の雰囲気がよくない」など学業成績から友だちや教師との人間関係、家庭内のことまで悩みをもっている割合が高い。このようなカウンセリングの場として機能するのは、養護教諭が「秘密は絶対守ってくれる」「話しやすい、自分を理解してくれる」など、生徒から親近感と信頼感をもたれている場合である。そうした保健室は、明るく居心地のよい場所とイメージされ、心の居場所となっているようである。しかし、保健室がどのような役割を果たすのかは、学校規模といった外的な条件に規定されるのではなく、養護教諭のスタイルに方向づけられることが現状では保健室の持つ課題でもある。

■表 4－14 (vol.55 表 3－8 から)

				(%)
	行かない	月 1 回 くらい	月 2～3 回	週 1 回・ それ以上
志望校に入れるか不安だ	57.3	63.0	<u>65.8</u>	<u>65.8</u>
自分に向いている職業がわからない	43.2	46.8	49.1	<u>51.3</u>
親が自分の気持ちをわかってくれない	23.1	30.3	29.9	<u>43.5</u>
授業内容がわからない	29.8	39.3	39.4	<u>42.6</u>
友だちとうまくいかない	26.7	30.9	32.3	<u>35.7</u>
家の中の雰囲気がよくない	13.5	16.9	21.1	<u>28.1</u>
進路について親と意見が合わない	13.4	19.8	20.9	<u>26.3</u>
クラスの雰囲気になじめない	16.5	17.1	17.3	<u>20.9</u>

「とても」＋「少し」悩んだ割合
——は最大値

2) 保健室から子どもを支えて

保健室が子どもたちの居場所になるかは、多分に養護教諭の保健室経営に因るところが大きい。p.52からの2つのコラムは、養護教

諭が保健室から子どもたちを見つめて、現状の課題と保健室の機能について述べたものである。

4. まとめに代えて

中学生は慢性的なストレス状況におかれている。それは社会が子どもの成長をゆっくり見守ることができなくなったからだろう。さらに、子どもは過剰な教育期待によって、子どもらしい楽しみにふけることも自由で創造的な時間を過ごすこともなく、時間に追われ忙しく過ごしている。そうした中ではマンガを読んだりテレビゲーム、メールでのアクセスなど孤独型の余暇を過ごすことが多くなり、集団での行動も耐性も身につかない。中学生は「思春期」という子ども期とおとな期の狭間であって不安定で過ごしにくい時期である。自立の時期にある子どもたちが親や家庭を離れて親密な友人関係を結び、仲間との

交流を持つことは発達課題的にも重要である。しかし、中学生たちの学校での友だち関係は不安定で、友人に神経を遣いながら緊張した毎日を送っており、学校が心の居場所にはなり得ていない。このような状況がムカつく・キレる感情となって爆発し、授業にあっては「荒れ」を引き起こす背景となっている。

自分と自分の将来を大切に考え、他人をもそうした存在として敬意をはらえる生徒は、たとえキレても、そのキレ方は配慮できる自己制御力を持つであろう。今後、教育的な営みの中で自分の将来に展望を抱かせ、それに向かって努力する子どもたちの育成が必要ではないかと考える。

保健室から（１）

～子どもの事例を通して～

田上純子

1997年にvol.55「居場所としての『保健室』」を取り上げたが、その後の８年間で保健室からみた中学生の様子もかなり変わってきた。子どもたちが保健室で見せる顔の中に社会の変化や抱えている問題を敏感に感じることができる。

その１つが親の離婚が及ぼす心の変化である。３分間に１件の頻度で離婚があるようだが、離婚までの過程で親のＤＶ（ドメスティック・バイオレンス）を見てきた子どもの心の傷、離婚後の厳しい生活の中で、子どもの面倒を十分に見ることができなくなっている家庭の問題がある。

〈事例１〉遅刻して登校しては学校の破壊行為を繰り返し、家出、万引きなどの社会的悪さをするＡ君は、一人ぼっちで夜を過ごし、時には仕事の都合で母親が何日もいないこともある。朝は親が起きてくれず、学校へ送り出してくれる人もいないので、生活の中に学校へ行くということがきちんと位置づけられていない。社会的善悪が身についていないので、悪気もない。「いろんなことをした後だから、信頼を回復するためには今が踏ん張りどころよ」「信頼って何？」「心配してくれた先生への恩返しだよ」「俺、先生なんて信頼していないから」。このよ

うな会話を２人ですが、保健室でも信頼関係がなかなかできない。

２つ目の変化として、ときどきニュースになっている虐待はまれでないということである。前にあげたＡ君の場合にもいえるが、「ネグレクト」が多くなっている。

〈事例２〉Ｂ君の場合は夜働いている母親があまり家に帰らず、給食以外のまともな食事は食べることがなく、衣類も汚く、家の壁や床はゴキブリが大運動会をしているような不潔さ、ガスも止められている環境だった。この事例は約５か月、学校が中心となり、サポート会議を開き、生活の支援や施設への措置をすることができた。

また、近年は親が精神疾患のため、家庭生活に影響を及ぼし、それが原因で子どもが学校を休みがちになるというケースが増えている。保健室での何気ない会話の中で発見することもある。親・子どもにもサポートを必要としているので家庭が孤立しないように学校・地域と連携を図っていかなければならない。

このように「子どもを守り、育てる家庭の力」が弱くなっているというのが、子どもの変化の大きな原因であると思える。

保健室から (2)

～生徒とのかかわりを通して～

根舛セツ子

「21世紀の我が国を担う児童・生徒が、時代の変化に主体的に対応し、たくましく生きていくためには、心身の健康保持増進を図ることがきわめて大切である。健康や体力は、児童・生徒の『生きる力』を育む基盤であり、体育・健康に関する指導の一層の充実が求められている。」

厚生労働省の「健康日本21」や「東京都健康増進プラン21」では、児童・生徒の心身の健康づくりの大切さを呼びかけている。

子どもたちの生活習慣は、夜型の生活スタイルで、食生活も「孤食」が増え、朝食の欠食、塾通いによる夕食の遅さが目立つ。そして携帯電話の普及により、メールのやりとりが深夜にまで及び、慢性的に睡眠不足の子どもたちが増えている。目覚めぬまま登校してくるため、午前中の保健室はうつろな目をした子どもたちでいっぱいである。特に、休み明け

は体温の低い思考停止状態の子どもたちで保健室のベッドはフル回転をする。

1週間の傷病治療状況や保健室の相談活動をみると、疲れのピークは木曜日に出るようで、ケガや体調不良が増え、友人とのトラブルも多くみられる。

思春期のデリケートな時期に携帯電話やメールやチャットによる伝言板への無神経な書き込みなど、相手の気持ちを察する必要のない「一方的なコミュニケーション」によるトラブルが増えている。彼らの傷ついた心に寄り添いながら、「人とかかわり方」について改めて健康相談活動を通じて行っている。

ライフステージの第1段階として重要な時期である21世紀の子どもたちの「生活習慣」について、家庭とともに見直し、取り組んでいくことが急務であると考え。合わせて、「かかわり」をキーワードに様々な体験を積み重ね生徒の心と体の健康づくりを行う必要性を痛感する。

5 家族

深谷野亜

1. 家族をめぐる動向

家族変化をみる上で、1970～80年代は節目の年とされる。この時代は、戦後に生まれた世代が親となる時期にあたる。戦前の家父長制をベースとしたイエ制度の元で形成された威厳のある親、ある種絶対的な権限を持った存在ともいえる（父）親の権力の行使によって成立していた家族関係の枠組みから、まったく自由な形で家族像を描きうる世代の誕生といえる。この世代は、例えば、1984年に出版された浅田彰の『逃走論―スキゾ・キッズの冒険』（筑摩書房）が大学生を中心に熱狂的に支持されたように、個人／社会人として新しいライフスタイルや価値観を選択していく。そして、彼らが親となったとき、かつてと異なる家族の枠組みを模索する。こうした流れの中で生み出されたのが、「友だち夫婦」や「恋人親子」「友だち親子」などニューファミリーという言葉で括られた、多様な新しい家族像である。

当時指摘された多様な家族像の中で、家族構成員の個の意識が強くなる、欧米型の家族像が1つのモデルとして想起される。1987年に出版された『個人化する家族』（目黒依子・勁草書房）に表されるように、情報化や都市化など様々な社会変化から、家族の個人化は今後一層進むであろうと考えられてきたので

ある。しかし、その後の流れをみていくと、家族は個人化の方向に進んでいるというよりはむしろ、『パラサイト・シングルの時代』（山田昌弘・ちくま新書・1999年）に表されるように、家族の凝集性／依存性が高まったように思われる。

現代家族の特徴ともいえる、パラサイト・シングルについて簡単に考察しておこう。パラサイト・シングルの生み出すためには、依存したいという子ども側のニーズと、依存させてもかまわないという親側のスタンスの両者がなければ成立しない。

まずは親子が置かれている社会状況の変化について概括しよう。親の教育観の問題についてだが、総じて日本の親の教育観に「自立させるための教育」という意図性は乏しいといえるのかもしれない。母なるものを思い浮かべたとき、そこには子どもや家族のために自分を犠牲にしても尽くす姿が思い浮かぶ。尽くす母親に対して子は恩で報いる。その関係性のなかで、自然と子どもは親の恩に報いるため、自らは自立することを選択したのである。また、かつては親が子どもの自立を意図しなくとも、親側に子どもをパラサイトさせるだけの経済的なゆとりはなく、学卒後の子どもは自立せざるをえない社会環境におか

れていた。そのため親が自立を促さなかったとしても、子どもは自立するしかなかったのである。

しかし現在は、親側にゆとりがあるだけではなく、社会経済の低迷から、子ども世代は独立したとしてもパラサイトしていた時以上の暮らしをすることが困難な時代である。そのため、子どもを依存させやすい社会状況に

おかれているのである。

親子の意識変化について、まずは子ども側の依存し続けたいとするニーズについてみることにしよう。自立を望まない子ども世代はどのように生まれたのであろうか。ここでは、自立と依存という観点から、中学生にとっての家族について考えていきたいと思う。

2. 親子のコミュニケーション

～第二次反抗期を喪失した仲のよい親子関係～

しばらくは、vol.77「中学生にとっての家族」（2004年）のデータから、中学生にとっての家族の様相をみることにしよう。

中学生という年齢は、第二次反抗期にあたる。そのため、かつては親子関係が悪化する時期であるとされてきた。親から庇護され、教えられ、育てられてきた幼少期から抜け出し、ようやく自分らしさの追求をするようになる。親はよかれと思ひ子どもをしつける。しかし親にとっての「よさ」と子どもにとっての「よさ」は必ずしも一致しない。自分らしさを追求する意思が芽生えた中学生にとり、親の庇護は目障りなものとし映らないのである。しかし、一過性のものにせよ、第二次反抗期は、親から自立するための重要なステップといえるのではないだろうか。

まず親子の間の会話状況をみてみる（表5-1）。父親と「よく話をしている」者は26.7%、「ときどき話をしている」は41.5%。母親と「よく話をしている」者は54.9%、「ときどき話をしている」は32.1%であり、ま

めると父親とは68.2%、母親とは87.0%が（よく十ときどき）話をしていると回答している。特に母—子の関係が中心となっているようであるが、家族の間で良好なコミュニケーションが保たれていることがわかる。

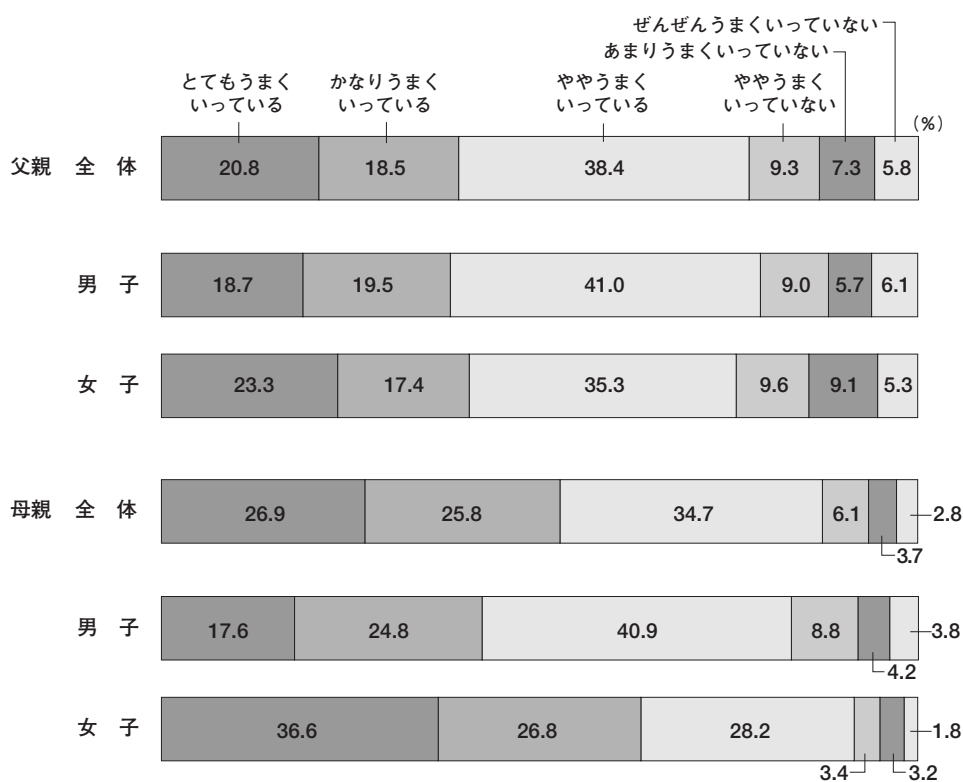
図5-1は、親との関係についてもまとめたものである。「とても十かなり十やや」うまくいっている割合をみると、父親とは77.7%、母親とは87.4%が、それなりに親との関係がうまくいっていると回答していることがわかる。また親子の仲のよさの組み合わせを「とても十かなり」うまくいっている割合で順にみると、①娘と母親（63.4%）、②息子と母親（42.4%）、③娘と父親（40.7%）、④息子と父親（38.2%）という結果となった。親子の性別の組み合わせにより、関係のよさに差はみられるが、総じて親子関係がうまくいっている中学生が多い。vol.77のデータからは、第二次反抗期的な険悪な親子関係ではなく、仲のよい親子の姿がみえてくる。

■表 5-1 親との会話 (vol.77 表 1)

(%)

	よく話を している	ときどき話を している	あまり話を していない	ほとんど話を していない
父 親	26.7	41.5	21.5	10.3
母 親	54.9	32.1	9.8	3.1

■図 5-1 親との関係 (うまくいっているか) × 性 (vol.77 図 2)



3. 子どもにとっての家庭

～ぬるま湯にも似た心地よさ～

第二次反抗期的な葛藤が生じない理由として、子どもの側から考えてみると、親が疎ましいものにみえなくなっていると考えられる。親が子どもからみて疎ましくなく映るには、①中学生になっても、自分らしさを追求し、自立しようとしないうという子ども側のスタンスの変化、②ウザイ価値の押しつけ（すなわち、しつけ／叱るという行為）を、自分の親はしないだろうという子どもの親評価、の2つが考えられる。

直接自分らしさの追求／自立を把握するデータがなかったため、「いつになったら親を超えられるか」についてのデータをみることにする（表5-2）。「超えるのは25歳以上」*と回答した数値に着目すると、「社会についての見方」「社会常識」「お金をかせぐ力」については、25歳以上でないと父親を超えられないだろう（あるいはずっと超えられないだろう）と過半数が考え、母親の場合でも4～5割程度が超えられないだろうと考えている。

では、親側のスタンスをどう評価しているのでしょうか。表5-3は、どのようなことをしたら、親は叱ると思うかについて尋ねたものである。「ぜったい叱る」の割合が50%を超えたのは「夜1時すぎまで、外で遊んでいたら」79.1%の1項目だけである。そのほか、「『宿題を忘れることが多い』と先生から家の人に注意されたら」の場合でも、親が「ぜったい叱る」と回答した割合は32.9%など、全般的にその比率は低い。逆に「たぶん叱らない」と「ぜったい叱らない」を合わせ

た割合でみると、「朝、家族と会っても『おはよう』と言わなかったら」は70.8%、「先生の言うことを聞かなかったら」は44.5%、「夜1時すぎまで、外で遊んでいたら」でも7.2%が親は（たぶん+ぜったい）叱らないだろうと考えている。

こうしてみると、子どもたちは親を超えられない存在としてみなしており、そこには親離れしよう、自分として一本立ちしようとする意識に乏しい。そして子どもの目からは、親は自分の今の楽しみを妨げるウザイ存在ではないと映っているのである。2節でみたように、現在第二次反抗的な険悪な親子関係は少数派になりつつある。この傾向は、親が口うるさいことを言わず、ただひたすら子どもにとって居心地のいい環境を作り出してきた結果ではないだろうか。多少退屈かもしれないが、家庭はのびのびでき、安心できる場（図5-2）とみなしている中学生。そのぬるま湯にも似た居心地のよさは、そこから脱出すること、すなわち親元から離れ自分で自分の道を切り開くことへの意欲をスポイルさせているのではないだろうか。

親はいつの日か、現役を退き、もはやパラサイトさせる宿り主としての使命を終えることになる。そのため、今の心地よさを犠牲にしても、子どもの自立を促すことが親として必要なことである。第二次反抗期的な危機の消滅は、今後さらに子どものパラサイト化傾向に拍車をかけるのではないかと思われる。

■表5-2 親を超えたか—当分、超えにくい— (vol.77 表9)

(%)

	母親			父親		
	すでに 超えた	数年後に 超える	超えるのは 25歳以上	すでに 超えた	数年後に 超える	超えるのは 25歳以上
体 力	79.6	14.3	6.2	32.2	32.7	35.1
英語の力	49.6	32.7	17.6	36.9	36.5	26.6
数学の力	45.0	34.7	20.4	28.7	35.9	35.3
がんばる力	34.2	37.2	28.6	21.4	37.5	41.1
人とのつきあい方	23.4	45.2	31.3	20.6	42.3	37.1
社会についての見方	15.3	46.3	38.4	8.7	37.6	53.7
社会常識	12.6	48.1	39.2	10.3	37.3	52.4
お金をかせぐ力	6.8	43.4	49.8	5.2	20.6	74.2

すでに超えた＝「小学校高学年のころ超えた」＋「中学生になって超えた」＋「このごろ超えた」

数年後に超える＝「とても超えられないが、高校生くらいになれば超えられる」＋「とても超えられないが20歳くらいになれば超えられる」

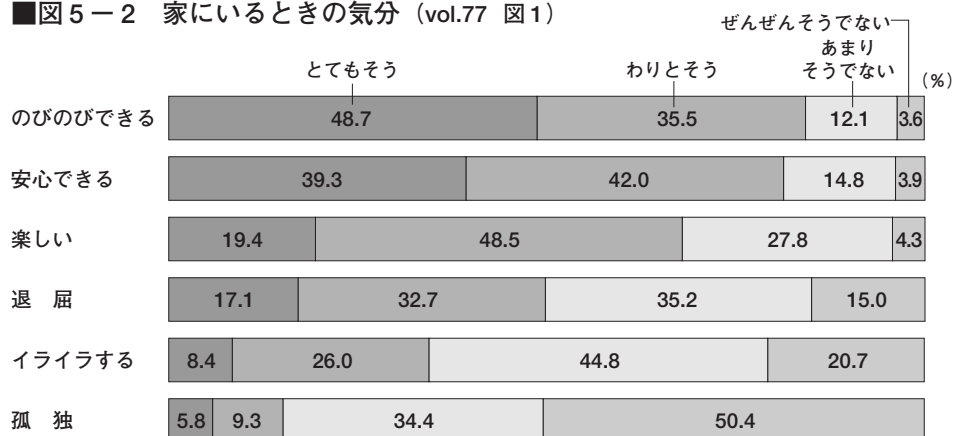
*超えるのは25歳以上＝「とても超えられないが25歳くらいになれば超えられる」＋「ずっと超えられないだろう」

■表5-3 叱る程度—あまり叱らない— (vol.77 表8)

(%)

	ぜったい 叱る	たぶん 叱る	たぶん 叱らない	ぜったい 叱らない
夜1時すぎまで、外で遊んでいたら	79.1	13.7	4.5	2.7
「宿題を忘れることが多い」と先生から家の 人に注意されたら	32.9	43.1	16.7	7.3
夜2時すぎまで、夜更かししていたら	30.4	27.0	26.7	15.9
先生の言うことを聞かなかったら	11.8	43.7	34.4	10.1
近所の人に会って、あいさつをしなかったら	9.8	31.9	41.3	17.1
朝、家族と会っても「おはよう」と言わな かったら	8.8	20.4	36.0	34.8

■図5-2 家にいるときの気分 (vol.77 図1)



4. 母親であること

～母・妻としてよりも個人としての生き方～

図5－1でみたように、親子関係は母子間のコミュニケーションが中心となっているようである。ここでは、子どもに対して家庭＝心地よさを作り出す要因について、母親の意識からみていくことにする。

3節でみたような「ウザくない親」の出現について親の側のスタンスから考えると、①親自身の規範感覚が弱化している場合と、②子どもを叱った方がいいと認識したとしても、叱ろうとはしていない、という2つのスタンスが考えられる。

表5－4は子どもの行動に対する母親の評価をまとめたものである。他人の自転車やカサを無断で使うことなど、9項目中4項目は90%以上が「絶対してはダメ」と回答している。50%を超えなかった項目は「学校からの

プリントを見せない」「異性の友だちの家に遊びに行く」の2項目だけであり、母親自身の規範感覚が弱化したわけではないようである。

表5－5は、子どもに対して心がけていることである。「いつもする」の割合に着目すると、「朝、子どもを起こす」が61.3%、「子どもの洗濯物をタンスにしまう」が47.8%などで割合が高い。また、「登校する前に忘れ物がないかを確認する」は15.6%、「入浴後の子どもの着替えを準備する」は12.3%など、割合が少ない項目でも、1割程度の母親が「いつもする」と回答しているのである。vol.67「中学生を持つ母親たち」（2001年）で指摘したように、彼女たちは親であることを重要なものとして受け止めており、子どもたち

■表5－4 子どもの行動の評価（vol.67 表4－7）

	（％）			
	絶対して はダメ	たまになら 仕方がない	仕方がない と思う	まったく かまわない
他人の自転車が無断で使う	99.2	0.7	0.0	0.1
急に雨が降ってきたとき、他人のカサを無断で使う	94.9	4.4	0.7	0.0
学校を無断で欠席する	92.7	5.2	1.8	0.3
決められた制服を着用しないで登校する	90.3	6.6	2.2	1.0
学校に携帯電話を持っていく	89.2	7.4	2.3	1.1
パーマをかけたり茶髪にしたりする	84.4	9.1	4.4	2.0
友だち同士でアダルトビデオを見る	68.0	19.7	10.7	1.6
学校からのプリントを見せない	39.4	54.4	5.6	0.6
異性の友だちの家に遊びに行く	29.1	47.0	10.8	13.1

のために様々な働きかけをしている。しかし、中学生を持つ親として評価した場合、そのあり方は、少し甘やかしすぎている印象を受ける。中学生の場合、寝坊をさせないことよりはむしろ、たとえ寝坊したとしても、その失敗から自分で様々なことを学び取らせる時期ではないだろうか。

母親自体の規範感覚は、弱化していないといえる。しかし母親は子どもに対して、失敗することから学ばせる、というより、今、子どもが悲しい目に合わないようにと行動しているように見受けられる。また子どもたちからみても、表5-3で指摘したように、中学生としては好ましくない行為をしたとしても、自分の親は叱らないだろう、と受け止めているのである。

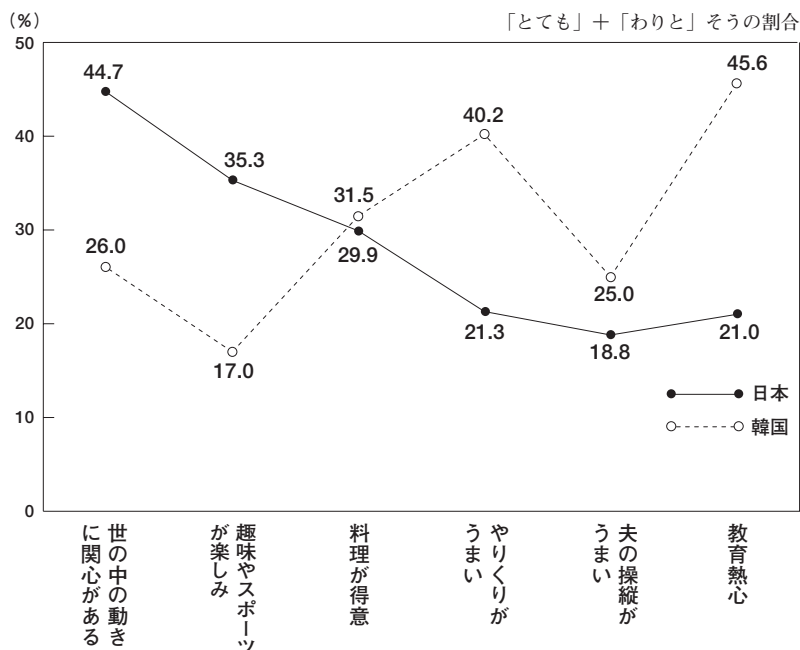
なぜ現代の母親は、将来の子どもの成長より、今の快適さに重点をおいて行動しているのでしょうか？ ちょっと古いが、日本と韓国の母親を比較した1993年の調査（vol.46

「日本の母親・韓国の母親」）に自己評価について尋ねた設問がある（図5-3）。ここでは「とても+わりと」そうの割合がのせてあるが、この図から大まかに傾向を捉えると、日本の母親は「世の中の動きに関心がある」「趣味やスポーツが楽しみ」等、個人としての自分を評価する傾向が強い。一方、韓国の母親は「教育熱心」「やりくりがうまい」等、母親・妻としての自分を評価する傾向がみられる。この両者の比較から、日本の母親が親や妻としてよりも、個人としての生き方に重きをおいていると言えよう。個人としての生き方を志向する母親、それは母親個人にとっては自由と楽しさを意味するのであろうが、子どもにとっては別の側面を持つのである。親であることはある種の自己犠牲を求めるものである。子どもからみて親が「ウザくない」のは、こうした「個人>親」という親の意識変化からくるのではないだろうか。

■表5-5 子どもに次のようなことをどのくらいしているか（vol.67 表3-1）

	いつも する	たまに する	あまり しない	ぜんぜん しない	(%) 小計
朝、子どもを起こす	61.3 ①	22.9	8.6	7.2	15.8
登校する前に忘れ物がないかを確認する	15.6	33.1	26.0	25.3	51.3
子どものベッドやふとんを整頓する	27.8	36.2	20.8	15.2	36.0
夕食は子どもの好きなメニューにする	8.6	67.6	19.5	4.3	23.8
子どもの洗濯物をタンスにしまう	47.8 ②	20.6	15.3	16.3	31.6
入浴後の子どもの着替えを準備する	12.3	8.9	13.5	65.3	78.8
子どもが寝るまで起きている	38.1 ③	18.3	22.2	21.4	43.6

■図5-3 自己評価（韓国＝教育熱心、日本＝趣味を楽しむ）（vol.46 図4から）



5. まとめに代えて

このように、第二次反抗期を迎えていたはずの中学生のデータから、子どもにとっての自立について考えてみた。

本来、ある程度の年齢に達するまで、親子関係は対等になりえない。子どもが幼少期においては、生活能力がない子どもは親の庇護なしには生きることすらできない。そして身辺自立ができたとしても、親は子どもを評価し教育する必要があるため、どうしても対等な立場にはなりえないのである。親であるから、子どもの何年後かの将来を踏まえ、叱り、しつけるのである。親であることは孤独な側面を持つ。しつけの過程で、子どもから嫌われることを覚悟しなければならないし、何よりも親子関係の先には、いつしか子離れ・親離れをする時期を迎えることを前提とする。

今回みてきた子どもからみてウザくない親とは、基本的に親が親としてのスタンスを軽視している、といえよう。親であることよりも個人としての生き方に重きをおくとき、子

どもはしつけの対象というよりも、年の離れた友だちとして、ずっと仲良くいられる存在なのである。個人の生き方に重きをおく親世代にとって、“親であること”は本人にとって、心地よいものではないのである。

将来のパラサイト・シングルを生み出す親世代、そこには子どもを受けする、物分かりがよい親子関係を築こうとする姿勢がみられる。しかし、ぬるま湯のような温かな環境は、親世代にとってみればよい環境であったとしても、そこから自立へと抜け出そうとする子どもの意欲を喪失させる。叱らない親の増加は、子どもの自立を犠牲にしても、今の楽しさを追求する親側の姿勢の現れといえる。揉め事もなく、和やかで楽しそうな家族関係。しかしその背景には、「親」であることよりも「自分」であることを選択した、ある意味非常にエゴイスティックな側面が見え隠れするのである。

生徒たちの人間関係における男女差

永野みどり

vol.42『男の子らしさ』とは』(1992年)やvol.73『元気な女の子』と『ほどほど志向の男の子』(2003年)で「男の子らしさ」の変化や女子の元気が指摘されている。私の勤務校でも、女子の方が学校生活に適応し、元気が目立つというものが多くの教師の実感なのだが、当の中学生たちと話してみると、彼らは「性差というよりは個人差」という受け止め方をしているようだ。

そんな彼らが、男女の明らかな違いとして指摘するのが「女子の人間関係の複雑さ」で、「100人の中学生に聞けば、90人以上が賛成するはず」と言うのである。女子は、男子と違い、常に同学年の人間関係に配慮が必要だということだ。対立を調整する、仲間はずれにされないように気を遣う、目立たないようにする、人を傷つけるような言動をいかにたしなめるかに苦慮するなど気苦労が絶えないと言う。それに比べ、男子の人間関係は「さっぱりしている」と捉えている生徒が多い。ただし、女子からは「男子はさっぱりしているというより、面倒になると全くかわり合わないか、力で解決しているだけ」という手厳しい評もある。女子の揉め事が表面化したときだけをみて、おとなは「女子の人間関係は厄介」と受け止めがちだ。けれども、日頃は水面下の努力で微妙なバランスが保たれているわけで、中学校での人間関係の苦労が、彼女たちの、ある種のコミュニケーション能力を磨いていると言えるのかもしれない。実際、「女子がさっぱりした人間関係にはならないのは、何とかしよ

うとして文句を言ったり、説得したりしているからってこともあるかな。でも、かわりすぎているとお母さんから『放っておくことも時には必要』って言われる」と解説してくれる女子生徒もいる。

「中3くらいから、まわりと仲良くしていても無理に相手に合わせなくなった」という卒業生の女子たちに聞くと、やはり母親のアドバイスに助けられたようだ。「うちのお母さんは強いですよ。他の人とうまくやっているけれど、基本は、他人は他人、自分は自分って感じ」と語ってくれた。中学での人間関係の試練を経て一回り大きく成長できた女子生徒の支えの1つが、自己と他者にしっかりと線を引く母親の姿だという話は興味深い。

中学生の人間関係の男女差は、大雑把に言えば、時に母親に支えられ、複雑な同学年の人間関係をもがきながら生き抜く女子生徒たちと、「面倒」を避け「さっぱりした」関係で摩擦なく生活する男子生徒たち、ということだろうか。

ところが、最近、男女の集団間に新たな接点が生まれた。携帯電話によるメールでのコミュニケーションである。直接話すよりも、電話で話すよりも気軽ということで、男子・女子問わずメールで連絡をとる。男子は、女子の複雑な人間関係を報告、相談されはじめた。大半の男子は「面倒くさい」という理由で距離をとるが、男子生徒が女子生徒の対立に巻き込まれる例も出始めているようだ。メールによって友人とのかかわり方の男女差にも変化が出てくるのだろうか。

6

社会の中の中学生

森永徳一(1節)・亀澤信一(2節)・井上 健(3節)

戦後の急速な科学技術の進展と高度経済成長が中学生の心身に深く影響をもたらした。特に、バブル崩壊後の長引く不況が先行きの不透明感を深め、中学生の生活も大きく変貌してきたと考える。その変貌の実態を以下の3つのカテゴリーに分けて概観した。第1が、

中学生の体験と自己像の形成。第2は、中学生のルールと人間関係。第3は、中学生と電子メディア。

急激な社会変化や教育改革の進展の中で、「中学生の生活」の変貌の一端がみえてくると考えている。

1. 体験と自己像

1) 中学生の生活体験と自己像

都市化の進展や情報化の進展が、子どもたちに直接体験の減少をもたらしていることが考えられる。

1991年の調査(vol.41「生活体験」)による直接体験の減少の実態を図6-1「体験の量」をみながら考えてみたい。

自然体験(「セミやトンボをとる」「カエルにさわる」)が「1度もない」割合が1~2割、「牛や馬にさわる」「犬や猫が死んで泣く」などの感覚の体験が「1度もない」割合が2~5割と多いことがわかる。そしてリーダー体験や技術の体験「ワープロを打つ」なども「体験の量」としてはさほど多くないことがわかる。

2) 中学生の心身の悩み

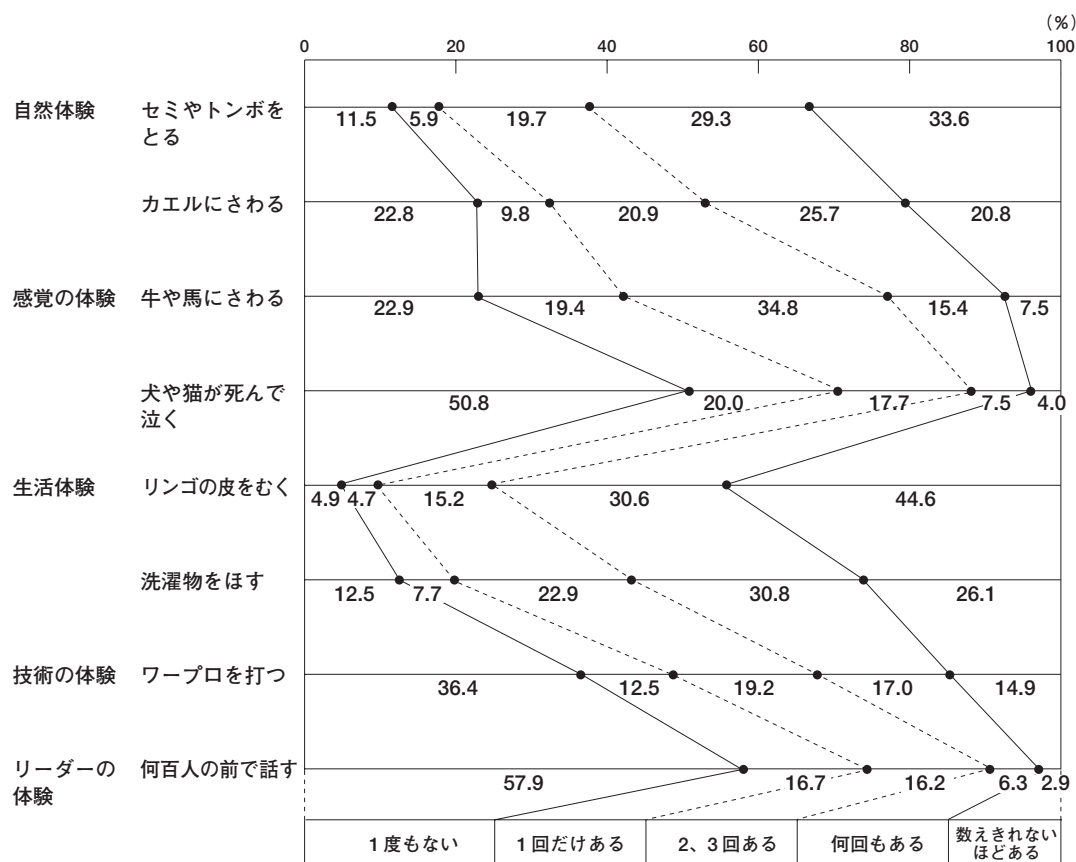
ここでは、「中学生が悩むとき」とはどんなときかを「最近1年間で悩んだこと」(表

6-1)と「やせたい理由」(表6-2)の2つの表をみて考えてみたい。

表6-1から、「かなり+わりと」悩んだ割合が上位の項目は、「学業成績について」「将来の進路について」「高校受験について」と、子どもたちのありのままの実態がわかる。その次が「身長や体重について」「顔など、自分の外見について」「自分の性格について」である。3つ目のグループとして、「親しい友だちはどうやったらできるか」「みんなから好かれるのにはどうしたらいいか」「異性から好かれるのにはどうしたらいいか」などが続く。親や先生との関係は、「悩み」の中では低い位置にある。

以上の結果のように、子どもたちは将来の進路や成績面の不安や悩みを抱えながら、自分の成長する身体や外見に気をとられ、学校の友だちや異性を意識して、複雑な思春期の真只中にある実態が浮かび上がってくる。

■図6-1 体験の量 (vol.41 図1から)



■表6-1 最近1年間で悩んだこと (vol.70 表2-5)

	かなり悩んだ	わりと悩んだ	小計	少し悩んだ	あまり悩まなかった	ぜんぜん悩まなかった
みんなから好かれるのにはどうしたらいいか	8.4	12.5	20.9	23.1	28.4	27.7
異性から好かれるのにはどうしたらいいか	5.3	7.0	12.3	17.3	31.6	38.6
親しい友だちはどうやったらできるか	10.9	13.2	24.1	22.3	25.3	28.3
先生との関係で	4.3	5.0	9.3	14.9	32.2	43.7
親との関係で	4.6	5.0	9.6	12.0	27.4	51.0
学業成績について	19.0	20.2	39.2	26.8	16.0	18.1
高校受験について	17.0	17.0	34.0	23.6	15.7	26.8
将来の進路について	18.4	16.7	35.1	25.0	16.8	23.1
自分の性格について	13.6	14.2	27.8	24.0	23.9	24.2
身長や体重について	17.2	16.3	33.5	21.5	18.7	26.3
顔など、自分の外見について	14.9	14.1	29.0	20.0	23.9	27.1

次に、思春期の悩みの1つとして表6-2の「やせたい理由」を考えてみたい。第1位は、「自分に自信が持てる」からとなっている。性別でみると、男子は、「スポーツがうまくできそう」が理由の第1位だが、女子は、「もっとおしゃれができる」「自分に自信が持てる」など身体に男子以上に気を遣っていることが推測できる。

では、やせるためにどんなことをするかといえば、第1位は「やせるための運動をする」、第2位は「間食をしない」、第3位は「野菜やこんにゃくをたくさん食べる」。性別でみると、女子では「甘いものを食べないようにする」「長い時間お風呂に入る」の割合が男子に比べ高い。男子より女子の方が「やせ願望」が強く、切実な悩みと考えられる【vol.70表3-12】。

学校でも、女子の不適應生徒の問題がいじめの原因になることもある。思春期の子どもの悩みは、心身の様々なところに起因するので問題解決が難しい面もあると考えられる。

3) やる気に乏しい子どもたちと生き方

最近の子どもたちは、「やる気がない、忍耐力がない、がまんできない」などと地域の会合や座談会でよく聞く。また、「無関心・

無気力・無感動」などと言われたりもする。実態はどうだろうか。

図6-2は子どもたちの「やる気がでるとき」の調査結果である。

子どもたちは、「部活動で試合に出してもらえるとき」「成績が上がったとき」「テストでよい点数がとれたとき」などは50%以上がやる気が「すごくでる」と答えている。その次が、先生や親にほめられたときの順になっている。

このことは、子どもたちは「興味」「関心」「好きなこと」には、いつの時代でも「やる気」が起こり、真剣に取り組むことを証明していると考えられる。そして、叱られるより「ほめられる」ことが、やる気を出すエネルギー源になっていることも想像できる。やる気を起こさせるための「動機づけ」をいかに行うかが大きな課題と考える。

次に、やる気を持って取り組みれば、将来が明るく展望できるかという視点について、図6-3「人生についての考え方」から考察してみたい。「すごく十どちらかといえば」賛成の割合でみていくと、子どもたちは、「がまんして努力し続けていれば、いつか必ず報われる」66.5%、「幸せに生きるためには、お金よりも愛情や友情の力が大きい」63.6%と「努力すること」や「愛情や友だちの大切

■表6-2 やせたい理由×性 (vol.70表3-10)

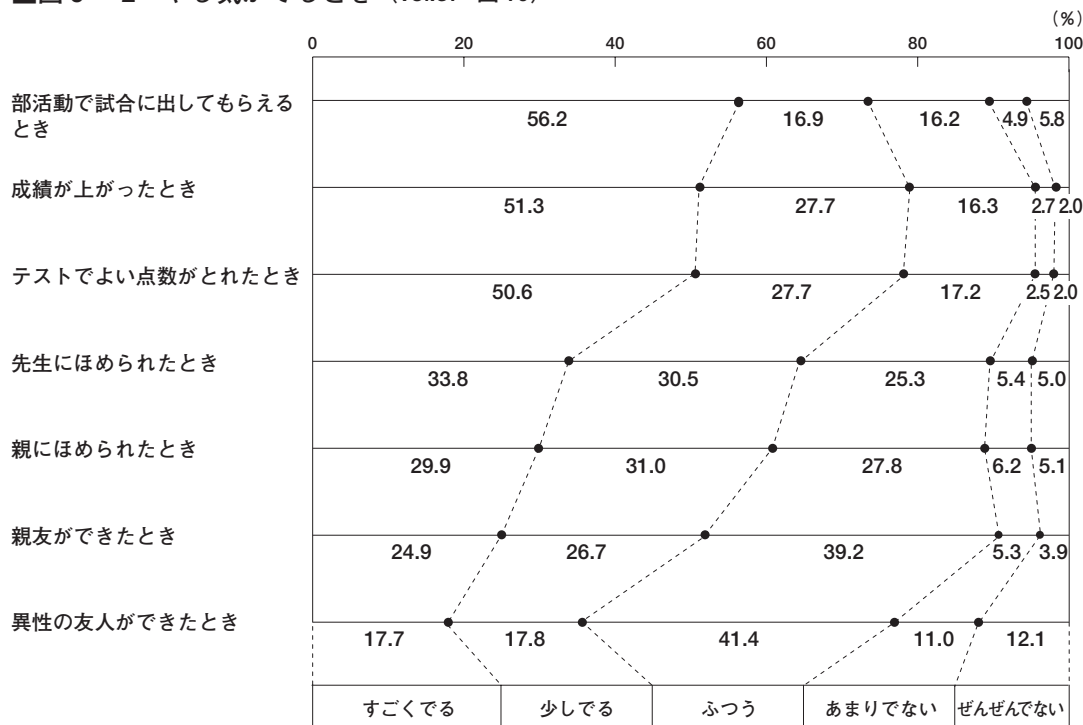
		(%)	
	全体	男子	女子
自分に自信が持てる	45.6	29.8	53.9
もっとおしゃれができる	43.7	11.3	60.7
スポーツがうまくできそう	41.1	55.0	33.8
その他	23.9	22.9	24.3
人からバカにされなくなる	18.1	21.3	16.4
異性にもてる	14.2	10.5	16.1
性格が明るくなる	13.4	9.1	15.7
いじめられなくなる	5.1	6.6	4.3

(複数回答)

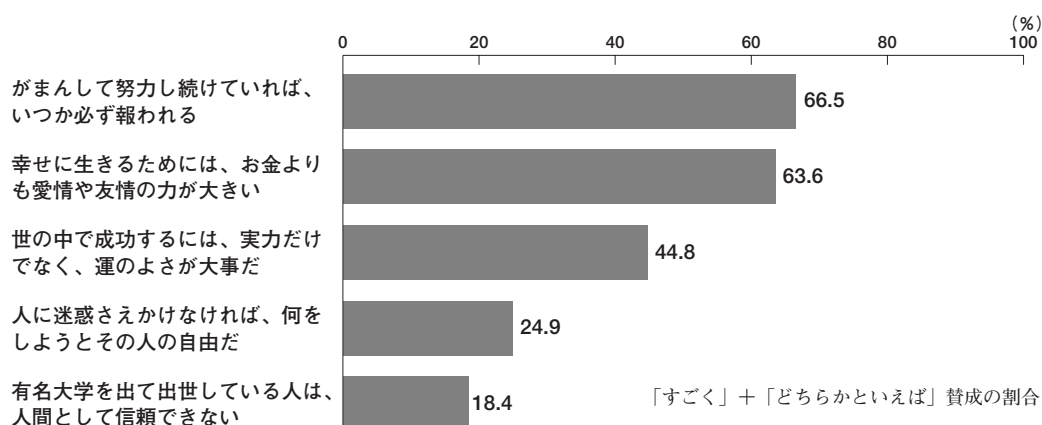
さ」を漠然としながら心の奥底では考えていることがわかる。しかし、44.8%が「世の中で成功するには、実力だけでなく、運のよさが大事だ」と考えているのは、世相を反映しているのか、若者世代としてはもの足りなさを覚える。

自立や自己実現の難しい社会が進展し、子どもたちも努力しても「将来像」が描けないのは無理からぬことであるが、「将来の夢」だけはいつも抱き続けてほしいと考えている。

■図6-2 やる気がでるとき (vol.37 図10)



■図6-3 人生についての考え方 (vol.58 図3-1)



2. 中学生のルールと人間関係

1) 規範意識の「緩み」と「喪失」

表6-3は、二択の選択肢を提示し、いろいろな状況においてどちらの行動を選択するのかを尋ねたものである。それぞれの下段の好ましくない行動を数値の大きい方から順に並べると、「道端を歩いているとき、千円を拾った→もらってしまう(64.1%)」「クラスのいじめに気づいた→そのまま見ないふりをする(54.8%)」「親から『勉強しなさい』と言われた→勉強をするふりだけする(52.1%)」となる。

学年別にみると、上記の3つの項目に加えて「突然の大雨で、持ち主のわからないカサがあった→そのカサを使う」「見たいテレビがあるが、見ると明日までの宿題が終わりそうにない→テレビを見る」でも学年が上がるにつれて数値が高くなっている。

また、男女を比較すると、好ましくない行動は全体的に男子の数値が高い。

これらのことと、vol.76「規範意識の『緩

み』と『喪失』(2004年)の調査によると生徒の規範感覚はしっかりしているとはいえないが、かといって、崩壊しているのでもない。「まあ、いいか」という感じで、自分にとってちょっと楽な方を選択する。そうした行為の積み重ねが、規範感覚の緩みとなってあらわれている。巨悪ではなく微悪なので、おとなもつい大目にみてしまう。そして、1年から2年、3年と学年が上がるにつれて、微悪を気にしない生徒の割合が多くなる。

生徒は、おとなから言われた規範を言われるがまま守っている感じで、規範が自分のものになっていない。それだけに、自分たちで規範を作って、それを守る体験が必要になってくる。学校のきまりや行事の展開の仕方など、生徒たちに意見を出させ、話し合いを持ち、結論を出し、結果を守る。折あるごとに、そうした体験を重ねていくことにより、健全な規範感覚が育っていくのではないだろうか。

■表6-3 どういう行動をとるか×性・学年(vol.76表2-9から)

		(%)					
		全体	男子	女子	1年	2年	3年
このままでは学校に遅刻する	間に合うよう走る	84.9	82.3 <	87.6	89.5 >	82.4	82.9
	間に合わなくてもいいと思う	15.1	17.7 >	12.4	10.5 <	17.6	17.1
先生に遅刻を注意された	以後気をつけようと思う	71.6	71.9	71.2	71.2	74.8 >	68.9
	心の中では、うるさいと思う	28.4	28.1	28.8	28.8	25.2 <	31.1
クラスのいじめに気づいた	いじめをやめさせようとする	45.2	44.5	45.8	50.9 >	45.3 >	39.7
	そのまま見ないふりをする	54.8	55.5	54.2	49.1 <	54.7 <	60.3
道端を歩いているとき、千円を拾った	きちんと届け出る	35.9	28.0 <<	44.1	41.7	39.9 >>	26.8
	もらってしまう	64.1	72.0 >>	55.9	58.3	60.1 <<	73.2
突然の大雨で、持ち主のわからないカサがあった	そのカサは使わない	78.6	74.8 <	82.6	86.8 >	77.0	72.6
	そのカサを使う	21.4	25.2 >	17.4	13.2 <	23.0	27.4
見たいテレビがあるが、見ると明日までの宿題が終わりそうにない	宿題をやる	51.2	47.6 <	55.1	56.8	52.2 >	45.3
	テレビを見る	48.8	52.4 >	44.9	43.2	47.8 <	54.7
親から「勉強しなさい」と言われた	すぐに勉強をする	47.9	47.2	48.6	59.9 >	50.1 >>	34.8
	勉強をするふりだけする	52.1	52.8	51.4	40.1 <	49.9 <<	65.2

<は5ポイント、<<は10ポイント以上の差

2) 学校でいやな思いをした経験

学校は共同生活の場であるので、まわりの人とかかわり合いの中で自己を主張したり、反対にまわりの人を思いやらなければならない場面が多くある。そのような経験を積むことで、権利についての感覚が磨かれ、ふさわしい形でそれを扱うことができるようになる。

表6-4でこれまでの中学校生活で「権利」を侵されたような経験がどれくらいあるかをみると、「しょっちゅう十ときどき」ある割合で、約3～4割の生徒が「先生がある生徒だけを特別扱いすること」「悪くないのに、その人のせいにする」「みんなの前で悪口を言うこと」「授業中、友だちにちょっかいをかけること」をされた経験があると答えている。反対に9割近い生徒は「いじめること」「先生が体罰をすること」を受けた経験がない。だが学校において、ここにあげたような権利の侵害を経験している生徒が多少なりとも存在するというところに目を向ける必要がある。

また、大多数の生徒は「どんな理由でもぜったいしてはいけない」というようにきちんと

した権利意識や人権意識を持っているが、少数であるが「理由があればでもいい」と考える生徒がいることが気になる。

男女の意識を比較すると、全体的に女子の方が敏感で、特に生徒の特別扱いや体罰について「どんな理由でもぜったいしてはいけない」と考える生徒が多い。一方、校則違反については男子の方が多くなっている。学年差が最も顕著にみられるのは校則に関してであり、その他プライバシーや他人のものへの配慮などに関して、学年が進むにつれて鈍感になる傾向もみられる。

最近、学校、家庭ともに、子どもを保護するだけで自立心を育てようとしないう傾向が強くなっている。vol.66「中学生の権利意識」(2000年)の調査結果の全体をみても、生徒たちは自分を抑制して、わがままを抑えようとしている傾向があり、権利を濫用する気配は少ない【vol.66 図3-5】。むしろ、自己決定について自信喪失気味ですらある【vol.66 図5-2】。中学3年間を生徒の自主性を伸ばす時期と捉えて、「自己決定力を育てる」ことをもっと重視していくことが必要と思われる。

■表6-4 学校でいやな思いをした経験とそれについてどう思うか
(vol.66 表3-1・表3-2から)

	これまでに左の項目をされた経験 しょっちゅう 十ときどき ある	どう思うか			「どんな理由でもぜったいしてはいけない」割合 (%)			
		どんな理由でも ぜったいして はいけない	理由が あれば してもいい	しかたなく すること もある	性別 男子 女子	学年 1年 2年 3年		
プライバシーをみんなの前で 話すこと	18.6	83.8	5.0	11.2	81.3 < 86.6	86.7	83.9	81.7
いじめること	8.8	83.6	5.0	11.4	81.9 85.4	83.7	83.7	83.5
先生がある生徒だけを特別扱 いすること	40.2	81.0	5.7	13.3	75.9 << 86.5	81.8	81.9	79.9
悪くないのに、その人のせい にすること	29.7	79.8	3.2	17.0	77.2 < 82.7	82.7	78.2	78.9
先生が体罰をすること	10.2	79.0	7.7	13.2	70.8 << 87.9	81.7	79.0	77.1
カバンの中や手帳などを勝手 に見ること	15.5	78.3	6.7	15.0	74.1 < 82.9	81.2	79.3	75.5
みんなの前で悪口を言うこと	35.7	43.6	16.4	39.9	40.5 < 47.0	43.6	42.7	44.3
校則に違反すること	17.8	43.3	20.7	35.9	48.3 >> 38.0	55.9 > 46.4 >>	32.2	
授業中、友だちにちょっかい をかけること	41.5	42.3	17.5	40.2	39.7 < 45.1	49.7 > 42.1	37.2	

<は5ポイント、<<は10ポイント以上の差

3) 友だちとの関係

学校現場では、保健室に具合が悪いと訴えてくる生徒のうち、教師や親、友だちとの人間関係の悩みを抱えている割合が非常に高いように感じる。その中でも、友だちのことでトラブルに巻き込まれ、悩んでしまって教室に入れない生徒が多いようである。

表6-5を「とても十かなり」ある割合で見ると、友だちといるときに「友だちに気に入られたいと思う」生徒が42.6%、「自分がどう見られているか気になる」生徒が41.9%と、友だちからの評価をかなり気にしている様子がわかる。そして、前述の2項目に加えて「友だちといるとき、自分が無理をしていると感じる」「友だちの言いなりになってしまう」の4項目で女子が男子を5ポイント以上上回っていることから、女子の方が友だちの目を気にし、周囲と同調しようとする傾向があるといえよう。

また、「友だちといるとき、自分が無理をしていると感じる」生徒が全体の23.0%で、

5人に1人以上がおとなと同じように仮面をかぶった自分を意識している。そして、「大勢の友だちといると仲間はずれにあったように感じる」生徒が14.5%で、疎外感を感じている生徒も少なくない。

これらのことは、世の中の人間関係が希薄になっていることとも密接に関係あるであろう。子どもたちは、小さい頃から他人と一緒に喜んだり悲しんだり衝突したり、という経験を積んできていない。そのため、友だちとちょっと行き違いがあっただけで悩んでしまい、関係が修復できずに終わってしまうのである。

このようなことから、これからの学校現場では、今まで以上に人間関係づくりを意識した取り組みをしていく必要がある。生徒たちに友情の深め方や心の通い合い、集団の中での行動の仕方などを身につけさせることにより、いじめなどの抑止力も高まっていくことが期待できる。

■表6-5 友だちといるとき感じること (vol.57 表3-3・表3-4から)

	とても ある	かなり ある	小計	あまり ない	ぜんぜん ない	男子 女子	
友だちの言いなりになってしまう	3.4	11.8	15.2	51.1	33.7	12.6	18.3
大勢の友だちといると仲間はずれにあったように感じる	4.0	10.5	14.5	53.1	32.4	13.1	16.2
友だちといるとき、自分が無理をしていると感じる	5.6	17.4	23.0	48.6	28.4	20.7	25.7
人前で思っていることをうまく言えない	6.2	21.0	27.2	45.6	27.2	28.6	25.6
友だちから頼まれると断れない自分が嫌い	8.5	16.8	25.3	46.6	28.1	23.5	27.6
自分がどう見られているか気になる	11.7	30.2	41.9	38.6	19.5	34.8	50.2
友だちに気に入られたいと思う	14.8	27.8	42.6	39.9	17.5	38.2	47.7

男子・女子は「とても」＋「かなり」ある割合

3. 中学生と電子メディア

1) メディアとの接触：この10年の変化

「モノグラフ・中学生の世界」ではこれまでに何回か、中学生とメディアに関する調査を実施してきた（vol.25、vol.38、vol.58、vol.71など）。得られた主な知見は、①中学生はテレビ、音楽（CD・MD）、マンガ、新聞、雑誌、テレビゲームなど毎日、多様なメディアに接しており、②なかでも、テレビは最も身近で、主たる情報源となっている、しかも、③そうしたメディアの多くは自分専用となり、④メディアを相手に1人でくつろぎ、充足感を味わう生徒が増加している、と要約できる。

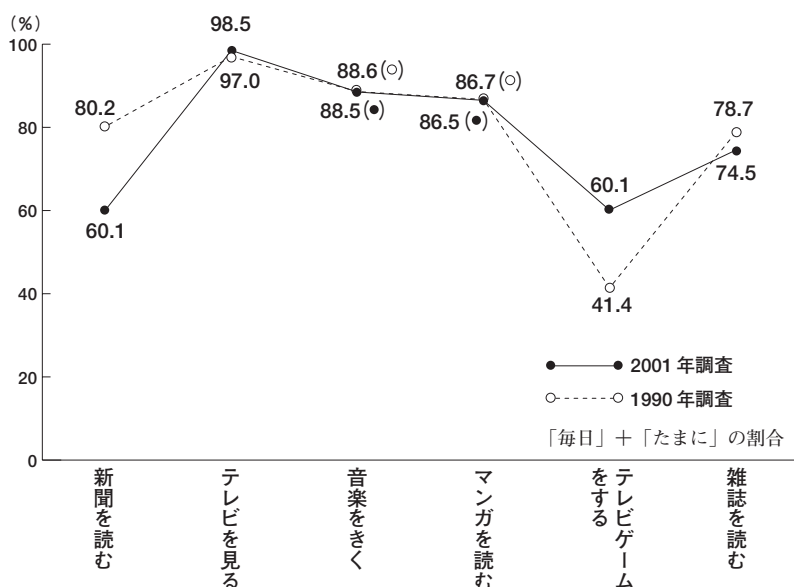
情報化の進展により、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。本節では重要なデータを振り返りながら、中学生と電子メディアについて考えてみたい。

まず、図6-4をご覧ください。これは、1990年から2001年の約10年間に中学生のメディアとの接触がどのように変化したのかを「毎日＋たまに」の割合で示したものだ。

「テレビを見る」「音楽をきく」「マンガを読む」については86%以上の高い数値を示し、この10年ではほとんど変化はみられない。それに対して、「テレビゲームをする」生徒が20ポイント近く増加（41.4%→60.1%）し、逆に「新聞を読む」生徒が20ポイント減少（80.2%→60.1%）している点が大きな特徴である。

『ファミリーコンピュータ』が登場し、『スーパーマリオブラザーズ』がブームとなったのは1980年代半ばであった。ハードとソフトの進化に合わせ、テレビゲームは子どもの生活に根づいたようであり、2001年の調査では「テレビゲーム機（携帯用テレビゲームも）が家にある」は95.0%（「自分専用のものがある」は64.6%）にも達した【vol.71 表3-2】。テレビゲームの及ぼす影響や功罪については様々な議論がある（『子ども学』vol.1 特集「ビデオゲーム」（1993年 秋号）参照）が、彼らの世代に共通する遊び、メディア体験となっている事実は確認しておこう。

■図6-4 メディアとの接触（10年前との比較）（vol.71 図3-1）



それに対して、活字メディアとのかかわりは明らかに希薄化している。新聞を「毎日読む」は39.1%から19.0%へと半減し、「ほとんど読まない」(15.4%→24.0%)と「ぜんぜん読まない」(4.4%→15.9%)が大幅に増えている【vol.71 図3-2】。「文庫本や単行本(マンガ以外)」についても、「読まない」が49.2%と約半数であり、「月1冊」が31.1%、「2冊以上」は19.7%にとどまる【vol.71 表3-4】。

書物を手にして考えることは内省的な自己を形成するうえで不可欠とされている。電子メディアは、これまで活字メディアが果たしてきた役割を担うことができるだろうか。

2) パソコンとインターネットの利用状況

電子メディアといえば、真っ先に思い起こすのはパソコンやインターネットである。中学生は新しく登場したそうしたメディアとどのようにつきあっているのだろう。

2001年の調査によれば、「パソコンを毎日のように使う」はさすがに9.7%であるが、これに「しょっちゅう」10.7%、「わりと使う」23.0%を加えると、43.4%になる。「ぜん

ぜん使わない」生徒(31.0%)も確かに存在するが、パソコンを日常的に利用する中学生はすでに4割を超えた【vol.71 表2-1】。そして、パソコンを利用する目的の第1位は「インターネットで趣味に関連した検索をする」であり、4人に1人が「よくする」と答えている【vol.71 表2-3】。

そこで、どんなサイトを利用しているかを調べたのが、表6-6である。利用率が高いのは「テレビ番組」や「タレントや歌手」のサイトであるが、これは、テレビや音楽、雑誌など従来のメディアに接して芽生えた「知りたいこと」をネットで検索する、という新しい情報行動が示されていると解釈できるだろう。他方、おとなたちが心配するような「アダルト、ドラッグ、自殺」などのサイトに日常的に接している生徒は、今のところ、数%程度にとどまっている。

ただ、ネット空間は匿名性が高く、利用するのにおとなであるか、子どもであるかを問わない。また、飛び交う情報には、真偽の定かでないものや反社会的なものも少なくない。ネットには多くの危険も存在していることを忘れず、情報を判断する力を養っていききたい。

■表6-6 インターネットのサイト利用 (vol.71 表2-4)

	あるし、よく利用している	あるし、ときどき利用している	小計	あるが、利用していない	そういうサイトを見たことはない
テレビ番組のサイト	7.7	16.7	24.4	21.0	54.7
タレントや歌手のサイト	9.5	13.6	23.1	19.7	57.2
CDなどのランキングがわかるサイト	7.0	14.9	21.9	20.3	57.8
占いに関連したサイト	3.0	13.5	16.5	23.9	59.6
おとな向けのHなサイト	2.1	2.2	4.3	10.2	85.6
中学生が悩みを語り合うサイト	0.8	1.3	2.1	10.7	87.2
ドラッグなど、ふだん手に入れない物が手に入るサイト	1.0	0.8	1.8	8.2	90.0
自殺について語り合うサイト	1.0	0.4	1.4	6.0	92.6

ところで、中学生はどこでパソコンを使っているのだろう。「使いたいときに自由に使えるパソコン」について尋ねた結果では、実に67.0%が「家族のパソコン」（「インターネットが使える」は51.1%）と答え、「自分専用のパソコン」も13.5%に達した。それに対して、学校での利用状況を確認めると、「自由に使えるパソコンがあり、インターネットが使える」が21.4%、「自由に使えるパソコンがあるが、インターネットは使えない」が18.1%、「学校には自由に使えるパソコンはない」が60.6%という結果であった【vol.71 表2-2】。

このことは、学校教育とは関係なくパソコンを自在に使いこなす中学生がいる一方で、パソコンに触れる機会すらない者もいることを意味する。家庭環境による格差と学校で行うべき情報教育の遅れが心配される。

3) パーソナルメディアとしての携帯電話

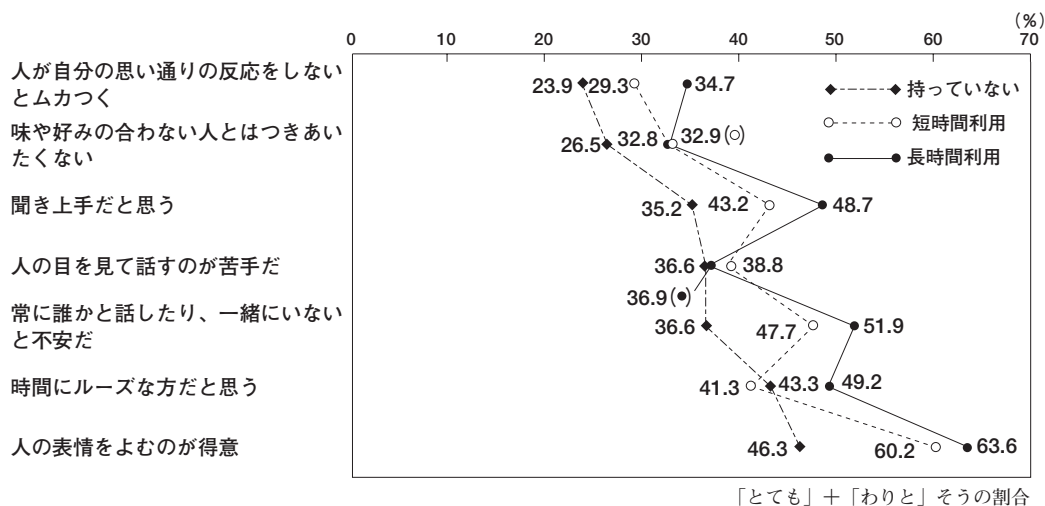
今、中学生に最も急速に普及している電子メディアは携帯電話であろう。2001年の調査では、「自分専用の携帯電話・PHS」（以下、携帯電話）を持つ者は37.6%で、男女別では

女子（男子30.1%、女子46.0%）の保有率が、学年別では3年（1年31.2%、2年39.1%、3年42.8%）の保有率が高かった【vol.71 表4-1】。この調査から数年が経過した現在、普及率はさらに高まっているに違いない。

携帯電話の使い方を尋ねると、第1位は「友だちとメールをする」（「よく＋わりと」する割合で89.7%）、第2位は「時計がわりにする」85.4%であった。「友だちと話をする」61.7%、「親に帰宅時間などを連絡する」60.5%よりも「友だちとメール」が多いことは、料金も関係するのだろうが、メールという新しいコミュニケーションスタイルの広がりを物語る。また、「携帯電話を使って情報を得る」経験も1年47.6%、2年57.4%、3年65.5%と増加しており、「携帯できる電話機」から「パーソナルな情報メディア」となりつつあることがわかる【vol.71 表4-2・表4-3】。

では、携帯電話の普及は子どもたちの意識や生活にどんな影響を与えているのであろうか。それを考える手がかりとして、「携帯電話を持っていない」「短時間利用」「長時間利用」の3群を抽出し、自己像の比較を行った図6-5をみてみよう。

■図6-5 あなたのタイプ×携帯電話の利用（vol.71 TOPIC 5から）



「長時間利用」群に着目すると、「人が自分の思い通りの反応をしないとムカつく」「常に誰かと話したり、一緒にいないと不安だ」などの数値が高く（「とても＋わりと」その割合）、自己中心的で寂しがりやの傾向がみられる。反面、「長時間利用」群は「人の表情をよむのが得意」63.6%、「聞き上手だと思う」48.7%の数値も高く、携帯電話が対人関係を円滑にするツールとして役立っているような印象もある。それに対して「短時間利用」群は「時間にルーズな方だと思う」割合が低く、「持っていない」群は「常に誰かと話したり、一緒にいないと不安だ」の割合が低いのは興味深い。

いつでも、どこでも、誰とでもつながることのできる携帯電話は確かに便利である。しかし、片時も手放せないような気分させられるメディアでもある。成長過程にある中学生には、携帯電話に引きずられない意志や環境づくりが求められよう。

4) 情報化の光と影

改めて、社会の「情報化」とはどのようなことであるかを考えると、①社会生活を過ごすうえで「情報」の果たす役割が極めて大きく、②あらゆるものが「情報」の観点から意味を与えられ、③とりわけここ数年、電子メディアや通信ネットワークの発展によって生活環境やライフスタイルに劇的な変化が起こっていること、と整理できるだろう。

そうした「情報化」が中学生にもたらす「光」は、①親世代よりも電子メディアへの親和性が高く、②インターネットを使って知りたい情報を入手したり、③メールという新しいコミュニケーションのスタイルを得たこ

と、などが挙げられる。彼らの電子メディアへの前向きな姿勢は、89.8%が「おとなになったときにコンピュータを使える能力」は「とても＋かなり」必要と答えている【vol.71表1-9】ことからもうかがえる。

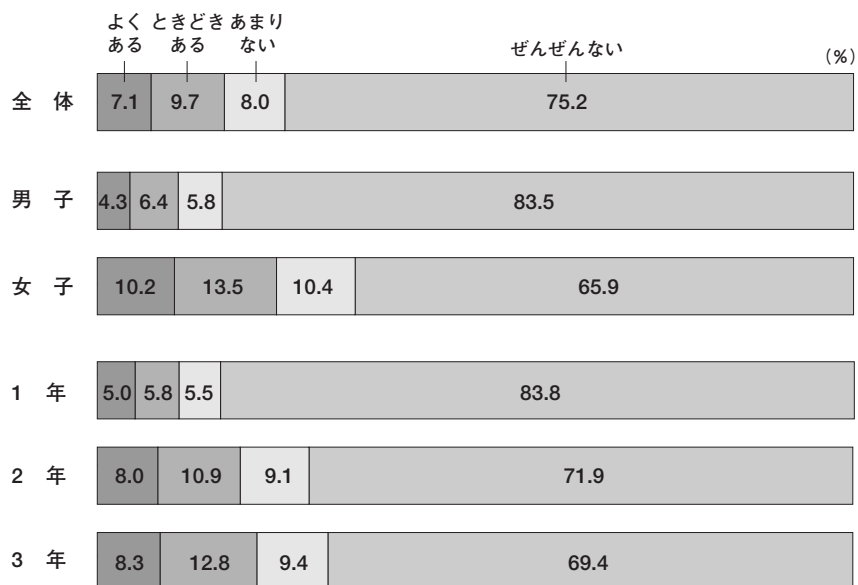
だが、「影」の部分も少なくない。本節の1)でふれた「活字メディアとの接触の減少」、2)でみた「家庭環境によるパソコン利用の格差」、そして、3)で指摘した「携帯電話長時間利用者」の「自己中心的で寂しがりやの傾向」などがそうだが、他にも心配な点がいくつかある。

その1つが、図6-6にみるような「インターネットや携帯電話、雑誌などで知らない人と友だちになった」経験である。驚くべきことに、男女別では女子の23.7%、学年別では3年生の21.1%が「よく＋ときどき」と答えている。

もちろん、「知らない人」や「友だち」のニュアンスをどう解釈するかにもよるし、メディアを活用した交際範囲の拡大と肯定的に評価できるかもしれない。だが、筆者には、メディアや得られた情報に対してあまりにも無防備と感じられてならない。関連して、情報にさらされることで情報内容を疑似体験してしまうなど、知っている情報についておとなと子どもの境界線がなくなっていることも気になる。

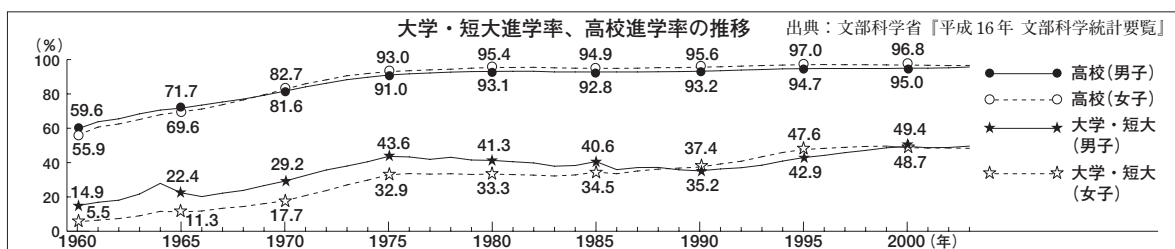
電子メディアはアクセスのしやすさや受け手が感じるリアリティの面で、他のメディアにない大きなアドバンテージがある。そうであればこそ、多様な実体験を積むことをこれまで以上に重視し、子どもたちに情報の質や意味を見極める力を育てていきたい。

■図6-6 インターネットや携帯電話、雑誌などで知らない人と友だちになった経験 × 性・学年 (vol.71 図4-7)



モノグラフの子どもたちの時代環境

	S35 1960～	S40 1965～	S45 1970～	S50 1975～
社会一般 経済・産業	東海道新幹線開業 (64) 東京オリンピック (64)	いざなぎ景気 (65) 三億円強奪事件 (68)	万国博覧会 (70) 「よど号」ハイジャック事件 (70) 浅間山荘事件 (72) 沖縄返還 (72) 札幌オリンピック (72) 日本列島改造論 (72) オイルショック (73)	ロッキード事件 (76) 日本赤軍日航機乗っ取り (77) 日中平和友好条約 (78) 第2次オイルショック (79)
教 育	高学習指導要領告示 (60) 文部省全国一斉学力テスト (61) 教科書無償制 (63)	教科書裁判提訴 (65) 小学習指導要領告示 (68) 大学紛争 (68～69) 中学習指導要領告示 (69)	高学習指導要領告示 (70) 中教審四六答申 (71)	主任制度化 (75) 小・中学習指導要領告示 (77) 高学習指導要領告示 (78) 教育委員準公選制度 (東京・中野区) (78) 国立大学共通一次試験実施 (79)
食生活・健康		初のレトルト食品 ボンカレー発売 (68)	カップヌードル発売 (71) マクドナルド第一号店開店 (71) 日本初のコンビニ開店 (74)	ファミリーレストラン (78)
電化製品・生活用品など	カラーテレビ放送開始 (60)	電子レンジ初登場 (66) 3 C (カー・カラーテレビ・クーラー) (66)		ウォークマン (79) パソコン、PC8001 発売 (79)
流行・遊び・ アミューズメント	ダッコちゃん流行 (60) ツイスト (62)	スーパーボール (65) 電子ブロック (65) リカちゃん人形 (67) 人生ゲーム (68) グループサウンズ	ボーリングブーム (71) オセロ (73) 超能力・オカルトブーム	「およげ! たいやきくん」(75) スケートボード (76) ピンクレディー旋風 (77) キャンディーズ解散 (78) インベーダーゲーム (78) 竹の子族 (79) ディスコブーム
テレビ・映画	「ロンパールーム」(63) 「鉄腕アトム」(63)	「ウルトラマン」(66) 「魔法使いサリー」(66) 「巨人の星」(68) 「ひみつのアッコちゃん」(69) 「サザエさん」(69) 「8時だヨ! 全員集合」(69)	「あしたのジョー」(70) 「ルパン三世」(71) 「仮面ライダー」(71) 「太陽にほえろ!」(72) 「ひらけ! ボンキッキ」(73)	「ザ・ベストテン」(78) 「3年B組金八先生」(79) 「西部警察」(79) 「ドラえもん」(79) 「機動戦士ガンダム」(79)
雑誌・マンガ	「おそ松くん」(62) 「少女フレンド」(63) 「マーガレット」(63)	「天才バカボン」(67) 「少年ジャンプ」(68)	「an・an」(70) 「non・no」(71) 「びあ」(72) 「ベルサイユのばら」(72) 「花とゆめ」(74) 「宇宙戦艦ヤマト」(74)	「コロコロコミック」(77) 「キン肉マン」(79)
子ども関連の事件				落ちこぼれ問題浮上 家庭内暴力顕在化



大学・短大進学率…大学(学部)・短大(本科)への進学率(浪人を含む)
高校進学率…高校の通信制課程(本科)への進学者除く

S55 1980～	S60 1985～	H2 1990～	H7 1995～	H12 2000～
東北・上越新幹線開業 (82) グリコ森永脅迫事件 (84)	日航ジャンボ機墜落事故 (85) 男女雇用機会均等法施行 (86) 地価高騰 (86) 国鉄民営化 (87) エイズ社会問題化 (87) 消費税実施 (89) セクハラ問題化 (89)	湾岸戦争 (91) バブル崩壊 (91) 育児休業法 (91) Jリーグ開幕 (93)	阪神淡路大震災 (95) 地下鉄サリン事件 (95) 大手金融機関の破綻相次ぐ (97) 長野オリンピック (98) 東海村臨界事故 (99)	九州・沖縄サミット (00) えひめ丸沈没 (01) 同時多発テロ (01) 完全失業率、初めて5%まで上昇 (01) 住民基本台帳ネットワーク開始 (02) 日韓共催W杯 (02)
放送大学開学 (83) 臨教審発足 (84)	単位制高校制度化 (88) 初任者研修制度 (88) 小・中・高学習指導要領告示 (89)	大学入試センター試験実施 (90) 学校週5日制(毎月第2土曜日が休日) (92) 業者テスト廃止 (93)	学校週5日制が月2回に (95) 小・中学習指導要領告示 (98) 高学習指導要領告示 (99)	大学・大学院への飛び入学の促進 (01) 「学びのすすめ」(02) 完全学校週5日制 (02) 小・中学習指導要領実施(02) 国立大学法人化 (04)
ボカリスエット発売 (80)			O-157 猛威を奮う (96)	SARS、鳥インフルエンザ流行 (03)
CD (82)		ポケベル流行 ノートパソコン カーナビ 液晶テレビ	Windows95 (95) 携帯電話 MD プレーヤー デジカメ	カメラ付き携帯電話 (00)
ルービックキューブ (80) チョコQ発売 (80) なめ猫 (81) 東京ディズニーランド開園 (83) ファミリーコンピュータ (83) エリマキトカゲ (84)	スーパーマリオブラザーズ (85) おニャン子クラブ (85) ビックリマンチョコ (86) ドラゴンクエスト (86) ミニ四駆 (86) バンドブーム (89) ゲームボーイ (89)	U F O キャッチャー流行 (92) カラオケ Box (92) ジュリアナ (93)	コギャル・ルーズソックス・顔黒・茶髪 (95) プリクラ (96) たまごっち (97) ハイパー・ヨーヨー (97) ダンスダンスレボリューション (98) 遊戯王 (98) キックボード (99)	東京ディズニーシー開園 (01) USJ開園 (01) お笑いブーム 韓流ドラマブーム
「オレたちひょうきん族」(81) 「Dr.スランプアラレちゃん」(81) 「E・T」(82) 「おしん」(83) 「スクール☆ウォーズ」(84) 「風の谷のナウシカ」(84)	「となりのトトロ」(88)	「ちびまるこちゃん」(90) 「クレヨンしんちゃん」(92) 「セーラームーン」(92) 「家なき子」(94)	「名探偵コナン」(96) 「ポケットモンスター」(97)	「ハリー・ポッター」(00) 「千と千尋の神隠し」(01) 「ロード・オブ・ザ・リング」(01)
「CanCam」(81) 「北斗の拳」(83) 「DRAGON BALL」(84)		「SLAM DUNK」(90)	「犬夜叉」(96) 「ニコラ」(97) 「ONE PIECE」(97) 「NARUTO」(99)	
校内暴力・いじめ・登校拒否が社会問題化	中野区中学生いじめを苦に自殺 (86) 幼女連続誘拐殺人事件容疑者逮捕 (89)	校門圧死事件 (90) 山形マッド死事件 (93) いじめ自殺多発 (94)	学級崩壊問題化 (97) 神戸連続児童殺傷事件 (97) 黒磯市教師刺殺事件 (98)	新潟少女監禁事件 (00) 出会い系サイト関連事件頻発(01) 大教大附属池田小学校児童殺傷事件 (01) 長崎県幼児誘拐殺人事件 (03) 佐世保小6女児殺害事件 (04)

合計特殊出生率の推移

出典：厚生労働省
『平成15年 人口動態統計』